

人 の 一 生

はじめに

この地域は旧荒砥村、これが昭和三十二年木瀬村とともに城南村を新設し、次で前橋市に合併したものである。然し、いまだ前橋市という感は淡い。生活のなかにはむしろ北の大胡町、柏川村、東の赤堀村、南の伊勢崎市とのつながりが強いようみられる。この村を東西に新らしい国道五十号線が走っているが、それは村人に大した影響も与えていないのではないかだろうか。南北に村を走る県道伊勢崎一大胡線、玉村一大胡線とこれに連絡した村道が村人には大いに活用されていたようである。以下この地域の人々の搖籃から墓場まで、人の一生を概観してみたい。

妊娠五ヶ月、昔は腹帯を貰つてもらえない人もあり、産泰様のお札を腹帯にはさんで巻けるのは、相当「よい家」の者であつたという。ほとんどの全県下に及んでいる産泰信仰の本社はこの地域に所在する。これについては別項信仰の部で述べられるであろうが、安産祈願の面だけなく、女性にとっては何とか心安まる縁の深い神であったに違いない。女性が外出するのは里帰りの折と産泰さんにお参りする位であつたともいふ昔であった。緑日の四月十八日、こうした女衆で賑わつた。一方ここでみられる安産祈願は、葬儀のとき産泰様から借りたあるいは六地蔵にあげたローソクを仏様にあげ、燃えつきてしまわぬうちにお産が終るよう拌むことをしたり、つるべ井戸の桶の水あかをせんじて飲んだ。然し産神としての箱神、山神などの信仰はみられなかつた。また分娩は昭和初期までは坐産で、老人はこの方が楽だと確言する。

ノチサン（ニザン）の後始末は男の仕事。「間引き」は江戸時代、せいぜい明治中頃までのことを考へていたが、この地方では五十年前まで行なわれていたというのには驚いた。それも左程不思議がられていたのかつたようで、間引きした赤兎は味噌樽の下に埋めるのが一般であった。間引きをミソツキといふ。馬屋の奥、味噌部屋の味噌樽の下という暗いところに置かれる。後産と間引き兎は同様に始末された。産泰信仰の中心地でこのよくなことが聞かれたのは、全く意外であった。

ケガレている産婦禁忌はしっかりと守られている。産後一週間井戸水は汲まず、お勝手に出ない。オボヤキまで家族も神様には諸らない。

子供が生れるとすぐ炊くオボ（ウブ）タメシに、男児の場合はコモイシその他をお膳にのせ、ウブタテサマに供え、女児は機織の匕、針道具、物差等を供える。小石としてのコモイシを供えることは、女児の場合同様に、農業を営む地域にふさわしい願いをこめた人の心が知られるといえよう。生後七日目のオヒチャにお便所廻り（オヘヤマイリ）をする所は多いが、ここでは七日目の地域と三日目に行なう地域と両者みられた。北毛の水上町では三日目にセッヂンメリをしている。

「厄」に対する関心もかなり強く、四才児が反町薬師に着物をもつて詣り、ゴマをたいてもらって厄除けをし、体の弱い子は谷竈様の弟子になつたり、虚弱兒、厄年っ子の捨て子、捨い子、三十三枚寄せの習俗も一般であった。

この地域の婚姻團は、左程広いものではなく、北部泉次の場合をみると、特にその北の大胡、柏川、宮城村が多い。それは南部地域の人に比較すれば決してあかぬけた女性ではないというが、普段からの交流が、

南部よりむしろ北部に向いていることが原因のようである。青年達の夜遊びもそうであった。

農家の場合、最近の傾向と違つて、嫁が家事の中心とならねばならなかつたことは他村同様で、時間的余裕もなく働くかねばならない運命にあつた。そうした嫁も仲人にして、親の決めた通りに嫁いだのである。その仲人も話が進まないいうちは、お茶も飲まないと云つたのである。そして赤城南麓、勢多郡一帯がそうであるように、ここでも樽立てには、男女双方に一升ずつ酒を持って行く。これがすむと嫁は婿の家に泊り、これを「足入れ」「カドイレ」といい、試験結婚的なものとして性格は意識していないようである。そして結婚の過程は婿入婚の型で

式に先立つての嫁迎え、嫁送りは、戦前までは若衆の仕事であった。そして、村境での嫁の受取りから披露まで「肝入れ」あるいは「仲人」の任務で、ここでは提灯の交換による確認が行なわれる。そしてトリムスピのあと婿は途中で逃げ出し、カワリ婿が代役をして若衆が探す習俗がある。なお昔は式の前日の結納振舞いから披露まで一ヶ月間もかかる大仕事であつたといふ。現在は行なわれていないが、

明治初年までは、式の翌日カネツケ祝いを本格的にやつていた。ホカイに赤飯を入れて嫁の実家に届け、実家ではその赤飯を近所、親戚に披露し、一部を婿方に返した。こうして心をこめて祝うと共に、嫁の実家方と婿方で結婚の確認の印とし、併せてこれがめでたいのは赤飯を媒介とした両家の正式の交際始め、贈答の印ともしたのであろうか。

死の子兆は鳥鳴き、寺にまつわる話がかなり聞かれたが、概ね他の地区と同様であつて、特別なものはない。魂よびは、多くが井戸に向つて呼びつけられるので、オヒヤクドフミは村の神社だけではなく、遠く總社神社まで行ってやつた。

死者への枕めし、枕団子、湯濯の湯わかしに間違した忌みことも守られている。納棺後仏様に四十九の団子を供えるが、これは萩塚本町のロッ

クのダンゴに相当するものであろう。これをヒソカエシナカの時、近所の人や死者の子供達に与える位牌、形見と一緒に分けることになってゐる。

穴堀りはふだんから決まりがあつて、番長板によつて四人一六人が割当てられる。死者のない組の者がこの役をつとめることになつてゐた。オタナアゲに際して下大島では、四十九ヶの餅（タチ日）の餅一寳井一をつくり、重箱又は藁のツトコに入れてお寺に納めるが、この習俗は吾妻郡嬬恋村の場合と同様である。ここでは僧侶がそのうち一ヶに梵字を書いてよこし、墓に埋めることになつてゐる。この日まで死者の魂は屋根棟にあり、この餅をつく音の音を聞いて離れると信じており、これで死者は仏となり位牌に移るわけである。「生れ代り」の伝承も一、二聞かれたが、統じて通過儀礼として特徴づけられるものは少なかつたといふよう。（池田秀夫）

一、誕 生

(一) 妊娠・出産

妊娠 妊娠することをラムといい、妊娠をハラミオンナといい、不妊症をコモタズ、ウマズメといふ。（下大屋）

妊娠したこと、主人や女親に話した。しかし、妊娠したことはかくしていた。（東大室）

妊娠したときは先づ夫に話してから姑さんには「つわりなどをみてはなつたかやあ」ということになる。（新井）

妊娠の頃がきついと男、右腹によると女、左腹によると男児。ももにくびりが二つあると次は女児、「一つあると次は男児だ」という。（下大屋）養子をもらつと実子が生れるという。これをヤキモチツコといふ。（下

腹帯 五ヶ月目の戌の日にさらしの腹帯を自分でしめた。イワタオビ

といった。(東大室)

六尺の男のふんどしをしめた時もあった。新らしく作つたふんどしを

男はじめしてもらつて、それを腹に巻いた。(東大室)

イワタオビといつて五ヶ月目の戌の日に、サラシを一丈巻いた。産泰様のお札を一緒に巻く人がいたが、これは相当「いい家」の人であつた。

サラシの六尺を巻く人もいた。(西大室)

妊娠に腹帯をしめるのは五ヶ月にはいったイヌの日。帯の中には安産のお札をまきこんだ。これはおさんばさんでしてくれた。腹帯に子どもが生まれるまではしめていた。腹帯をしていると、お産が軽くなるという。(二之宮)

五ヶ月目の戌の日にしめる。腹が大きくならないように、育ちすぎないようにといふ」と、冷えないようにする。(新井) 腹帯は、一度でも夫がふんどしとしてかけたものがよいという。(新井) するとお産が軽くなる。(新井)

五月目の戌の日に巻く。なるたけ確り縛ればいいという。初子の時は、六尺袴を巻くと軽く済むという。

昔は腹帯も買つてもらえなかつた。(箕井)

五月目の戌の日に帯を締める。お産が軽くなる。晒を買って産婆やト

リアゲバアサンに締めてもらう。(小屋原)

五月目の戌の日に、腹帯を、男が一度しめてからしめさせる。(二之宮)

五ヶ月目の犬の日にハラオビを巻く。お産が軽いようにと祈る。(下大屋)

五ヶ月になると戌の日に帯を締める。里の母が晒しを買って持つていく。(下大島)

犬の日に実家からサラシ布を贈る。犬の足あとの模様をつけたものを腹帯にしめる。これを恭祝いという。産泰様へ行つて腹帯を受けて来る

者もある。(上増田)

安産祈願・呪 産泰様に行って安産のお札を受けてきて、岩田番に巻きつけた。

旦那様の神の布切れを切つて飲むと安産になる。

つるべ戸戸の桶の水アカを飲む。

鹿の角で作つたくしきをさす。

八幡様のオサゴを借りてきて、オカユをつくり、お産に向くと産婦に飲ませる。

産泰様の米つぶを飲む。(西大室)

さんし(妊娠)はなんどにねてある。南むきか東向きにねてているのがふつうである。なんどの天井に安産のお札をはつておいた。それがみえるうちは、子どもは生まれないという。(二之宮)

産泰様をおがみお札を受けてきて、腹帯に巻いた。(東大室)

お産が無事に済むと、底抜けビシャツをお札に本人が上げた。(東大室)

産泰様は子掛けの神としておがむ人が多い。(東大室)

葬式の時、六地蔵にあげたローソクをもつて、仏様にあげる。

そしてお産がはじまるとき、これに火をつけ、ローソクが燃えつきてしまわぬうちにお産が終るるようにとおがむ。(東大室)

にわとりの初卯を飲むと安産になるといふ。(東大室)

子どもができないといふ人は、産泰様へヒンタクのヘツタを抜かずにしておがんをかける。トマール(妊娠する)ようにもうけて底を抜かないのだという。(新井)

産泰様の神様 安産の神様は、下大屋の産泰様である。安産を祈るために、産泰様へおまいりにいく。これは、産し(妊娠)が自分で行く場合もあるし、親とか近親者が行く場合もあった。そのとき、お守りをうけてきた。それを五ヶ月ぐらいから、産の腹帯の中にしめこんでおいた。

安産であった場合にはお札まいりに行つた。産泰様の大門で、ひしゃくを買って、底をぬいて納めてきた。(二之宮)

妊娠すると産婆さんに行つてオカンをかける。軽く生まれるようになると

いうので、ヒシャクのヘッタ（底）を抜いて上げて来る。

産婆さんにお参りしてローソクを上げ、一度火をつけたのを消して持ち帰り、お産がはじまるときに火をつけた。燃え切るまでに生まれるという。（新井）

お産には、十柱の神の中のお産の神というのがいる。

ホーキをまたぐとお産が重い。

ナガシモト（お勝手）をきちんととしてきれいにするときれいな子が生まれる。

便所そうちをきれいにしているときれいな子が生まれる。（新井）

産婆様のローソクを借りてきて、無事に生まれるとお礼に底抜け柄杓をあげる。ローソクの消えない内に安産するといふ。

産婆様の縁日の四月十八日は、子供を背負った女衆で大変であった。女衆には、産婆のお祭りか、庵宿うえでなければ暇が出なかつたから、楽しみみであつた。（菟井）

地蔵さんにハラカケ、帽子を供える。また産婆さんに詣る。産婆さんが最も盛であったのは明治初年までで、明治時代一ぱいはやや盛、大正からは経営が苦しくなつたといふ。（下大屋）

産婆様にお参りにいく。底抜け柄杓を上げますからと折る。四月十五日には、生まれた子を背負つてお参りにいく。（下大島）

大胡の産婆様から腹帯を借りて来て、五ヶ月目のいぬの日に掛けた。

顎果しには底ぬけのひしやくを供える。又、子持山の子持神社にも願をかけたが、子どもが生れない人が多く願をかけた。（富田）

つるべ井戸のこけを取つてせんじて飲むと安産になる。（富田）

お産陣痛が始まると、つるべの底の青苔をなめさせる。産氣づいたら、ものさしを寝床の下に、こつそりさし込む。（二之宮）

納戸の豊をへがして藁を敷いて、そこで生む。（下大島）

初産のとき普通は婿の家で産む。ナンド（へや）で産むが、ここは竹

のスガキか或は床をはつてなかつた。床を敷いても釘を打つていかない。そしてヨゴレモノを落しても捨てもよい。この部屋は死者の湯濯もある。（泉沢）

ナンドに藁を敷き、油紙を敷き、ボロを敷いて、ヌカダワラでタカマクラにして産む。トリアゲバアサンが取り上げる。（下大屋）

お産は、布団を横んで、これにうつぶせになり、天井から紐を下げて、これにつかまつて子供を生んだ。あお向けてになって寝て子供を生むよう

になつたのは、専門の産婆を頼むようになった昭和十年頃からである。それ以前は皆坐つてお産をした。（上増田）

障子の棊が見えているうちには生まれねえといい、だれもさすつてはくれなかつた。ひとりで、ふとんを積んだところにおつかかって生んだ。

相手がそばにいれば恥ずかしいもので、そばにはやらなかつた。（新井）

産部屋 ナンジヨでお産をした。疊をひつたて、ワラを敷いた。枕はヌカ枕だつた。（東大室）

ナントか床の間でお産をした。シビアトンの上にふとんを敷いて、そ

の上でお産をした。（西大室）

家のおりの納戸で生む 一週間は産部屋で御飯を食べた。（小屋原）

納戸で生む 暗い部屋である。（菟井）

納戸の暗いところで、藁とボロを敷いてやる。坐つて生んだ。力を入れるには足を踏ん張る。（菟井）

初産 この辺の嫁は、とつぎ先で産んだ。（東大室）

産婆 産婆ということは新しいことばで、ふつうにはとりあげばあ

さんといい、年をとつている知つてゐる人は腹をなせてもらつらいで、つわりがひどくても医者などには行かなかつた。姑がとり上げてくれた。（新井）

産と夫 お産のときにはそばに夫がいれば、お産のたびにいつもそばにいるなければならなかつた。「テメエ（自分の）の子を生むので苦しんでいるのだから、白を背負つて家のまわりをまわつてろ」というのでいつける

られた。(新井)

出産のときは、かみさんが大変骨を折るからといって、だんなが石臼を抱いて、家のまわりをまわったという話がある。また、出産のとき、だんながその場にいると、お産がおもいという。初子のときに、だんながその場にいれば、つきの出産のときも、だんなのいるときに出産があるという。そのとき、だんながいなければ、だんなのいないときに出産があるといっている。(二之宮)

力こめ 実家の母が、産後すぐに、白米三升、かつぶし、かんびょうを持て来る。(今井)

お産の時、女親が、里から持つていけば力がつくというので、疊節と一緒に、三升ぐらい持つてゆく。(二之宮)

子どもができた話をすると実家から「升くらいの米と、カツブシとカントビヨウを持って来た。これをちからこめ」という。(新井)
里米 子どもが生まれそになると、嫁の実家へ連絡がある。里から三升ほど米と、かつぶし、かんびょうなどをもつてくる。この米のことを里米といい、さんし(妊娠)が体んでいるちは、この米をにてかゆをつくって食べさせた。かんびょうはおつけのみにし、かつぶしは、みそとまぜてかつぶしみそをつくっておかずにして。里米でつくったことはん(おかゆ)を食べて、さんしは力をつけるというので、力米ともいつた。(二之宮)

ヘソノオ 昔は、なるだけふんでもうほうがいいといって、トボにの所にいたという。

「ソノオはとつておいた。その子の名前を書いてとつておいて、いざというとき(九死に一生の場合)に、ヘソノオをだしてせんじて飲むと、大病もなさるという。(二之宮)
ヘソの緒を切るには、細筆の軸を三つに割って、それで切った手ひとつにぎつて先を切つた。(新井)

切り方は、手の四本指の巾をティソクといい、子どもの体から三テ

イソク目、こるをミヨリガエシといい、ここをカミゴクシという結び方

で、子ども側と母側を麻で結び中央を切つた。(富田)

多くの人にふまれるようにといって、トボグチの下にいける。昔は男児のヘソノオは兵隊に行くとき、弾丸除けになるといってとつておいた

(下大屋) 桐の箱にとつておいてその子が嫁に行く時持つていった。(東大室)

屋敷の稻荷様のうしろにいける。また、取つておいて、子どもが病気になつた時、せんじて飲ませる時もある。(西大室)

人の出入りあるところに埋ける。(下大島)

墓場に持つていく。(菟井)

のちざん 胚衣は、人々が踏むところがよいといい、戸袋の下に埋める。又、味そだの下やお墓の広場に埋めた。(富田)

後産の捨て場みそだの下にうめた。馬屋の奥のところをオコマヤといい、そこにみそだるを置くことになつていた。(富田)

のちざん胚衣は、味そ桶の下に埋めた。(今井)

エナはお墓に持つていて埋ける。ママをつけて埋ける。ここでは

後産のことをニサンともいう。

昔はトボロに埋けたこともある。人に踏まれると頭がよくなると年寄りに聞いたことがある。(菟井)

イキは自家の墓場に埋める。(下大屋)

イナオキバというのが村にあって、ここでのちざんを焼いてしまった。

これは男の仕事だった。(東大室)

床下にいた時もあった。(東大室)

のちざんは、人に踏まれる所がよいといって、トボロの所にいた三

むかしは、エナを、とぶロのところ(出入り口)へ埋めろといわれた。

そのあと産婆さんがくるよつになつてから、焼場にもつていつた。(二之宮)

(西大室)

胞衣埋け場は大正の中頃、官地の払い下げられたところに作った。(下大島)

イキは、土地を持つている人は明の方に埋める。土地を持つていない人は、捨て場があつてそこに埋めた。墓地の端にある。(小屋原)

後産は方のいい方に埋けた。産湯も方のいい方に埋けた。太陽に当たないようにして埋ける。(下大島)

後産は家の出入口の土を壊って埋める。固くなるほどよいという。墓

へ持つて埋める家もある。(上増田)

妊娠の労働 妊娠しても仕事は変らず、生まれる日まで仕事をしているものだった。(新井)

産婦の食べ物 經面味噌のお数。干瓢や麩のおつけ。

甘い物は乳が上がる。油物は目が悪くなる。

唐茄子、トロロイモの側に寄ってはいけない。里芋は子供が痒がるからいけない。

野菜を食べないのでぐっしてしまった。(下大島)

オカユ、カツオブシ、ミンで一週間、産まれるとすぐ実家からカンピヨウ、カツブシ、チカラゴメ三升等が贈られ、これをたべる。(下大島)

産後の食事は制限されカツブシのみそぐらいであった。すっぽいものは悪いとされ、毎日前に出産するとしが食べられず残念だった。とうなすは吹でものが出来るし、青い野さいは一さいだめだが青くて早く食べられるものはねぎがあった。餅は強すぎるのだ禁じられた。産後に起きる病気は治らないといわれていた。(富田)

お粥に焼き塙とか鰯節味噌。いい姑だと、鰯味噌を食べさせた。鰯味噌は乳の出によいという。

お椀に朝顔茶碗で簡単な食事だったが三日目頃から乳が出た。(笠井)

鰯節味噌と千瓢のおけ。目が悪くなるといって油物は百日食べてはいけない。甘い物は乳が上がるといって駄目。(小屋原)

食べていけないものは、油もの、甘いもの、キンピラなど。お産をす

る人は、しようばいものを食べた。ミソ、カツブシなど。(西大室)

おかいにカツブシミソとカンピヨウの煮たものをくれた。(新井)

子どもを生むと、すっぽいもの、油ものを食つてはいけない。油もの

を食うと目が悪くなるという。(新井)

産後、産後は一週間くらいで、お勝手に入つて塙でもまいてから仕事

をはじめた。重いものは持たない。また神さまには手を出さなかつた。

(新井)

間引き 線に來て日数がたたないうちに生れた子は間引きする場合が多かった。また子供が次々とできるときも間引きした。間引きすることをミソツキという。間引きした児を味噌樽の下に埋めたからである。間

引きは平氣でやつていて、当然のことのようにな話題に出た。現實に六十

年程前にもやつていたといふ。(下大屋)

墮胎 境胎の方法としては、桑の木をツノッショにして、つづいて下した。またほづきの根、梅干を入れたりもした。(下大屋)

桑の木の根をせんじて飲むと子どもをくだすことが出来る。(富田)

妊娠禁忌 重たいものを持上げない。高くに手を伸すと子ズナが切れるという。(下大屋)

妊娠中火事をみると赤いアザのついた子が生れるといい、鏡を懷中に

入れる。死んだ人をみると黒いアザの子が生れる。これを死にアザとい

う。(下大屋)

子供は木のままで出でてきたといふ。(下大屋)

禁忌 妊娠が火事や死人を見るとき、手鏡でみた。(東大室)

ウサギの肉を食べるとき、手鏡でみた。(東大室)

子供が腹に入ると柿は食べさせない。(下大島)

妊娠している人が、葬式を見ると黒痣の子、火事を見ると赤痣の子ができる。鏡を持っているとよい。(下大島)

妊婦はふところに鏡をいれておく。こうすると、子どもにあざができる



女のウブギ—昭和10年に着たもの



男のウブギ—昭和8年に着たもの
(上増田) (中村和三郎 撮影)

ないという。(二之宮)
チブク(チボク) むかしは、百日の間は風呂に入るものではないといつた。この間は、産しは行水をつかっていた。また、この間は、旦那のそばへも行くものではないといった。(二之宮)
お産の道具 日に当てては勿体無いといって、日陰に干した。(下大島)
産婦の汚れ物は、洗濯して陰干しにする。(小屋原)
産婦はケガれているとして一週間位井戸水を汲ませない。(下大屋)
産婦が外便所に行くときは日に当たらないように笠を被つていった。(下大島)
(下大島)
布団の下に物指を入れておくと、あとばらがやめないという。(二之宮)

つかつていて、お七夜がすぎると、とよりが風呂に入れた。お七夜がすむまでは穴を埋めなかつた。また、お七夜までは、お天道様のあたるところに、洗濯物を干してはいけないといった。また、血ぶくのうちに、さんし(産婦のこと)は、傘をさして便所(むかしは外便所だった)へいったという。(二之宮)
うぶ着 出世がらといって、麻の葉の柄のを、男は赤、女は水色のを作る。一枚買っておく家もある。(二之宮)
オボタテノメシ 子どもが生まれるとオボタテのご飯を炊く。「ご飯とお汁のほかに、男の子の場合はコモ石(依みの石)をお腹にのせて、子どもの枕もとに置く。女の子の場合は、機織りのヒをのせる。(東大室)
オボタテの飯は、出産してすぐコモ石をお腹の上にのせて、神棚に供える。(西大室)
生まれるとウブタテ飯をすぐに炊き、トリアゲバアサンや寄つた人に食べてもらう。(下大島)
ニサン(のちざん)が終るとすぐにだれかに飯をたいてもらつて、寄つてある。(集まつている)人たちに食べてもらう。(新井)
生れるとすぐ、膳の上に、おかしらをつけ、こもしといい小石を供える。これは男の子が力持になるようにとの意味がある。又、女の子の場合は物差しを供える。(富田)
ウブタテママ 出産するとすぐに、お産の神様である「ウブタテママ」に供え物をする。膳の上に、男は筆、小石を供え、女は針道具、紅、お白粉を供える。(今井)
赤ん坊が生まれてすぐ炊くのがオブタテノゴハンである。お産をすませて、きれいにとりあげてもらって、おみき(ご神酒)をいただいてから、み

んなで食べた。これは米のめしで、なるべく大勢のものに食べてもらおうといふ。炊くのは誰でもよかつたが、手伝いのためにおばあさんたちが来ていた。(二之宮)

お産見舞 子どもが生まれると近親の者や組内の者は、お産見舞に行く。昔は八尺か一丈ものフランネルのキレ(布)を持って行つたが、現在はすべて金壺封(きんこつとう)といふことになつた。(新井)

お便所回り 三日目に近所三軒の便所を回る。オサゴを持っていき、便所の上り下り端におく。その時、アチャ前(アチャマツシ)に橋を渡ると乳が出が悪くなると

いって、橋は渡らない。留守番の女人などが、赤ん坊の額に、女の子には紅、男の子には墨をつけてくれる。「クライボシ(乳)を付けてくれべえ」といつて付ける。

オサゴは少し余計に持つていて、近所の子宝に恵まれない人にやつた。それをお粥にして食べるといふ。(筑井)

生れて一日目。近所三軒の便所を回る。オサゴを持っていく。額に、

男はスミ、女は紅を付けてもらう。

この時、石橋を渡つてはいけない、乳が止まる。(下大島)

お七夜に三軒ぐらいの便所を回る。オサゴを持っていき、女は紅、男はスミを額につけてもらう。オサゴはオヒナリで三度投げる。そして手を合せて拌む。

橋、ことに石橋を渡ると乳が上がるというので渡らない。(小屋原)

生れて三日目に、おばあさんかとりあげばあさんが、額に男の子なら墨で、女の子なら紅で大字を書いた赤ん坊をだいて、自分の家を入れて三軒の便所にお参りする。雨が降つて四日めになると四軒、五日めになると五軒になる。(富田)

オヒヤ参りは近所の三軒の便所をオサゴを持ってお参りする。男の子にはスミ、女の子には紅をつける。ひっこみじあんにならないようにする。(新井)

生れて七日目にオヘヤマイリをする。家と近所二軒、両隣に一生世話を

になるので、半紙におさこ(米)を包み、家で男の子には墨、女の子には紅を額につけて便所参りをする。(富田)

子どもを抱いて、自分の家や放所の家の便所参りをする。その時、男の子ならスミを、女の子ならベニをつけてもらう。

この日まで産婦はお勝手にさがるなどいわれていた。(東大室)

また子どものオムツは日向に干してはいけないといわれていた。

赤飯をたいて近所へ導る。また子どもを抱いて便所参りをする。オサゴを持って近所の便所を一・二軒廻つた。(西大室)

お七夜 赤飯を炊いて、トリアゲバアサンを呼び、お札をする。

名前を付ける。名前を三つ書いてお福荷様に上げ、子供に引かせる。

名前は、本を見たり、神主、坊主に付けてもらつたり、祖父の一字をもらつたりする。(下大島)

トリアゲバアサンに、赤飯をつけてお札をする。バアサンはお七夜まで毎日お湯を浴びせにきててくれる。(筑井)

この日に子どもの名前をつける。名付親には、本家のおじいさんなどをたのんだ。いくつかの名前のの中から三つの名前をえらんで、半紙に書いてよつて大神宮様にあげておき、うちの子どもにひかせて名前をきめた。これはさすがに名前だよと、きまりが早かった。

この日には、福荷様とか、隣家の便所(三軒ぐらい)、本家などをまわつた。赤ん坊に着せるものは、それほどあらためたものでもない。また、真綿の帽子をかぶせた。つれて行くのはおばあさんなど、近所の家では、男の子には墨で「(三つぼ)」を額につけてくれた。女の子には紅をつけてくれた。

この日は、赤飯をふかして、お産見舞をもらった家にくばる家もある。(おぶやきのときにおかえしをする家もある)(二之宮)

ヒトヒチヤに産婦は髪を洗つて赤飯をふかして祝う。赤飯はシユウトが作つて、実家からも来る。ヒチヤのオコワ(オコワ)といふ。とりあげばあさん、

親類、見舞をくれた人に配る。

この日名前をつける。神主につけてもらう家もある。そしてつけた名前を書いて表座敷に張る。また近所一・三軒の便所を廻る。廻った家の人が、女兒は「二、男児は額に墨をちょっとつけてやる。(下大屋)

出産後七日目に実家の親元から力米として三升、かつぶし、わかふうが届けられる。(富田)

茶碗の糸尻にお湯を入れて、その湯で、子どもの頭を刺す。始めて刺るんだから、仏様の御利益を、おすそわけしてもらう意味じやないか。(二之宮)

産毛はお七夜の日に、産婆さんがそつてくれた。そのあと便所まわりに出かけた。むかしは、やつこにしたという。七つになるまでは、糸びんやつこにしておいたとい。(二之宮)

命名(二つか三つくらいの名を考へて、紙に書いておいたりさん)あげ、そのうちから小さい子どもにひつひかせて決めた。(東大室)

産婆様の神主につけてもらった。(東大室)

名前が決まると紙に書いて神棚(大神宮様)の下に張る。(東大室)

お七夜に赤飯を炊いて祝い、名前を伺う。三つ名前を書いて、稻荷様に供えて引く。誰が引いてもよいが、主に子供に引かせる。名前は大神宮様の下にさげる。それから役場に届ける。(箕井)

お七夜に、名前を五つ位書いて紙袋にして稻荷様に上げる。それを子供に引かせて付ける。(小屋原)

家によつては神主さんにつけてもらうもあるが、しゅうとさんのがつけるのが多い。お七夜に半紙に書き、神だなの前にはる。おこわをふかすくらいのことをする。(新井)

男子の子がほしいときは、生れた女の子に「トメコ」とつけると男子の子が生まれる。女の子をドメルので男子になるのだとい。(板土井)

弱い動物の名を付けた。トラ、ウシなどと付けた。名付け親とは親子の付き合いをした。

女の子ばかり続くとつぎお、米吉というよな男の名を付ける。次に

は男子が生まれる。

もうおしまいにしようとする時にはトメ、スエとつける。スエと付け

て又生まれたのでトメとつけた。

女(男)ばかり続いて、男(女)の子がほしいとアグリとつける。ア

グリは女に多い。(下大島)

名前は親かおじいさんがつける。名前を書いた札を何枚か机の中に入れて稻荷様にあげて、学校に入る前の無心な子供にひかせた。(下大島)

男児(又は女兒)だけのときに女兒(又は男児)を欲しいというとき、それまでの最後の子にトメという名をついた。(下大島)

ナベという名をつけると子供が丈夫に育つ。子が何人も死んだ家でやつた。(箕井)

子が何人も死ぬので、女の子に男の名を付ける。(小屋原)

オボヤキ 男の子十九日、女の子二十一日めにする。現在は、男女とも三十日めになつてている。

この日、赤飯をふかして、うちうちの人に寄つてもらいお祝いする。

また、子どもにはオボヤギを着せて、身内のものが連れて大室神社にお参りをする。

この日まで、子どもを連れて石橋を渡つてはいけないとわられた。(東大室)

男、二十一日、女は十九日。神社にお参りする。それまではブクを着

てゐるので、家族も神社にお参りできない。

ブクを着てゐる内は、危険なことをしないようだといふ。

産見舞をもらつたところへ赤飯を配つた。(箕井)

実家の親元から、男の子は十九日目、女の子は二十一日目にオボヤギが届くのでこの着物を着せて村の神社にお参りをする。家の者が連れていいく。弱くなれば嫁は赤飯を持って実家にお客に行く。(富田)

男十九日、女二十一日目を、オボヤキといつて、神社参りをした。

また、この日まで石橋を渡ると乳が出なくなるといって渡らなかつた。

(西大室)

男は生後十九日、女は二十一日にする。赤飯を炊いて、お祝いを貢つた人にお返しとして配る。

嫁も里方に御強を持つていく。

子供は祖母に連れられて、鎮守の稻荷神社にお参りする。(小屋原)

男の子十九日目、女の子二十日目がオブヤキで、産婦はこの日まで体を洗つても風呂には入らなかつた。

この日、実家から産着が届けられるとそれを着せて神社にお参りする。

おこわをふかして、お産見舞をくれてくれた家へくる。(新井)

男は二十一日、女は十九日目に、近所三軒の便所を廻る。額に、口紅で天ばしをつけてもらう。(二之宮)

オボヤは生後男児は十九日、女児は二十一日、実家から贈られた着物

(ウブギ)を着せ、神社に詣る。このときトリアゲバアサンがついていく。

く。またこの日赤飯をふかし、お祝いをもらった家に配る。オボヤ前に橋を渡ると乳が出なくなるともいう。(下大屋)

お産をして一週間め、うぶやきに、井戸神様におさこをもつていて

たのんで、井戸に行きはじめめる。それまでは井戸に近づいてはならないといわれて、青物なども口にできなかつた。井戸神様のつぎに、おいな

り様にお参りする。(富田)

食べ初め 嫁の里から、茶碗と箸などの一式を揃えてくる。男・女とも百十日にする。御飯を二粒か三粒食べさせる。(下大島)

生後百十日。お膳にきれいな小石をのせ、御飯を一粒たべさせる。歯が丈夫になるようとの意である。又この日箸、茶碗を買ってやる。(下大屋)

男女とも百十日にする。百日の食い初めを十日のばすのは、食いのばすという意味である。

御飯を神棚に上げて食べさせる。石のオカズなどはない。(筑井)

生まれてから百十日めにやる。嫁の里からお膳が贈られる。ごはんをいく粒でもよいから食でさせるようにする。(東大室)

生まれてから百十日目に行うが食い延ばすほどよいといわれ、日を延ばすことがある。この日、いくつぶでも一飯を子どもに食べさせた。(西大室)

実家より、箸とわんが届けられる。くいぞめの日は百十日であるが、この日に行なわないで何日かのばす。そうすることにより一生がのびるものだといわれた。(今井)

男女共生後百十日目にする。この日までに実家の親元から、膳、おやわん、汁わん小皿が届けられ、これに盛りつけ白米を食べさせる。(富田)

生後百十日にする。子どもの茶わんと箸を買う。ふつうのめしにおかしふりをつけでお膳をつくり、何粒か子どもの口に入れてくれる。(新井)

男女とも百十日目にする。そのとき、嫁の親元から茶碗、箸などを買つてよこす。お膳をつくつて、おかしらつきをつけてやる。赤ん坊には、一粒でも一粒でも食べさせるまねをする。(二之宮)

節供の贈りもの 男の子の場合には、むかしは里とか近い親戚からのばかりがおくれた。のぼりには贈り主の家の紋所をつけた。そのあと、吹き流しがおくれるようになつた。吹き流しには、贈り主とともに死方の紋所をつけた。暮には、お歳暮として、男女とも掛軸がおくれた。

女の子の場合には、嫁の里とか近い親戚から、おひなさまがおくれた。(二之宮)

赤ん坊の着物 これは嫁の親元から、下から上までもつてきた。しょんべんきもんからおしめまで、肌着から上着までもつてきた。(二之宮)

カナババ 授乳は四日目位、この間に縄にしめして番茶をくれる。そ

してホオズキをしゃぶらせてムシを切るといった。カナババが沢山出たから丈夫だという。(下大屋)

マクリ 赤ん坊が生まれてすぐ飲ませるのはマクリ。これは医者からあらかじめもらってきておいた。まくりを飲ませると、カナババといふまくろの大便が出た。マクリを飲ませて、カナババをはらってしまうという。このあと、母親の乳を飲ませると、いい色の便が出た。(二之宮)

乳づけ ムシが切れる、というので、ホオズキの根を煎じた水を脱脂絲に浸しが一ゼにくるんで吸わせるとよく吸つた。

マクリを薬局から貰つて来てくれる人もいる。

カナババひるまでは母乳はくれず、サトウ水をくれた。一昼夜もたてば真剣に吸うようになるので乳が出るようになる。(新井)

乳 トサヤンという人は、乳が出ないという人の乳を吸つて吸い出してくれた。吸い方があるので、この人が吸つてやると出るようになつた。

タキサンという人は、出ない人の乳をよくもんぐれながら、この人がもんぐれる今まで出なかつた人でもヒヨウグルようになつぶり出た。(新井)

母乳の出ない時 うんと出る人の乳を貰つて飲ませると、お米を冷やしてシラジで磨つて、スリエにして、砂糖を入れて飲ませた。(笠井) 乳のでがわるく、ミルクや牛乳もない時代には、よいよ足りないとには、米をひやしておいてそれをこりこりすり、すりえを作つてのませた。生まれたばかりのときには、よくうれたほおずきをもんぐるといつちゅうちゅうとおいしげにすつた。にがいのはかわいそつた。

(富田)

イジメ 蟻などで忙がしい時は、子供が歩くようになるまではイジメ(葉を作つた)に入れて放つておく。オシャブリとかガランガランぐらいをやるだけであった。これは明治頃までのことで大正になるとみられ

なかつた。(下大島)

生後一年—一年半位は、桑つみざるの中に坐ぶどんを敷いて入れておく。(下大屋)

オブスナ笑い 型坊が寝ていて笑うのをいう。オブスナ様がチヨウンをくれたのだといふ。(下大屋)

生まれて間もないころの赤ん坊がねむつていて笑うことがある。これは産土様がちようして(あやして)笑わせるのだといふ。わかつていて笑うのではないといった。これをウブスナワライといった。(二之宮)

赤ん坊の機嫌 型坊の機嫌のよあしについて、つぎのようにいつている。

赤ん坊がよく泣く場合には、今日はサルの日だから、サルにひつかれてなくんだろうとか、機嫌がわるいのだといった。

赤ん坊が、おとなしい場合には、(今日はウマの日だから、ウマが守りをしてくれた)で機嫌がよかつたのだろうといった。(二之宮)

夜泣き にわとりのおんどりを泣きにかけて家の入口に張つておくと治る。又、「さるさわの池のはとりの狐なく、狐なくとも我が子泣くまじ」という歌を天井に張つておくとなおる。(富田)

北宿の夜泣き観音にカワラの器を供えると夜泣きがとまる。金鳥居も



夜泣き觀音 (西大室)
(金子律一郎撮影)

原組の地蔵様
に もお参りをし
た。
大間々のドウ
リュウ様にねじ
れつ木を上げて
お参りをした。
(西大室)

子どもが夜泣

きしてねむらないときは地蔵さまにおまいりをする。また、ヨダレを作り、掛けてやる。(東大室)

にわとりのとさかの絵を書いて、それをさかさにはつておけばよいといふ。(二之宮)

初誕生 誕生まで歩くと餅を揚いで、背負わせて転がす。歩かない場合は赤飯をふかすだけでよい。(下大島)

誕生餅をつき(丸い白いアンパン餅)五、六ヶ重箱に入れ、疊の上で赤坊に背負わせる。五つ入れて背負えるのは早生だという。歩けなれば実家に餅をもつていく家もある。(下大屋)

誕生餅をついて子どもに背負せる。(東大屋)

初の誕生日には餅をついて子どもに背負せる。子どもは歩けないからころんと餅をつぶす。この時の餅はつぶれるほどよいといわれた。(西大室)

餅を揚いで背負わせる。(箕井)

餅を揚いで背負わせてつぶす。昔はお誕生に歩いた子は少ない。(小屋原)

歩ければ餅をついて実家に連れて行くが、この日餅がまで餅を背負わせる。

餅を揚いで背負わせてつぶす。昔はお誕生に歩いた子は少ない。(小屋原)

誕生日には餅をついて子どもは母親の里方へお客に行つた。里方からは、はきものが祝いとしてとどけられた。

誕生までに歩けると、里方へもちをもつていった。歩けない場合には赤飯程度。誕生日には、子どもに誕生もちを背負わせた。むかしは、誕生日にあるけるのはすぐなかつた。(二之宮)

初誕生の日には、もちをついて誕生日に歩けばもちを背負わせる。力だめしというが、昔の子はなかなか歩かなかつた。(新井)

初節供 女には雛、男には戦。今は男の子には、吹き流しの真鯉、抹鰯。お返しは、三月の節供に赤と白の二の入った餅。五月には柏餅。(小屋原)

女の子にはお雛様。男の子には戦(鍾馗大臣)、雛、吹き流し。昔は戦(下大島)(箕井)

初正月 御歳暮として、ハマユミ、カケジを嫁の里で贈る。(下大島)

危険け 四才になると反町の薬師さまへ危険けに行きお祓を受けた。本人が行けない時は、代りに着物を持っていて、おかんでもらう。(下大島)

厄年 反町の薬師様にお参りする。新田義貞の城跡にある。(下大島)

男女共厄年には正月八日ゴネンシ日(年始)に寺でごまをたいてもらひ危険けをする。

四才になると反町の薬師様に子供を連れて詣り、チャンチャンコをもつて供える。そしてゴマをたいてもらう。(下大屋)

厄年 反町の薬師様にお参りする。新田義貞の城跡にある。(下大島)

男女共厄年には正月八日ゴネンシ日(年始)に寺でごまをたいてもらひ危険けをする。

四才の子どもも同じく厄落しをする。女の三十三才の厄年には腰病氣にならないようとに「うろこ」形の模様のある帯を親が買ってくれた。

又、いぬ年の日に下帯を親に買つてくれると死そこないなく上手に死ねるとされていた。同じく、六十年目の寅年に赤い腰巻を買つてくれると死にそこないといわれていた。(富田)

春竜様の弟子 体の弱い子は、春竜様のお弟子になるとよいといつて、毎年お参りいく。(箕井)

七つ坊主 春竜様に願をかけ、願果としてそれまで坊主頭であつてこの辺では、子育ての神様は太田の春竜様であるとして信仰した。(二之宮)

子どもが素直に育つように、大間々のドウリニウ様に、ネジリツ木をあげておがむ。

気持のねじれている人を「あの人はドウリニウ様みたいだ」という時

がある。(東大室)

呑竜坊主 七つの年になると頭をきれいに剃りてしまつて呑竜さんに
お参りに行き、そのあとはオカッパにした。ナツ坊主である。

弱い子はオガソをかけて呑竜坊主にした。イソツ坊主もある。(新井)
七つ坊主 ちょっとひ弱だと、太田の呑竜様へ願をかけ、女の子も、
男の子と同じ髪にしておく。(二之宮)

ちん毛 ほんのくどの毛を剃り残しておくと、転んだ時に、神様が起
してくれる。(二之宮)
子どもが学校へ上がるまでくらいは、こめかみの生え下がりの毛を少
し残して、でっぷんはお皿のように残して、ブンノクドも残してあとは剃
た。

鼻血が出たときはチンケを一・三本抜けば止まるといわれた。(新井)
ポンノクボのところにすこし毛をすりのこしておいた。これをチンケ
という。チンケは、子どもがころがったときに、呑竜様がこれをひつぱつ
て、おこしてくれるといふ。また、鼻血が出たときには、チンケをひつ
ぱれば(ぬけば)鼻血はとまるといつた。(二之宮)
サカヤキ サカヤキのきらいな子にはカミゴカ(上後架内便所)の
便所ゾウリの上に盆に水を入れてのせ、この水を使ってサカヤキを削れ
ばいやがらない。(新井)

体の弱い子 タワラーベシに乗せて、三本辻に捨てる。近所の人に捨
てもらう。
生れつき弱い子は近所に捨て、捨つてくれと子め頼んでおいて捨つて
もらう。これをヒライコ、ヒロイツコといふ。(下大屋)
弱い子が生れたときは、子どもが丈夫に育つた家へ行つて着物をも
らつて来て着せると丈夫に育つといわれ、その通りやつた話を知つてい
る。(飯土井)

鬼つ子 生まれた時に歯が生えていた子。三本辻に捨てる。十月目に

生後六ヶ月前に歯が生えるとオニッコといい、初誕生前に立つ子をワ

セッコといふ。(下大屋)

はじめての歯が一本だけしかはない子は、鬼つ子といつて、三本辻
へつれていくつてすたといふ。あらかじめ近所の人などには話してお
いて、その子をひろつてもらつた。(二之宮)

歯がはえて生まれた子はオニッコといい、生まれた子は三本辻に捨て
る。親せきか近所の人すぐに拾つてもらう。見ていて拾う。

歯が一本生えると鬼つ子といつて、三本辻に捨てる。赤飯を炊いてお
重に入れて近所の人に捨つてくれるよう頼みにいく。捨てる場合は、
タフラッペシを持っていき、その上に子供を置いてくる。(小屋原)

厄年つ子で生れた子が、一本歯が生えたときは、三本辻に捨てる。近
所の人が拾つてくれることになつてゐる。(飯土井)

厄年つ子は捨てる。男は二十五、四十二才女は三十三才のときの子で、
生まれてすぐによる。(新井)

歯が一本生えたとき、三本辻に捨て、捨つてもらつた。また、月また
ぎに歯が生えてもいけないとわられた。例えば五月から六月にかけて歯
が生えるような時。(西大室)

一本歯がはえると、ミの中に入れて三本辻に捨てる。そして、あらか
じめ頼んでおいた人に捨つてもらう。(東大室)

体の弱い子を三本辻に捨て、丈夫に育つ家の人に捨つてもらう。(新井)
体が弱いと三本辻に捨ててくる。丈夫な子のいる家で慈意な人に頼ん
で捨つて貰う。お札を持つて貰いにいく。(下大島)

捨い親 オニッコや厄年つ子はすぐに捨つてもらうが、捨い親といつ
て、長い間子どもは行つたり来たりする。(新井)

三十三枚よせ 子どもの体が弱いと、丈夫に育つように、三十三軒の
切れを集めて、着物を作つて着せた。(二之宮)

子どもが弱い時、三十三軒の家から布切れをもらつてきて、ハギ合せ、
着物を作つて子どもに着せると丈夫に育つといわれた。(西大室)

三十三軒から布切れをもじり着物を作つて着せると子供が丈夫に育つ。(芦井)

三十三軒寄せといって、三十三軒から布を貰つて着物を作つて着せる

と丈夫に育つ。(下大島)

裏表纏つ子 坊さんになるとよいという。勝の緒が首に巻いている子は丈夫にならないという。(小原屋)

厄年子 男二十五才、四十二才の時の子供を厄年子といい、三本辻に捨てて他の人に拾つてもらつ。女の厄年はかまわない。双子の場合も同じく捨てる。このとき拾い上げた人が「拾い親」となる。(今井)

三十三才の厄年子は三本辻に、儀のきようばし(儀の上下の置い)の上に坐らせて捨てて来る。他の人に拾つてもう。十九才の厄年の時の子は大きくなつて役に立つ人になるか、役に立たないか、極端に分かれた人となる。(富田)

厄年に生れた子をヤクドシッコといい、弱い子が多く、役に立たないという。(下大屋)

役に立たないという。(小屋原)

子守り 農繁期には学校へ七、八人も子どもをおぶつて行つたもので、出席をとるときは教室に入つてゐるが、すぐに外へ出されるから勉強にはならなかつた。(新井)

ハダツコ まだ歩かない赤ん坊は、朝、母親と一緒におこして、いやんこだけで、はだっこ(着物の下に赤ん坊をいれて背負うこと)におんぶして、朝飯の仕度をした。仕事がすんでから、赤ん坊に着物を着せた。(二之宮)

トウロッコ(灯籠つ子) 舞台組、荒宿組の二組の子どもたちは、赤坂薬師(八月七日の祭)に、おれをもつて荒子村中をまわってお金をもらい、灯籠を上げる。小学校三年生から中学三年生までの子ども組で、中学三年生が才配をふるつて世話をする。灯ろうは、大灯ろうと小さい

もの五十個あり、紙をはり直して、絵をかいたりしてつくり上げ、天気がよければ竹竿をたててやつた。もとは十間、二十間おきに道筋に立てたが、現在は神社のまわりに立っている。
集まつたお金は、子どもちで分配するが、大きい子が高額、小さい子は少しになつてあるようである。大きい子はトウロッコの行事が始まると、資金を出し合つて準備をするのが例になつてゐる。

八坂さまの灯ろうは七月二十七日

薬師さまの灯ろうは八月十五日(荒子)

庚申さまの灯ろうは十月十五日(荒子)

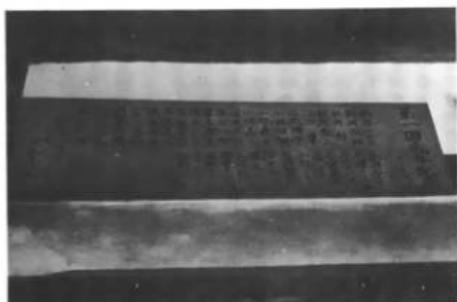
一一、年 祝

年祝 女子には十

三才位でツキノモノ
が始まると腰巻をく
れ、男子には十六、
七才位になるとラン
ドシをくれた。

(下大屋)

七十七才の喜寿の祝いのときは家で火吹竹をつくつて、親類縁者にへくばつた。もし火事があつた場合には、この火吹竹で火元のほうにむかつて吹くと、火の子がとんでこない



第一回成年記念—今宮八幡宮拝殿(下増田)

昭和二十三年四月十五日、成年者一同

(中村和三郎 摄影)

という。

八十八才の米寿の祝いのときは、子どもとか、孫が出しあいで、赤い着物、頭巾、足袋をつくるてくれた。（二之宮）六十才の祝いはあまりやらない。やるとしても子どもたちが集まつてやる内祝いくらいだった。

七十七才のときは子どもや近親者をみんなよせて（集めて）祝う。吹竹をつくつて近所隣りに配る。もらつた家では神だなに上げておき、火事のときに風向きがこちらの方へ変わらないように吹くという。八十八の祝いは赤い帽子、赤いチャンチャン、赤いザブトンで祝う。（新井）

七十七のお祝いをするとき死ぬからしないでくれといふ。やる場合には、吹き竹を配つた。八十八の時には、赤い頭布とチャンチャンを孫や子が作つてやる。（箕井）

七十七の祝いは、吹竹と腰巻をつくつて配る。吹竹は半紙に包んで水引きをかけ、神だなに上げておく。この吹竹は、火事が隣りにおきたときは、これで吹けば火が来ないといわれ、二ノ宮で火事があつたときこうしたら助かったという話がある。（飯土井）

八十八の祝いめつたに祝うことができないが、祝いのときは赤い着物に赤いすきんをつくつてやるといわれる。（飯土井）

厄年　二月の年取りに、お寺で厄年の人が豆を投げて、厄除けをする。厄年は男が二十五才、四十一才。女は十九才、三十三才。（箕井）

女は十九才と三十三才。男は二十五才と四十一才。厄年には普請などしないようにといわれている。（東大室）

男は数え二十五才と四十二才、女は同じく十九才と三十三才のときが厄年という。むかしは、一月七日に神社でお神樂をあげて厄除けを行つた。

このとき、厄除けとして浪花節などをした。近在のものがそれを行つた。また、一月一日が大師様の縁日であるが、この日下増田の蓮華院で厄おとしをしてくれた。ここへ厄年の人はおまいりに行つた。この日万才などの余興があった。その日、むらのお寺でもとどりの日に厄おとしをしてくれるようになつた。

四つの子どもは、男女とも、一月四日に新田郡の反町薬師へおまいりに親がつれていた。もし、このとき行けない場合には、その子の着物をかわりにもつて行って、おがんでもらつた。

厄年の場合には、前やく、本やく、あとやくと、三年は気をつけろといふ。厄年を無事にすごすと、「厄のがれでよかつた」という。（二之宮）

女は十九、三十三。男は二十五、四十二。年取り前に餅を揚いて、神様に供えたり、近い人に配つたりする。

餅をやると堅いねえといわれるし、余所村からもらったことが無いから、箕井だけのことかも知れない。（箕井）

厄年の人が寄つて、義太夫とか浪花節などを呼んで村の人に見せる。正月のナクサの頃、この村の年始日なのでそれに合わせてやつた。終戦後はやらない。（小屋原）

女十五、三十三才、男二十五、四十二才が厄年である。厄落しには、三代夫婦三代にわたつての三夫婦そろつた家の三ヶ日に供えたオソナエをもつて食べると、クツメリカセ（百日ゼキ）やハシカが軽くすむという。（飯土井）

厄年　二月の年取りに、お寺で厄年の人が豆を投げて、厄除けをする。厄年は男が二十五才、四十一才。女は十九才、三十三才。（箕井）

厄年には普請などしないようにといわれている。（東大室）

（新井）

厄おとし　厄おとしにはたまには川崎大師か成田山へ行く人もいる。

三、青年集団

青義会—青年会 大正末期～昭和初期にできた。小学校高等科（半数以下のものが進む）或は尋常科卒業から入る。数え年十六～廿五才、長、次男を問わない。特別会員は三十才まで。加入については会長に予め話しておき、翌年一月三日の新年会のとき、会長が入会を紹介する。

兵隊検査後はワケーシとなる。これに対する検査前者はコワケーシという。会員は五、六〇人いた。普通は村で一～三人が兵隊になつた。そして入営一ヶ月前から「入営官○○○君」と書いた、役場でくれた旗を庭に立てておいた。入営者は馬で駒形まで行き、ここで汽車に乗つた。

この会は荒砥村十一と太字にそれぞれ会長（支部長）がいて、その上に團長がいる。会では道路普請、川原普請、祭、獅子舞の中心になる。会の資金は神社裏の畠（二反歩余、青年畠といふ）に甘藷、小麦を栽培し、収穫すると前橋に小売りに出た収入によつた。（泉沢）

青年会 荒子神社の工地を借りて青年会の試作地としていろいろ栽培説明を青年にやらせる上手な人もいた。（泉沢）

遊び

青年相撲 夏に土俵を泉沢字久保の四辻の畠に作り、常設土俵のようになつて、普通の日でも、夜行つては相撲をとつた。他村からも来た。ここには酒屋が近くにあつたので、相撲をとつてはそこに行つて、たべたり飲んだりしたものである。相撲大会は神社の庭、新井の稻荷様の庭でやつた。東やシモにはなかつた。

拂押し 青年畠の仕事に出た時やつた。

夜遊び 大胡の明武館（劇場）で映画、芝居、浪曲、寄席などのあつたとき行き、はねあと女性を家まで送つていく。道中で話がまとまつたり、その後話する機会を作る。そしてそのあと家に行つたりした。娘を送るのはおつびらなことで、送つてからに着いたら夜があつたと

いうこともある。そして朝食刈りなので、寝る間もなく出て行つた。娘を送るは中でも、男は絆五〇センチ、高さ七〇センチ位の草刈カゴである。こうした中でも、男は絆五〇センチ、高さ七〇センチ位の草刈カゴ一杯、更にその上にカサカケ山盛り、繩で結えてしゃつてくる。これがヒトセの量で、盆前はフタセも刈つた。盆の十六日朝は、朝食前にウマヤズエをかいだした。（泉沢）

若い衆たちの夜遊びは毎日のこと、雨が降つても行かないのは寝られなかつたもの。サシ歯の下駄にミニ笠で、ガントウをつけ、一里二里の道は平気で遊びに行つて來た。夜学の時など、本を腰に結びつけて遊び

んだ。ゴゼが来たとなると飯土井までも行き、一、二銭くらい買って歌をうたわせた。（荒子）

夏・秋他村の神社の祭（とうろう祭）に柏川、新里、月田と二里四方位まで歩いて行つた。そして家に帰つたら夜があけたといつてある。歩き廻つたり娘をからかつたりするか、仲よくなる場合もある。好きだというだけではまともらない。シンショウのつり合い、家柄、系統（病気特に結構はハイヨウタネといって忌んだり、癪病も嫌われた）など問題で、親が駄目だといつたら駄目である。（泉沢）

夜バイ 主に夏に行なう。これには上手下手があるが、事前に打合せておいて行くものもある。AとBが仲よくなつて、Cが行つた話もある。Bは知らないで一緒に寝てしまつた。別の者が先に行つてたべてしまい、そのあと行つてボタモモチくわせろといつたら、さつきやつたではないかといった話もある。

流し仕事をしている所が最も近づける。そこで水をかぶつたこともあ

る。出ろよ出ろよといつたら、出るよといつて水が出てきたという。

後闇、朝倉女のヨバイ、男後生来ねてまちる。子どもが出来ると親の子にして、女は無きにして知らない所に嫁にやる。(泉沢)

一人前 男子にとって一人前に認められるのは兵隊検査をすませてからである。兵隊検査の時には、お祝いに紋付き羽織りをつくってくれる家が多かった。これが製さん着物にもなった。(荒子)

仕事の一人前 米俵を一頭馬の背につけるのができると仕事の一人前として認められた。荷輪に米俵をつけるのは大変なことで、そのままつけては倒してしまって、片方にシンバリ棒をつけて米俵を荷輪につけたもの。小麦をつけるには大東を六抱つけるのが一人前であった。(荒子)

女の一人前 機織り、糸とり、縫いこと(裁縫)、うどんをつくれること、などができるは一人前として嫁入りの資格ができた。ほほ二十才くらいまでにはおはえたものである。(荒子)

四、婚 姻

(一) 結婚の条件

婚姻圈 概ね三里以内、大胡、柏川、宮城村まで特に北に来るのが多く、南から上つて来るの少ない。泉沢を中心北の方をカミゴウといい、女性の化粧はブキ、南方をシモゴウといい、開けており、あかぬけていて仕度をみれば判つた。(泉沢)

三里四方の歩つて来られる位の距離から嫁に来た。

下大島は梨と蚕をやつていて、せわしないので嫁に来るのがいやがられた。(下大島)

一里以内くらいの範囲が中心で二、三里を越すことは少なかった。

入りが歩きだつたから、縁組も遠くないところに落ち着いた。(新井)

嫁・婿の条件 昔の百姓家は、財産が同じ位であることが第一条件であつた。(下大島)

嫁、婿個人のことより、親の権限が強く、家柄・筋・財産などが重んじられた。(荒井)

結婚の年齢 結婚の場合、年令についていろいろいわれている。

男は数え二十五才、女は十九才を厄年といつてきらつた。女は二十一才もよくないと云つた。男女の年令の差が三つちがうのはよくないと云つた。女が一つ年上なのは、金のわらじをはいてもみつからないとまでいわれた。(二之宮)

夫婦の年令差は、三つちがいはよくない。(東大室)

四つ違いはヨメ、トウメと云つてよくな。(小屋原)

嫁さんは台所から貢えといふ。(下大島)

嫁の条件 むかしは、嫁をもらうときに、いろいろな条件をあげた。

順序不同だが、その条件をあげると、つぎのとおりである。

おはりができること。むかしは田園へ着るじゅばんまでぬつたので、嫁は着物が縫えることが必要であった。

はたおりができること。それも嫁のひとつ条件とされたこともあつた。

体格がいいこと。氣だてがいいこと。

家柄も条件のひとつとなつた。双方の家柄が不釣合だという場合におみやがちがうといつた。

財産のへだたりがあつてもいけないといわれた。

「嫁は台所からもらえ。むこはいいところからもらえ」といつた。(二之宮)

嫁の仕事 野良に出ていれば、「もう昼だから、めしの用意でもしろやあ」といわれて先に帰るが、まだ鉄びんでもわききらぬうちに、家族のものもどつてきて、そばでは子供もなくし、乳をくれていると、「泣いていたつて、死にやあしねえよ」といわれて、泣きたくなるようなつら

いこともあつた。（富田）

調理は、女のだいじな仕事だったが、娘にとつては、嫁ぎ先の味をおぼえるのに苦労した。実家でいちおうのことはおぼえてきても、何もできないから教えてもららうという態度で、姑につかえた。いつへんきいて忘れてしまつて、同じことを一度もきけば、「なんだ、この間教えたばかりではないか」などといわれた。（富田）

あすきがゆをつくるのに、どうしたことがあすき一升に塩一合と、おなめの調合とまちがえた嫁があつた。もちろんしょっぱくて食えなかつた。自分で煮たんだから食えと姑にいわれて、泣く泣く十五日くらい食わされた。（富田）

婿 婿養子は、悪い役回りをする。消防の時には下座ち坐る。天王様の御奥を担がしたりもした。（小屋原）

むこは村の中の集りでは下座にすわらせることが常だつた。又、生意気なことを言うと酒を買わされた。（富田）

姑とめ 姉は一年中午前四時起きで働いた。姑によく思われないと

「朝もつと寝ていろ。」などと言われた。自分の子供のおむつを洗う暇がなかつた。母休みか夜中でなければ出来なかつた。若い中はいつも走つて仕事をした。例えば田の仕事の場合、終ると他の者より先に家に走り帰り食事を準備し、食後は子供の世話をし、午後の仕事は普通に遅れないうように行なつた。時間の余ゆうがほとんどなくよく働かされた村だつた。気のきいた番頭がいると味方になり楽だつた。但し番頭の居る家で旦那を使うと叱られた。今の嫁と姑の関係は逆で、年輩者は若いときも現在も一生骨折りのために生れて来たよくなものだ。（今井）

男女の外出 里に帰ると、産婆様にお参りをする位。いい家で春雀様。（箕井）

男女の交際 娘を大事にして若い者の交際をさせないと仕返しがあつた。縁側に石塔を並べられて酒を買って出し元に戻してもらつたとか娘が悪い人を聞いたというので、その男を出せとせまつたら、主人だけ

と言い張り、出さないので力ずくで聞いて見たら男だったのでこの時も酒を買された。

十日夜の晩に仕返しが多く「ガッタソんかけられた」ということが盛んに言われた。家から出られないようになされた。（富田）

恋愛 恋愛すると暇が出された。追い出される。親が承知しなければいけなかつた。

恋愛する人をクツキアイという。十人に一人か二人位いた。仲人を誰かに頼んで、何とか懇めてもららう。（下大島）

クツケなどと、ろくなことはいわれなかつた。一人で話をしていたからいいんじゃないのかとか。また二人で歩けばオシリが通るなどと陰口をきく。夫婦でお客にいくのに別々にく。（小屋原）

明治には、好きになつた者どうして一緒にになつたのはほんどのない。

親どうしがきめて一緒になる。たまには恋愛もあるがこれはナレアイといい、勘当されても自分たちの意思を通した例もあるが、これはくつきあいといわれた。（新井）

見合 見合いはしない。見に行く場合も内緒であつた。

結婚式の時、始めて顔を見る。暗くなつて寝て、朝早く起きて庭を見ると番頭さんが庭を掃いている。実は夫であつた。（下大島）

親が決めたオシツケだから見合いもしなかつた。御祝儀の時、始めて会う。

親にいわれて泣き泣きといった例もある。それでも納りはよかつた。（小屋原）

昔は、見合いというほどのものではなかつた。「ぬすみ見」をされた。

見合いして、気にいらないとむこさんはお茶を飲まないで帰れる。（東大室）

見合いの席にはお茶を出さず、砂糖湯とか麦茶を出す。お茶は「にこつて流れる」といわれていやがられるが、話がまとまつてしまえばいいと。（新井）

ウブスナガラ 新井では、神社の神さまがよく守ってくれるために破談とか離縁になつた例がほとんどない。ウブスナガラだろう。(新井)

〔二〕 婚約

仲人 年齢になるとケツもできたから嫁にそろそろやらねばと仲介する動きをした。常日頃から考えておくのである。仲介はオチヤになる(お流れになる意)といって縁起をかつぎ、話がお互に進むまでお茶を飲まない。お茶のみに来たのじやないといった。(泉沢)

自分の仕事をもつてやりながら若い人たちを見ていて組合わせを考え話を進める。ハシカケといつて仲をとりもつだけで、話のきっかけをつくつてやり仲人まではやらない人もいるが、仲人は「仲人ナナテンボウ」といわれるようにならじつていた。ハメラレタときは大変だが、「ハメラレタ」と苦情いつたら仲人に、「オ前モハメテルベエヤ」とやられた話がある。(新井)

仲人のぞうりきらしとよばれるように、くれ方、もらい方の間を行ったり来たりして話をまとめての大変だったが、仲人専門にやつた人は三十組、五十組もやつた人がいる。昔の仲人は、とりむすび後床入りしてもその隣りにいて、首尾をたしかめる役をした。(新井)

この辺では、仲人は一組だけ。

仲人のぞうりきらしとよばれるように、仲人は双方のあいだを、何回もいつたりきたりして話をまとめた。また、仲人の七でんぼうといって、あつちこつちでいいことをいたという。仲人三年ということはある。こ

れは、お中きとかお歳暮など、三年間は思がえしをするものだということがある。かたい人は、三年以上つきあつている場合もある。仲人がなくなつたときには、近親者と同じように、湯棺をしたり、供物(おきめの)をもつていつたりした。このときは近親者と同じつきあいをして、仲人のところへ双方の親が仲人札をもつて行った。もらい方で六たのである。

仲人はもうかんねえという。仲人札は結納金の一割という(もら

い方で六分、もらい方で四分ぐらいの割合だす)が、仲人札をもつても足がでるという。はなむけをよめむこの両方にやつたり、子どもが生まれればお節供の祝いをやつたりしたからである。(二之宮)
ゾウリキラシ、七テンボウという。酒でも飲めなきあやれたものではない。

お茶を濁すといって、話が決まらない内はお茶を飲まない。(下大島)
草履切らしと仲人七テンボウなどという。また、八テンボウなどといふ。また、八テンボウまでよいともいう。
子供ができると縁や穂を贈った。昔の仲人は初子だけでなく全部の子に贈った。(箕井)

「どうだいい人があるから」と仲人の方から出向くのが普通であった。頼まれる場合もある。

仲人の七テンボウ。草履切らし、といふ。

仲人がいいから異べえということもあった。

仲人への義理は三年。「仲人三年」という。仲人の方も、産見舞や筋句にお祝いをする。(小屋原)

仲人の錢 結納おさめの時、両方に錢として蛇の目の傘を贈つた例が多い。上を見て暮すなというので傘をやるものだという。(下大島)

仲人のあいさつ 結婚の話がきまり仲人がきまと、手ぬぐい一本ぐらゐを持つて嫁方の近所まわりをした。(新井)

仲人札 三年間、益暮に届け物をする。塙引きなどを届ける。

仲人が亡くなつた時には葬式にする。(箕井)

正月、三月の節句、八朔、お歳暮にする。八朔には、御強に生姜を付けて持っていく。

これを三年間だけやる。(下大島)

結婚式が終つて、一段落つくと、もらい方とくれば双方で話しあいをして、仲人のところへ双方の親が仲人札をもつて行つた。もらい方で六年、もらい方で四分程度の分担をするのがふつう。(二之宮)

仲人とのつきあいは「仲人三年」といつて三年くらいは盆暮のあいさつをする。(飯土井)

樽立て 仲人が両家の都合を聞いて、日が決まると樽立てをする。仲人が酒一升ずつ持つて、昇れ方と貰い方に行く。両家とも、本家、新宅などの近しい人を呼んでおく。

そこで新客の数を決めた。(小屋原)

仲人が一升持つて、嫁の方に先に行く。嫁の親族が集まつて、固めの酒。

その時、結納、式の日取り、イチゲンの人数などを決める。(下大島) 婚約のことをたるたて、くちがためといい、祝い樽に五分ずつ入れた二本の酒を持って行き、近親、兄弟たち立合いで、娘を連れてもらひ方に来てきまる。娘はひと晩泊つて行くが、これで縁がつながり、それ以後はいつ行つてもいいことになる。そういうことからカドイレともいわれる。

酒は仲人が貰うことにつきまつて。(新井)

口ガタメ 親戚が集まつてあるところに仲人が一升ずつ持つていく。

口ガタメが済むと嫁が三晩泊ることもあり、それを足入れという。足入れの後、縁談が毀れれば、仲人は切腹ものである。毀れる場合も稀にある。(笑井)

仲人が

酒一升もつてまずくれ方へ行つて、半分のん、たして一升にしてもらひ、それをもらひ方へもつて行つてのんでもらつた。それは、仲人が立ち合いで、嫁に行くことを承知してもらつて、その返すをもつて、もらひ方に行くのである。

現在は、双方へ酒一升ずつもつて行つて、話しきめてくる。(二之宮) 式前にくることをカドイレという。婚約成立したが農事が忙しく、披露がのびるとき、もらい方が用意ができてないとか、手の足りないときする。いわゆる足入婚ではない。(泉沢)

口がための日に、嫁を仲人がもらひ方へつれて行つて、そのままいつ

いて手伝つてもらうことがある。これを門入れといった。

これは、財産の有無には関係がなく、厄年になる前にもらうとか、もらひ方で手かたりないような場合に、もうはなしがまつたもんだから、早くこいといつてつれできたものである。正式のご祝儀はあるにすら。(二之宮)

樽立てに嫁方にいたまま、式まで泊つてゐる人を、足入れという。

子供ができるご祝儀をしなかつた人もいる。(下大島)

クチガタメ(タルダテ)といって、仲人が嫁方に酒一升、嫁方に一升ずつ持つていく。(本来は五合ずつ持つていくべきである。合せて一升、イッショになるのだといふ)そして親、兄弟、親戚代表、隣保班長など

を呼んで披露する。(泉沢)

仲人が口固めといい酒一升持つて行き婚約を決める。これをタルダテといふがこの日より嫁を一年間ぐらゐその家に居き、その後結婚式を行なつた。最近はない。(今井)

普通でも、江戸様、白一枚。(下大島)

式の前日にやるのが本当だが、今は日のよい日にする。エーノーブルマイといつて近所、身内の人を呼んだ所に「仲人ですが結納に来た」と挨拶する。そして仲人ヒローと結納めを一緒にした。このとき嫁を

婿の家に顔みせに連れてくるが、泊めない。また仲人、娘が近所を廻つた。結納は昭和十三年頃は二十円、今は二十万円位。これに自動車免許状をとつていく。ハカマ代はない。(泉沢)

式の前日届ける。結納の品は、紅白粉、着物、履物など、着物や帶その他を整えでつくるが、足袋はタビガエルといふのでやらない。

結納の品は半紙で包み、水引きをかける。目録を書いて挿み箱に入れ、

仲人の後をお伴がついて担いで行った。

嫁方では受取りを出した。(新井)

仲人は、もらい方から結納金をあすかつて、くれ方へもって行く。仲人は、もらい方から、目録をもって行って、供納を納めて、受取りをもらう。それをもらい方にもって行って渡す。

現在は、結婚式の日に、結納をおさめることが多い。むかしは、結納品を車にのせてもって行った。車をひくのは、もらい方の近所のわかい衆で、車ひきにも膳をだし、ご祝儀をやつた。(二之宮)

結婚式の前日に持っていく。(荒井)(小屋原)

結納金

明治三十九年ころ十五円

大正時代には五十円

昭和十年には三十円、これは最低の組くらいで五十四円以上だつたろう。

この中から榜代として三十四円くらい返した。(新井)

結納するまい結納が届けられる日には、隣り組や近親者たちが集まつていて、仲人が着くと、座敷で結納の目録を読み上げる順に仲人が品物を差し出して並べて確認し、目録通り一切が合つたら結納するまいになる。

仲人は結納するまいの後嫁方へ帰つて報告する。(新井)

タンス 鳥方からタンスを買って出した。うんとつめて来いといふことだといわれるが、嫁は長持をもって来る。(新井)

(二) 嫁入り

中宿 買う家の近くで、その家を通り越した家ではまずい。その他別になし。(笑井)

嫁入り行列が家を通り越さないよくなところにチュウヤド(中宿)を選んで、ひと休みする。(新井)
嫁迎え 村境まで嫁の村の若い衆が送つてくる。買ひ方の若い衆も酒

一升を持ち、弓張り提灯をつけて、村境まで迎えに出る。肝いれ(風呂取取り)がその場に立合い、「確かに貰ひ受けました」といつて嫁を受け取る。肝いれが一切の権限を持つ。肝いれは披露の終りまで権限を持っているが、宴席は別。(荒井)

村はずまで若い衆が迎えに出る。酒一升を持っていき、待っている間にも飲むし、嫁を送つてきた人達とも飲む。ユズリワタシといって、仲人が挨拶し、嫁と荷物を引き取る。仲人の責任である。そこで送り迎えの人達がお互の提灯を交換して分かれれる(小屋原)嫁は歩くか荷車に乗つてくる。村の境まで送つてくる。婿方の人(若い衆)が迎えに出る。弓張り提灯を持って、酒一升持つて迎えに出る。

一升の酒を飲みながら、嫁の一升を持つて到着すると、仲人が挨拶する。婿は急がしく家に帰る。(下大島)
嫁方から村境まで嫁迎えに出る。青年がみんな出て、荷車などを引いてちょうどちんを持つて行き、両方の行列が村境で出合つて受け渡しがすめばちょうどちんを取り替えあって来る。酒を持っていて、途中で会つた人に祝い酒をくれて、ぎやかなものだつた。(新井)

嫁の仕度 これはもらい方で一切用意し、結納おさめのときにつくればちようちんを取り替えあって来る。酒を持っていて、途中で会つた人に祝い酒をくれて、ぎやかなものだつた。(新井)
嫁の仕度 これはもらい方で一切用意し、結納おさめのときにつくらつて行つた。くれ方のほうで、仲人をとおしてもらい方に請求したこともあつた。この場合には、仲人は双方のあいだにたつて、調整した。ふつうは、たんす一さおに嫁の着物をもつて行つた。むかしは、たんすのほかに、長持に夜着を入れて行つた。このほかに、かろうとをもつて行つた例はあまりない。むこのはかま代として一部をもらい方にかけす例はほとんどなかつた。風呂敷包ひとつで嫁入りしたという例もあり、これを、風呂敷嫁こといつた。(二之宮)

嫁の衣服 梱箱に入れて持つていった。嫁の土産や祝い樽を入れて箱を二つ持つていった。
嫁は中宿で衣装を整える。(下大島)
嫁入り道具 箕笛、長持、裁板、張板など。(小屋原)

(小屋原) 翳取りの場合 翳は朝ムコといって、朝早くから小屋原全部を回った。

嫁入り ほんと歩きで、少しそういたくの人の家で嫁が人力に乗つたくらいだった。(新井)

嫁入り道具 裁縫道具としては、針、針坊主、鉄、指皮、ぬいとす。物指しは、二尺指しと一尺指し、へら、火のし、こてなどを用意した。嫁ぎ先のものを使わないよう、ぬいとすも一年分使つくらいはもつていた。嫁ぎ先のものを借りりに、間に合うように、セッケンも当座の分は用意していた。たらいや張り板はもつていったが、裁ち板はもつていなかつた。夜具をいれるために、だいじんの家では長持を用意したが、だんだん簞笥になつた。(富田)

結婚式 百姓の暇な時、寒い時期が多かつた。御祝儀は四日間掛る。

(下大島) 百姓の暇な時、寒い時期が多かつた。御祝儀は四日間掛る。
ムコイチゲンといって、婿、仲人、親戚、兄弟がもらいにいく。道中仕度ではなく、羽織、袴の仕度で行くのだが、嫁の家の近所の中宿で、オチツキといつて茶が出る。この中宿は通り抜けない方がよいといふ。この中宿までオショウバン役が来て、その案内で嫁の家に入り、座つとお茶、オチツキ(ソバ、スシが多い)が出て、これをたべ、親族を紹介する。これをオカズキといふ。

購をさげ、新しいお膳の御馳走が出て。これをイチゲンブルマイといふ。このときムコはなるべく飲まないようにする。嫁御の乗込むまでの時間に間に合つまで二、三時間かかる。やがて仕度ができると嫁が出て、そこで大八車に乗せた嫁入り道具、タンスのあとに婿がついてくる。このように婿も一緒だが、婿は早目に家に入り、ムコイチゲンの御馳走の数、内容、(特にお吸物の数と引物)を報告する。これはもう夕食項である。

なお嫁は婿の家の近く(隣保班、親戚等)の中宿に寄つて、化粧直しをしてから婿の家に入るのである。このときカドでサオについたタイム

ツをまたいで(外に出るの意)ウタイコミ(高砂や……)が始まり、菅笠をさす。(上古見るな、質素に暮せの意)そして謡の終りの「着きにける」で縁側から上る。(初めての客の仕様である)このときは婿方の母親が抱き上げる。そして嫁方の新客の来ないうちにトリムスピをしてしまう。

トリムスピには子供の男女、雄蝶、雌蝶がする。この席は近所の若姫御二人がオマニヨウボウとして並ぶ。お待ち女房は、帯を前垂らしにして、オイランのよつた格好をして坐つているだけである。また謡をして、四人の若衆は、式が始まってトリムスピの三三九度のあと、謡の終らぬうちに、つまり三つめ位のとき婿は逃げ、若衆の一人が婿の代理となつて嫁と並び、若衆、「カネのワラジをはいても婿がねるまでには探しします。」という。

謡が終ると嫁、婿は引上げ、座敷は空になり、次でザハイが中宿にシンキヤクを迎えて行く。新客が入り披露となるわけだが、新客は表座敷のアガリハ(縁側)から入る。そしてオチツキをして紹介し、オチツキをする。これには本膳が出て、婿方は仲人とオショウバンだけが出で、嫁側だけでやる。この新客(オクリイチゲン)は早くも午後三時頃から販み始め、三、四時間はかかる。あまり長びかせないのがオショウバンのウデである。この時は坐らせられ、膳部はシンキヤクと同じである。そして飲んでいる間に村廻りもする。区長、神社詣りなど、この間にタンスをあけて近所の人見せる。帰つてオイロナオシをして仕度をかえる。

昔は次のようにやつた。

第一日 仲人紹介、近所歩き、ユーノウブルマイ

第二日 ムコイチゲン、一緒に婿の男イチゲンが行く。(結婚式当日)

第三日 嫁の男イチゲンが来る

第四日 嫁方の女イチゲンが行く

第五日 嫁方の女イチゲンが来る。その帰るとき一緒にイツツメと

いって、もいら方の女親がついて、サトガエリをするが泊らな
いで帰る。

第六日　あと片づけ

これらで一週間かかった。

そのほか式の翌日カネツケ（オハグロ）をして、そのお祝いには赤飯をたいてホカイに入れ、身内の人々が嫁の家に持っていく。席敷に上ってごちそうしてウメボシをお返しする。（シワになるまで共に仲よく暮すよう）といふ意）三日目に嫁の女親がついて里帰りするようになつた。（泉沢）

婿イチゲン　式当日、婿、仲人、婿の伯（叔父）父など数人が嫁の方にいきチカズキをやる。

まず、持つていった席順目録の通りに坐ると、お茶と一寸した茶菓子（餅など）、家によつて違う）がでる。これをオチツキという。

その後、仲人が婿方、お相伴が嫁方の縁者を紹介する。これがチカヅキで、その後酒になる。程よい時分をみて、嫁の親が土産（スルメなど）を持って挨拶に来る。そして「不束な娘ですがよろしく。」という。（筑井）

朝イチゲン　蟹入りは朝イチゲンでやる。
嫁とりの場合はイチゲンは三時か四時ころもらいに行く。接待は入代り、立ち代り酒を強いるもので、ひっくりかえるくらいになつて「お立ち」になる。（新井）

チカズキ　婿とイチゲンが嫁の家に行く。新客名簿席順を書いた慰半紙を出す。

オチツキといつて、寿司二つとか、ウドン、ソバ、汁粉など、家によつて違つたものがでる。

お膳が出て、仲人が婿方を、お相伴（座の取り持ち役）が婿方を紹介する。酒が出てチカヅキの宴となる。仲人が取つて皆に渡す。これをム酒の最中に鯉の煮たのが二匹である。仲人が取つて皆に渡す。これをム

シリザカナという。吸い物が三通りである。酒が終わる時には必ずネギヌタができる。各人に引き物ができる。

ウドンがで、お茶ができる。

料理の数は、三種、五種という。

料理番は、百姓の器用な人がやつた。（下大島）

仲人が新客を案内して奥の方に行く。席順の表を提出する。婿は一番けつに坐る。

お茶と茶菓子が出、オチツキといつて、ソバかウドンが出る。

その後チカヅキといつて、奥の方の近い者順に出て、オショウバンが紹介する。

宴会になる。

宴会になると、貴い方の近い人が婿を連れて隣保班に挨拶回りをする。（小原屋）

入家式　嫁が来ると門口、かいどうで小若衆という子どもが竹の棒か木の棒を突き出しますがせる。年輩者があり手荒なことはさせない。家には表から入る。茶の間にすげ笠をかぶり、「上を見るな」の意がある。又、家に入るとき母親がだき上げる似ねをする。床の間では嫁は上座に座り、婿は下座。はじめにうたいを三回するが三回目が終る頃に婿は逃げ出して、その座から離れる。座配（その場の進行係）が、その座の中から一人を婿と定め「婿が居なくともがまんしろ」と嫁に言いい聞かせて、うたいを続ける。

男仲人は嫁の荷物について来て、女仲人が取り組みの場所を受け持つことになつている。（荒口）

肝いれが中宿に嫁を迎えていく。門口の両側に松明を二つたいて、竹竿を下に置く。嫁が竹竿を跨じ。若い衆が持ち上げる。仲人が竿を踏んでやる。

嫁は縁側から入る。嫁が嫁に普段を被せて抱き上げる。（筑井）

篝火を焚いて、竹の排を置き、嫁に跨がせる。嫁が出ていかないよう

にという訳である。カブリガサといつて、嫁が上をみないようにといつて、普段を嫁に

被せて、縁側から姑が抱き上げる。(下大島)

長竿を置いて嫁に跨がせる。松明をたく。縁側から嫁があがる時、姑

が普段を被せる。上を見るなといつて被せる。(小屋原)

縁側から入る。この時、嫁になる人が待つていて、別の人気が嫁に普がさをさしかける下で姑が嫁を抱き上げるようにして上げ、トリムスピのザシキへ入る。

皆がさをさしかけることは「上を見るな」ということである。(新井) 門入り 花嫁が門入りのとき、村の人々が青竹を割ったのを反対で持つていて、これをまたがせるようにして持ち上げる。花嫁は知っているので竹を踏んで上げないようにおさえてしまう。うつかりして持ち上げられると「少し安い嫁」ということになってしまった。

このときには麦わらかかせ(桑の枝)を焼すことになっている。(新井) 婚礼の世話 戦前までは、村の若者組が行なつた。往還から嫁を迎える時、コードで棹をまたがせる。双方でかがり火をたいて、若者組が娘を迎えた。娘は表座敷から上がるが、その時普段をかぶせる。上を見るなという意味である。嫁迎えには、嫁は逃げていて家に寄りつかない。若者組の代表が「私が嫁の代理人です」と言って、嫁を迎えた。(上増田)

トリムスピ 次のように坐る。

○マチ女房	○嬢
○女仲人	○男仲人
○嫁	○夫婦益
○謹をする人	○オショウバン

嫁は床の間をしよ
う。仲人のバアサンが嫁の側にいる。
マチ女房は二人で、近所の両親が揃ってい
る家の嫁がなる。

説は四人です。両親のある若い衆がやる。若い衆は正月に説を練習するが、仲々うまく見えない。酔っぱらった人が後で教えたりする。

雄蝶、雌蝶も近所の両親のある男と女子に頼む。

説が終わると嫁が逃げる。説の責任者が何かいう。「金のワラジを履いて婿を斬しに行くべえ。」などという。(小屋原)

嫁が座敷に入り床を背負つて坐る。嫁が下座に相対して三三九度の盃 盂が済むと、説をまだやつている内に嫁ができる。カワリ嬢は酒が大量に飲め冗談のいえるがなる。カワリ嬢がでると、男のもの(大根にリュウのヒゲ)と女のもの(鮭の頭に切り昆布)をソロパンに乗せてだす。

嫁の胸には高盛り飯とお吸い物があり、新の太い箸が添えてある。しかし隠し箸が付いている。女仲人が、その隠し箸で、吸い物の中の人参で作った男根を嫁に食べさせる。その後はイチゲン座敷になる。(箕井)

三三九度の酒は雄蝶、雌蝶の酒を仲人が交ぜる。酒は嫁に先に注ぐ。

(下大島) トリムスピをするときは、どんなに寒い時でもザシキの障子を開けてやり、村中が見ている中でやる。青年たちにはそつと酒を出す。(新井) 夫婦益 盂の交換の際の唱えごとは、第一回目には「あなしめし、よううとめよ」といい第二回目の交換には「あなしあし、よつとめよ、ようとこを」とい。第三回目は「やぐもたつ、いづもやえがきつまごめに、やえがきつくる、やえがきを」と唱えた。(今井)

三三九度のあと、嫁と姑のカタメの盃を、仲人が仲に入つてやる。(箕井) ネギヌタ ご祝儀のとき、一見座敷の「こちそう」の最後に、ネギヌタが出てこれ。これがでると「ヌタが出たぜ、むつもりだぜ」と答はざとつた。これについてとくに名称はないが、一見座敷でネギヌタが出来ば、それでごちそつはおわりだという合図であった。(二之宮) いちげん座敷の最後に、これでおしまいということで、ねぎねたを出

す。(二之宮)

男蝶女蝶 トリムスピのときに六、七才の男女一組の子どもに男蝶女蝶の役をさせる。この子どもは、両親がそろって健在の家の子どもがよい。(新井)

大根で男のもの、コブで女のものをつけ、ソロバンの上の上にのせて式のときにごろごろところがす。(新井)

婿逃げ 大正末年までの風習だが、結婚式の途中で、婿が席から姿をくらました。出席していた若衆四人のうちの一人が婿の代理をして、式の席をすませる。若衆たちは見付けるまねをするが、式が終つて寝るまでに、違う部屋にいた婿を見付けて来る。「意苦地がなくて、悪かった」などとあやまって連れてくる。なぜこんなことをするのか不明(泉沢) 話の最中に婿が逃げる。替わり婿が出て、「めづけてもぬつかんねえ。」などという。(下大島)

結婚式のウタイ ハイ組というのが祭の世話役をし、式のウタイをやつた。青年会の始まりでもある。(泉沢)

正装した若い衆がやる。一週間練習する。話は三つやる。(下大島) 昔は結婚式にお待ち女房のほかに、若い衆四人が出て、話を作った。

ノゾッコミ 式の時、嫁を見ようと村人が覗くのだが、むしろ障子の穴の数を喜んだ。「家のヨメゴでは穴が八十あつた。」などという。障子を破られるのが嫌な時には、あけて見せる。(筑井)

トリムスピの時に、緑樹の障子に穴を開けて嫁を覗き見する。(小屋原) 三三九度の後のイチゲン座敷は迎えイチゲンと同じことをする。(下大島)

島) 挙式後の嫁 嫁はお勝手に入り、近所の衆に挨拶をする。イチゲン座敷が続いている時、嫁は家の人と土産をやる。オシュウトにはお茶一本、小シユウト二ハ、下駄と半襟。

宴の後には、数あるお菓子を近所の衆に分けてやる。(下大島) トリムスピの後、嫁は勝手に下がつて着替え、組のいい人に給仕をする

る。実家から持つていった菓子を配る。(筑井) 嫁の酒つき トリムスピがすむと嫁は着物を着かえて、お客の間を酒つきをした。(新井)

若い衆座敷 イチゲン座敷の終った後、若い衆が飲む。これをやらないと、一晩中騒がれて大変である。

宴が全て終つて、嫁の床入れは十二時過ぎになる。(筑井)

ナイザの座敷 御祝儀が終つてイチゲンや遠いお客様が帰つたあとで、スシを大量につけたお皿などの料理を出して飲んだり食つたりしてにぎやかにした。(新井)

オショウバン 親しくして他の人で、弁のたつ人、隣保班長などやっている人に頼む。(小屋原)

お待ち女房 結婚式のときは、着物を着た婦人が、嫁さんの連れ(同行)のよろとにトリムスピをする席に座つてゐる。(新井)

式の翌日 カネッケ祝いといつて、ホカイに赤飯を一杯つめて嫁の里に届ける。

嫁はウブヌ参りとお寺参りをし、組内を回る。昔は村中を全部回つた。その折、近親の女性が案内をする。手拭に名前を書いて各戸に持つていく。(筑井)

式の翌日、内々の女衆が嫁を連れて村を回る。神社、寺、区長、組長、役場などに手拭を持っていて挨拶する。(小屋原)

村まわり 結婚式の翌日、嫁は再びしなくをして区長の家や組中の家をあいさつまわりをした。手ぬぐいとか半紙などが手土産だった。現在はしていない。(新井)

かねつけ祝い 婚礼の翌朝、赤飯をたいて「ほかい」に入れて里に持つて行く。里ではほかいの赤飯の三分の一ぐらいを取つて、近所や親せきの人に披露した。残りの三分の一はお返しとし、それに、梅干し二個、いか一束、麻若干つけ返してよこした。これは明治初年までで終つた。

(今井)

祝儀の次の日をカネツケ祝いといつて「カネツケの赤飯」を作った。まぬけを落として、おはぐろをつけた。現在は赤飯を作るだけはする。

おはぐろの里帰りを「からすのねれば色」と言った。おはぐろ入れば、瀬戸物で金物とふくしを水にひたしておいた。小間物を売る店で売っていた。(富田)

御祝儀の二日目に赤飯をかかして、ホカイに入れて嫁の里に持つていく。若い衆が二人でいく。若い衆には酒を出す。

ホカイの赤飯は、全部あけないで少し残して返す。

この日、髪結いがきて、髪を丸髷に直す。鎮守の山王様まで歩いてお参りに行く。そして村中を回る。その際本家とか新家の女の人が嫁を連れ歩く。(下大島)

お歎黒はトリの羽で付ける。

シヨウの実の木のフシ(虫が付いたもの)をとつて、潰して混ぜる。これがお歎黒の粉である。鉄類と水に入れて磨らした中に粉を入れるとよい。

フシは桐生の柑屋が買った。着物を黒色に染める時にも使用した。(下大島)

嫁になると、眉を落して、御歎黒にした。現在七十才の人の姑さんがしていた。

針などの鉄物を入れて腐らせて作る。(小屋原)

オハグロは明治の終りまでやっていた。(箕井)

サンニチ式の翌日、ナナイロ(七種)料理をしてサンニチの祝い(カネツケ)をした。カネツケの祝いにはオコワをふかし、ホケエに入れて嫁の実家へ背負って行った。(新井)

ゴクロウヨビ式の三日目に、組内、親戚を皆呼んでやる。非常に盛大にやった。酒の量も大変で、酒番はどこでもかまわずに飲んだ。(箕井)

道員披露 嫁の村まわりのときに嫁入り道員の披露をする。シユウト

サマがお勝手の手伝いをしている女衆に開けて見せたもので、仲人気が氣

をきかせて「タンスの鍵は置いて行け」といつてやつたものである。(新井)

女イチゲン 三日目に嫁が里帰りをする。嫁と一緒に、仲人、婿、姑、

近親の女衆(オバさんなど)が揃っていく。

チカツキ(オショウバン)が両家の女衆を紹介し、お互に挨拶する)の後、御駆走がて帰ってくる。遠くまでよく歩いたものである。(箕井)

三日目はミツメといって、嫁は姑と一緒に里がえりをした。この日は泊らずに、姑と一緒に帰ってきた。このとき、嫁の母親がつぎ先に来ることもある。あとで、お祭りの時などに来るもある。この日は、嫁にひがなおしをかけて里帰りをする。(下大島)

御祝儀の三日目に婿と嫁が酒一升を持ち、嫁の実家にいく。嫁の里帰りである。婿の伯(叔)母、姉妹もいく。女イチゲンという。(下大島)

式後三日目に、婿と嫁が揃って嫁の里にいく。その後姑が付いていく。

若夫婦が泊つて帰る時に、今度は嫁の母が付いてきて、婿方の隣保班

に挨拶をする。(小屋原)

式の翌々日に里がえりをする。この日は泊れないでどんなにおそくも帰る。(新井)

御苦労呼び 御祝儀の四日目近所の衆に酒を出す。四斗樽で一本半位

出す。(下大島)

ヒサナオシ ヒサナオシはイツツメともい、姑が嫁と一緒に嫁の実家へ行く。嫁は泊つて来る。(新井)

御祝儀の五日目と六日日(三日目の里帰りに姑が付いていく場合もあるが、固くやる場合には、五日目に姑が付いていき、一晩泊つて、六日に嫁の母が送つてくるという形もある。お互に組合を回つて挨拶する)。(下大島)

嫁が実家に帰る日

一月四日 嫁と一緒に行く。嫁の御年始日で、御馳走になつてくる。

一月十五日 嫁一人で行き、初めて泊つてくる。

三月二日 節句、ヒンモチを持っていく。

五月五日 節句、タラの干物を持っていく。

八月一日 ハツサク、ショウガを持って行き、メカイをお返しにもらつてくる。

五月の節供。はらんでいる時は箕を持たせる。ショウガの節句ともいう。(泉沢)

正月四日、大判という真四角の餅三枚に、水引きを掛けて持つていく。三月の節供には三つの色の菱餅を持っていく。節供の餅はやつたりとたりといふ。五枚持つていくと二枚返す。

五月の節供。

七月初め。盆にならない内にいく。お振舞するものは全部用意していく。ウドンを茹でて、さらにウドンを一箱持つていく。この時は、娘と娘が新しい着物を着ていく。娘にも着物を新調してやる。

八朔。目をかけてもらうために、嫁の実家から、桑を入れるメカイを土産にくれる。

御歳暮。塗引きを持つていく。(下大島)

娘の御節供。嫁に来てはじめの節供のときは、里方から御駕(大きい裏びな)がおくられた。そのあとは、子どもが生まれると、お節供には、子どもに対してもりものかなされるようになる。(二之宮)

イキボンブルマイ 嫁の里帰り。嫁と娘が、いい半着物を着せてもらい、嫁の実家にお客にいく。そして近所の人に御馳走をする。夏の暇ない日をいく。(箕井)

嫁に来てはじめてむかえる盆のときに、親が生きていれば、嫁、娘はそろつてうどんや味噌醤油などをもつて、嫁の里へ行って、ごちそうを作つて、里の親や、近所の人たちをよんで祝つてやつた。このとき、も

らつた方では、嫁にいき着物(これを生き盆ぎもんといつた)を作つて嫁に着せてやつた。この日は、泊らずに帰つて来た。(二之宮)

結婚したての嫁が夫と、盆になる前に実家に酒やさかな、うどんなどをたずさえて帰り、近所の人々を招待して振舞うのを生き盆振舞いといふ。嫁先でも若夫婦そろいの着物を用意してくれる。また両親の着物を新しく自分でぬつていくこともある。

近ごろでは、お盆に行く。それでも親達が生きているので、生き盆といふ。(富田)

タナモンゲエシ 三月・五月の節供、八朔の節供に、嫁がせた娘がお客様に来るときに持つて来たお土産に對しての実家からのオカエシのこと。をタナモンゲエシといふ。いくつかあるが、一般にはミ(箕)が多い。理由は、「ミがたまるよう」に「ミになるよう」にといつて、妊ることを祈る親の氣持を表わす。他にはエカキ(桑を摘む大きな二)、メカイ、ザル(マイをかくもの)ボリカゴ(最近のもの)などもタナモンゲエシに使われるが、ザマ(かご)をもつてうまくなかつた例もある。語呂合わせがよくなかつたわけである。(瀬戸井)

婚姻關係用語

離婚 嫁が家風に合わないというのうのが一番多い。子供ができるない時、家風に合わないといつて離婚された例もある。(箕井)

離婚して実家にいる女を出戻りとか、たびかえりといふ。(箕井)

子どもができないといわれて、出される」とがつた。再婚先でできたという例や夫をすえたらできた例もある。(富田)

縁切り むかしは、子どもが生まれない場合には、縁切りをされたものもあつたといふ。反対に、子どもが沢山いて、出されたという人はない。また、みやげつことを生んだためにだされたという例もあつた。これは、一度離婚されて、再婚したものが、前の旦那の子どもを再婚先で生んだ場合のことである。そういう場合には、裁判をして先方に子どもをひきとらせたこともあつたといふ。にさん(のちさんのこと)をあ

らうと、その中に親の紋所があらわるるといふ。

縁切りばなしのときは、仲人をたのんだり、むらのひげのはえた人（むらの顔役で、人の世話をよくする人のこと）をたのんで、はなしをまとめてもらつた。多くは、女の人のほうで泣きねりになつたといふ。

嫁が里帰りをするときに、あきあけはまちなど、そのときどきのものを土産にもたせてやるが、縁切りの場合には、その重箱の中に手紙を入れて、長お客をしてこいと書いておくといふ。姑が嫁を気にいらぬときには、嫁に長お客をしてこいといふ。あるいは、嫁が、姑にどんな仕事をしてよいか聞くと、お前は仕事をしなくてよい、お客に行けといつたりした。ふつうの場合には、家へかえつてよくおつかさんのお乳をのんでこいといつたりした。（二之宮）

タテドオシ 婚姻の選れた娘をいう。桑の枝を伐らずに置くことから転じた語。（下大屋）

同姓同名 近所で同姓同名の場合、婿に来た方が親の名を襲名した。関口仁三郎が二人いた。ジンチャーンと呼ぶが、ジを強く発音するのとそうでないのに發音で区別した。村内ではそれではわかつた。役場では課税台帳に甲、乙と書いておいた。（下大島）

五、葬 制

死の予兆と死

死の予知 カラスが「気なしげ」にななくと人が死ぬ。「死にガラス」といって、「シニー・シニー」となく。つまり「カーカー・カーカー」となく。（東大室）

カラス鳴きは悪いと人が死ぬ。（筑井）
カラス鳴きはいくじの無い鳴き方が悪い。魂の抜けたようなはつきりしない鳴き方である。

親類の者には、死にカラスの声は聞こえないといふ。（西大室）
ゴフコウのあつたときは、鳥が四つ二つ（カアカアカアカア・カアカア）鳴く。普通はカアカアと鳴くが、こうしたときはカオカオといやな鳴声である。死にカラスといふ。（泉沢）

鳥は鼻が強いて死臭が分るといふ。（下大島）

觀昌寺の先代の住職のところへある人が「ぜひこの寺で自分の葬式を出してもらいたい」といつて、お布施まで持つてお願いにきた。住職は「あなたには子どももあるとしてからその時まで話を決めずにおいた方がよい。」といってお布施も返却した。その人が死ぬとき本堂の庭までカラスがきて鳴いたといふ。（西大室）

ある神葬祭に改めた人の母が、どうしてもそれがいやで、寺に来て和尚にお布施を持参して自分の仏葬にしてくれと頼んだが、和尚は、「一家の和合を考えこれを断つた。その老婆が死んだとき、觀照寺の庭で、鳥がひどく鳴いた。（西大室）

觀昌寺の先代の住職がお茶を淹みながら「今日はへんな死に方をする人がいるぞ……」となんとなく感じた。果して井戸へ落ちて死んだ人がいたといふ。（西大室）

ある人が粉をひきながらカラス鳴きのわるいのを聞いていた。すると、自分が死んでしまった。その粉が自分の葬式ダンゴになってしまった。（西大室）

觀昌寺の先代の住職が本堂でおつとめををしていると、肩の上に乗つたカラスに向つて「お前はまだここにくる年ではない」と叱つた。この者は去つて行つた。これは死にかけていた宮戸の人だつたが住職に叱られたために息を吹き返ししたといふ。（西大室）

人が死にそつたときには、カラスなきがわるいといふ。神社の大杉にカラスがとまって、苦しそうに鳴くときには人が死ぬといふ。

お寺には、人が死ぬときには知らせがあるといふ。がたんと音がする

という。(二之宮)

死ぬ人が知らせに来た。夏のことで、その晩外湯をたてて夜中の十時半から十一時ころ入っていたところ、火の玉がサニーと来て近くの竹やぶの中にバサッと落ちた。変な気持だったが、その翌朝、シユウト親が死んだというツケが来た。(新井)

ある子どもが仮死状態から生きかえった。そのとき寺では和尚さんがおつとめをしていた。そのおつとめの席に来て、その子が和尚の身のまわりにまといついていたずらをするので、まだお前の来る年ではない。帰れ、と強く叱つた。そのときが、息をふきかえしたときであるという。また生き帰った人の話では、きれいな花園へ行きかけたところを呼びとめられてひき帰したという。とてもきれいな花園で、向うからも手招きしていたが、こちらに帰つたという。(西大室)

夢見で知らせることもある。(小屋原)

水がめで夜中にヒシャクがカラカラと一周りする。いやな音である。

このときは先祖様が水を欲しがつてるので、水をあげる。(泉沢)

円明寺の庭を、男の場合は右から入り、女の場合は左からに入る。草履の音だけ聞える。(泉沢)

お勝手で何か妙な音がするという。(小屋原)(泉沢)

お寺では、女人人が死ぬときはお勝手もとで音がする。男の場合は戸をたたく音がするという。(東大室)

人五 提灯ぐらいの大きさで、青火を引く。かなりの時間経つて消える。(筑井)

大きなのと小さいのと幾つもあり、ふわふわとして、火がついたら消えたりする。走るのが早い。

人玉も火の玉も、二十まで見なければ一生見ないという。(筑井)魂は死ぬ前にぬける。死んでからぬけるものではないという。(西大室)人魂が飛ぶとその家に死人が出る。(泉沢)

二十まで見ないと一生見ない。

高橋覚英さんは下田園で二回見た。青い火でぬつくり飛ぶ。夜なので

紫がかつた青さであった。ナーライトの墓場の近所で、細かく碎けて落ちた。(下大島)

出世前に人魂を見なければ、その人は一生人魂を見ないという。(二之宮)

魂呼び ここでは“よびつかえす”といつて、井戸に向かって子供に死んだ人の名を呼ばせる。(筑井)

死にそうになると極く近い近親者が井戸に向かってその人の名前を呼ぶ。(小屋原)

死にそうになると井戸に向かってその人の名前を呼んだ。七十三年前まであった。村の神社には治れば千本の旗を上げますと願をかけた。治ると境内に箸の長さくらいの竹で作った旗に「三柱神社」と書いて立てる。親籍、兄弟によるお百度参りもあった。(富田)

井戸の端に行き大声で、その人の名前を呼んだ。(今井)

オバサンが後座がつきあがつて重態になった時、井戸のところで名を呼べといわれて、今のタケゾウさんのところの井戸で「オバサン、オバ

ン」と呼んだのを覚えている。結局死んでしまった。(下大島)

オヒヤクドフミ 死にそうなる人があるとき親籍の者近所の者が集つて

村の神社に「お百度」をふんだ。願掛けは高尾山、先祖にかけた。(今井)

病気が重くなると、神社の明神様にいってやる。木のお百度札があつた。

願によつては、お願果しにも踏んだ。(下大島)

近戸神社に、お百度札があり、よく夜やつているのを見た。豆を百持つていてやつた人もある。重病人でのた折になどやる。(筑井)

寺係り 伍長ともう一人がなる。葬式の朝、安養院真福寺のハッピを着て坊さんの衣装箱一ハサミ箱を担いでくる。中には衣が入っている。

(筑井)

お顔隠し 人が死ぬと、神棚に筆を上げること。(小屋原)

筆書き 人が死ぬと、神棚には筆をたてる。(筑井)

死人の出た家に最初に来た人があいさつをしないで（けがれでいる）ということになる、差をとってきて、小さい枝を一本ずつ棚のお札の前にあげた。これをするものに、うちのものではなく、近所の人であった。さきびきがすんでおり、つけなどを出した。（二之宮）

ほどばらい 仏様がでると、お寺からおはらいをもらってきて、俵っぽにさし、その上に灰をのせて、自宅より下の三本辻へもっていく。

（二之宮）

枕直し 人が死ぬと北枕にする。（小屋原）

死者はナンドに北向きに手を合せて寝せ、額に手拭をかぶせ、切れ物

を上に置く。供物は、線香、ハナ、玄米を煮て作ったマクラダンゴ二つ

重ね、箸を立てる。（泉沢）

湯棺の前に、死者の近親者が死者を北枕にする。それを枕なしという。

このあと枕めしをあげる。

死者の上には魔除けとして刃物をのせておく。これにえんきりに墓ま

でもつていて、棺桶をいたときに施主がつなをきのにつかた。それ

をえんきりといつた。（二之宮）

死者への供物 死ぬと枕を直して北向とするが、すぐに玄米をとがな

いで家の外で三本の木を組み、そこに鍋をかけて煮て椀に盛り箸を直ぐ

差して供える。枕团子は玄米を石臼で左まわりに回して粉とし六個の團

子を供える。（富田）

枕メシ、枕团子、死者が出ると最初に作るのが枕メシである。普段使
用しているカマドは使わず、外にカマドを作つて焼く。その後一週間位
はそのままにしておき、使わない。

玄米を死者の使っていた茶碗一杯に盛つてとがずに炊き、それに山盛
りにして箸を立てる。
そのメシの上に团子をのせる。（小屋原）

茶碗に入れためしを転がすと、枕めしとなる。（二之宮）

庭で、ナベを使い、三徳の上で炊いて枕だんごを作る。この場合、つ

かない米を使う。この時使用した器は一週間使わないでおく。（東大室）
玄米をひいて六つ作る。枕团子を茹でた湯は、湯棺をした後、棺箱の
ところに供える。（小屋原）

カシャ除け 人が死んで、北枕にした後、刃物を乗せるのは、カシャ
を除けるためである。菜切り包丁、鉈、鎌でする家と、刀でする家と
ある。（筑井）

死ぬとサランの布を額にかけ、北向きに寝かせる。その上に刀、ナイ

フ、鎌など何でもいいから刃物を乗せる。ネコみたいな魔物が来ていた

すらをしてはならないから。（小屋原）

告げ 伍長（隣保班長）が割り振つて、隣保班の人が一人でいく。テ

クで一日歩いた。告げがいくと、清めとお量を出す。告げは急がしく來

るので、食事を出してやる。告げには、腹を空かせてやるものではない

という。

告げは腰掛けで御飯を食べる。（小屋原）

二人で組になり、施主の指定した家にいく。納棺の時刻を知らせる。

告げは一軒はするな、二軒は回るものだという。

告げが来た時には米の飯を炊いて尾頭付きをそえてください。コウナガ

でもよい。

告げは上にあがるものではない。（筑井）

組の者が寄つて手分けでツケに出る。一人で歩いているのを見ると、

ツケではないかという。来られた家では、すぐ引込んで食事の用意をし

て、必ずメシの用意をするし、キヨメも出す。ワラジ钱をツケにやる。

これは戦前は二〇一三〇錢であった。（泉沢）

ツケといって近所のものがこの役をつとめる。ツケは必ず二人で行く。

先方へ行くと済めを出してくれた。ご飯をたいてくれて、清めを一杯出

してくれた。その代りに、たばこ钱をくれるところもあった。ツケに出

すご飯は半にえのよくなものであつた。ツケのまわるところは、死者の

知人とか親戚のところで、ふだん着で行つた。（二之宮）

(二) 葬送

湯灌 カギ竹三本又のを組合せ、ナベをかけて沸かす。ヒキビという木を入れる。繩帶をしめて死者をくふ。湯は川まで行って醤油樽・桶二と流す。このときはハタシで行き、帰ってアシアライをする。それは北向きに置いた白の上に波の花を出しておいて、これを身にかけ、足を洗う形をしてキヨメをする。四十九日たなばはは使えない。(泉沢)

近しい人がシキビ(お墓などにある)の湯で体を拭く。晒しを破いて拭く。サルマタ一つでやる。

湯棺のあと、塩を持って川にいき、体をあらう。(下大島)

直系の近親者がする。シキビの葉を煮た水で洗う。フンドシ一つでする。湯灌した水は川へ捨てる。(小屋原)

湯棺をする人には、施主が禪と腰巻・繩絆を出した。シキビの葉を鍋で煮て、その湯で拭く。晒しを布巾ぐらいい大きさに切つたので拭く。ある宗教団体でシキビを飲まして死んだという話がある。(小屋原)

男は禪一つ、女は繩絆だけになつてやる。酒を口に含んで吹き掛ける。

湯はシキビを入れて沸かす。水にその湯を入れて、それで拭いてやる。

死人が男女とも、腰から上は男が拭き、下は女が拭く。

湯棺は納戸でやり、湯は縁の下にすてた。湯棺に使用した醤油樽など

は川に流す。(荒井) ナンドで行う。はだかで、なわだしきをしてする。死者の腰から下は女がふき、上は男がふくことになつてやる。

湯は川へ男が捨てに行つた。死者の着物などは墓場に持つて行つて燃やした。(東大室)

湯灌の時に、しきび(しきみ)の葉を入れる。(二之宮)

普通はなくなつた翌日にする。親戚のものがよつてした。シキビの葉をゆでて近親者がさらして死体をふいてくれた。湯棺をするものは、う

さぎになつて、なわのおびをしめてやつた。湯棺をしているあいだは、一把の綿香をあげておく。

湯棺の時には、女衆はなわでたすきをした。男衆はなわのおびをしめた。(二之宮)

死者の着物 着物は湯棺のあとに着換えさせる。着物はきれいなもので、あるものを着せる。また、お寺から渡された絹かたひらもきせる。

わらじと足袋は、必ず新しいものをはかせる。このほかに、説教や六道

銭(現在は印刷してある)をもたせる。(二之宮)

棺 施主と相談して決める。カメは高いので、古くはタテ棺、病氣で

苦勞をした人で寝棺。(小屋原)

立て棺が多い。他にカメ、寝棺もあるが少ない。棺には六文銭・ジユ

ズ・生前好んだシ好品を入れる。(小屋原)

納棺 湯灌したらすぐ納棺する。よそゆきの下着を着せ、キヨウカタビラを着せ、酒を吹きかけ、生前使つたタバコ、キセル等を入れる。食物類は入れるなどいう。また極楽に行くまでのロクドウのタワシの渡り貧といつて、六文銭をカクシセニにして、着物の裾に縫い込んでやる。

戦前は、八十九割の人が水ガメの大きいのを入れた。これは焼物の蓋がついていて、大胡の葬儀屋に充つていた。入れる時動かないようハトロンのヌカ袋を入れてつめる。棺の中に敷く縫入れの布団は、組内の女がムスピタマを作らないように縫つて作る。(なお新盆のときヒチハイブクロに米を入れて寺にやるが、これも葬式の時作つておく)また死者の額には、匂型の布を麻ひもをつけてしばり、腰絆、手甲、わらじ、足袋(親より先に死んだ者は左右逆にはかせ、着物を左前に着せる)をはかせる。湯灌と納棺が終ればすぐコザに祭壇を出す。(泉沢)

着物左前に合わせて、カクシ銭を包んで入れてやる。

靴子を縫つときには、返し針を結び玉をしない。(小屋原)

道中銭一六道銭を持たしてやる。故人の好きだった物(酒など)を入れてやる。(荒井)

死者に着せてやる着物は物指しを使わないで「ミケントウ」で作る。また糸をとめないと、ぬいぱなしにする。

この時の針をとつておくと裁縫が上手になるという。

タビは甲の部分を左右、逆さにして覆かせてやる。しかし、年の大きい順に亡くなった場合は、必ずしも、こうしない。（東大室）

湯棺が終ると、死者の顔に三かくをつけ足には脚絆を、足袋、わらじをつけ、旅立ちの仕度をさせた。そのかたちで入棺した。（二之宮）

仏の支度たびは左右逆にはかせる。着物は左前。わらじは普通は「返し結び」であるがこの場合は「ひつこぬき」にしてはかせる。

ヌカ袋を持たせ、金を若干と生前愛用したものなどを入れてやる。（當田）

經維子 玉を受けない。もどし針をしない。もうお産をしない人が縫つた。（下大島）

經かたびらは組内の、子どもを生まれなくなつたものが、たまを作らずに縫う。（二之宮）

死人には、反対に足袋をはかせる。（二之宮）

隠し金 頭陀袋に金を幾らか入れてやる。隠し金として着物の裾に入れてやる。エンマ様にとられないように。（下大島）

四十九のダンゴ 葬式の前日、納棺した祭壇の前に米の粉で作った四十九の団子を供える。この団子は経五センチ位のもので、串にさしたもののである。中心はワラ、紙を巻き、麻でしばつて周囲に半分に切つた団子を串にさしたのが、七つずつ七本である。これはヒツカエシナノカのあと近所の人に配る。今は四十九個作るけれど蓋合せて供える。（泉沢）死者の枕元に供える。四十九の団子は五十箇作る。白米で作る。団子を半分に切つたものを巻藁につけて、ユズリをやる時に団子を配る。位牌と形見につけて団子をやる。（小屋原）

一〇日（埋葬の日）につくる。近所の女衆がつくった。数は五十五コ。一コはお勝手の人に毒味をしてもらつ。四十九コの「だんご」をニワバの人

にやつて、麻糸で切つてもらう。そのため、これを系きりだんごともいっている。だんごは串さにして、二本のわらのつとつにさした。べつの方法としては、三宝（一对の三宝）にのせたところもある。これを仏前に供えた。これは四十九日までかざつておいた。四十九日に位牌と一緒に親類縁者の人たちにくばつた。現在では、葬式の日に、位牌と一緒に親戚の者にくばつてしまふ。場所によつては、だんごをつくらないで、だんごの絵を書いて、つとこにはかしている。（二之宮）

水飲み団子 人が死んだ翌日、近所の女衆がつくつた。これは枕なしのあとに、お膳にのせて、死人の枕もとに供えた。（二之宮）

葬式前の食事 妙さんが拌んでいる時、シノギといつて、御櫃に入つて、いる飯をたとえ一箸つでも食べてもらう。（下大島）

出棺 読経中にチカラメシ、誓一ゼンをつけて廻し、親戚の者は一一粒とつてたべる。読経後、繩で網をつくり中にカメを入れ、（カメの周りにカンマキというきれいな布を巻く）カツキ棒一本を四人（アヤッボリの人）でかづく。棺が出ると、き竹製の鳥居をくぐる。

茶の間の前に「カリバリ」とい、竹を割つた三本を使い門の型に結んだものの中を通じてやる。（當田）

出棺前に坊さんにおがんでもらう。この席に參列しているもの（近親者）には力めしをだした。これはご飯の粒を二、三粒はさんで出したものである。棺の上には、弓矢と刃物をのせておく。出棺のあとは、座敷をはきだす。そのあと、あと念仏をする。念仏は、仏様が墓場へ着くまではしているものといわれている。（二之宮）

棺は近親者四人でかづく。上に天蓋を乗せる。暑くないようにもど塵よけともいう。（小屋原）

棺をかづぐ人のワラゾーリは買つた。掃りには自分で代りのものを

持つて行つてはき代えて、持つて来る。蚕の時にはくと蚕があたるとし
て、貴重なものだった。(小屋原)

庭を三回まわってから出棺する。(小屋原)

アナマワリ 庭であるまわりをする。真中に四方門をたてて、そのま
わりを三まわり半まわる。あなたまわりをしながら、矢を一回射る。弓を
射る人は近親者、うしろの方角にむけて射る。矢は四十九日のあいだ、
原の棟にいるという。もう一本の矢は、墓場で、埋葬してから射る。(二
之宮)

力めし 普通の御飯は焼き、出棺前に、二、三粒、近親者に分ける。

(二之宮) おいたし念仏 出棺する時、近所の人が念仏をとなえた。これを「お
いたし念仏」とか「送り出し念仏」といっている。(東大室)

近所の人が、棺が出た後すぐに後念仏を唱える。女人の場合には念
仏が余計になる。
また、夕飯を呼ばれた後、組合の人が念仏をする。(筑井)

葬列が、庭で穴回りをするときに後念仏を年寄りがやる。これを聞き
ながらお墓にいく。(下大島)

ホド払い 葬式が出たあと、ホド払いといってサン儀の上に枕飲を炊
いたあと、灰と、しゃくしきをのせ、お寺から貰ってきたお払いの札を立
てて三本辻に置く。(西大室)

出棺の後きまり 出棺後、家を掃き出し、死者が生前使っていた茶
碗を欠く。(筑井)

葬式の時以外は掃き出してはいけない」と昔からいわれている。(西大
室)

葬式の役割 ニワバという役の者がたつ頭ちょうちん、花、花かご(死
者の年の数だけ金を入れる)を作る。穴掘りは四人で行なつた。(富田)
漁島イッケの場合、イッケの者だけがよつて(集まつて)ツゲなどを

したので、他の人はニワバといつてハヤカゴや、アナッボリをした。ア
ナッボリは四人ずつの当番になつていて、他は人数があるので、手間ひ
まかけて竹トンボなどをつくつたりした。(荒子)

葬列 先導(六地蔵・ローソク三本を持つ・一人)、杖(女性)、提灯

(一人)、花籠(一人)、四本旗(竜頭のついた旗、四人)、弓、写真、晴
生花、果物、位牌(相続人)、棺、墓標、参列者の順である。帰りは行き
に通った本通りを通らず、すぐじ(近道)を通り。(小屋原)

六地蔵、高張り、四本旗、花籠(故人の子や孫で成人が持つ)、花籠を
振つて金をまくのは功德を人に分けてやるために、造花(四化華・花輪)
米袋(仏様の食べ物)かぶり着、写真、香呂、晴、位牌、導師、遺骨(施
主が持つ)、天蓋、弓、墓標。

米袋、かぶり着、香呂、晴は、近親の女の人が持つ。なお女衆は、サ
ラシの三角のもののかブリモノーを頭につける。

坊さんの葬式の場合には、銭鉢の前に酒水がつく。道中を清めるため
である。(筑井)

野辺通りに近しい人だけ三角のサラシズキンをかぶる。(下大島)

花籠 龍の中に撒き、錢を入れる。穴廻りする時に龍を振つて錢を撒く。
近所の子供達がそれを拾つが、拾つた錢は家中に持つてくるものじや
ねえとて、商ない家ですぐに使つてしまふ。(小屋原)

自宅の庭で穴回りをする時に、花籠の金をまく。穴回りは左回りに三
回半。(筑井)

銭鉢 普通はドラという。葬列が進み、曲り角ごとに打つ(筑井)

射る。(筑井)
葬列で、役を持たない人は、竹で杖をこさえて色紙を巻き基に持つて
いく。(下大島)

弓 弓は近い人が出棺の折に射る。矢は二本作つておいて、墓場でも
引き馬 もとは、飼っている馬を、葬式の時に引いた。(二之宮)

アナホリ 葬儀が一区のときは一区、二区のときは四区からアナッボリ

(ノラヤ)が出ることになつてゐる。葬式当日間に合うように掘る。参列者は正装しているナッポリには施主がノラベントウ(四人分)を出す。ノラベントウは金

リ物の曲物のオハチで、酒、メシ、シリル、その他のおかずで、これは持

帰つてはいけないとされ、四人分全部始末する。酒は一升みんな飲む。ノラベントウを持って行った二人も、一緒にオショウバンすることになつてゐる。

なお穴の区域を買う金といつて、ジカイセンを穴掘りはもらい(四隅と真中で五つ、合計五錢)そのとき使つてしまふ。アナッポリに当つた人は、香典を出しても気持程度のものである。また大正の頃から穴掘りはヒツカエシナマカに呼ばれるようになつた。(泉沢)

四人一组で、名前の書いてある四人の一番始めの人には、番長板を渡しておく。その人達が掘る。組は次のようである。

線路下・上(本郷)

川東・川西(西原)

布施川一家・一家で無い人(長谷戸)

前原・川岸(前原)

南本郷・種々の人

穴掘りの器具(ツルツバシとシャベル)は組合で用意してある。

清めに酒一升を持っていく。この酒は家に持ち帰さない。(小屋原)

北組と前組が一つになる大きな組が出来ていて、回り持ちでやる。六人で施主のところに行き、穴の位置を決めてもらつてやる。

お昼までには掘り終わるので、施主の呉れた一升を墓場で飲む。

穴つぼりの人は、葬列の時にカガリ火をたく。

穴つぼりの道具は一週間は使えない。(筑井)

穴掘り番は四人一组で出て、同じ組内で不祝儀のない隣保班から出る。

道具は昔は共用のがあったが、今は葬式の出た家のを使う。終ると土を私わずに持つてきて、家の外におき、一週間は使わない。

墓直しをして土山をこしらえるまでしてくる。参列者は正装しているので、汚れ仕事を一切する。

墓場で清めをしてくる。

穴掘り番が一番の賓客のような待遇を受ける。お包みをしないで御馳走するのは穴掘り番だけだ。(小屋原)

他の組から當番が四人出て、棺を担いだり、墓穴を掘つたりする。

主が用意した唐ぐわやシャベルを使って穴を掘る。道具は墓地へ置いてくると、墓直しに行った者が、家へ持つてくる。一週間はきよめて、使わないので置く。(泉沢)

墓ではアナバンの人が火を吹いて待っている。桑でも何でもいい、煙りが立つていればいい。葬列が来たぞ。火を付けるとつけた。

モココを荒縄で作つておき、アナバンが棺を仏を北向きにして、穴の中に入れる。近親者が一通り土をかけたら、アナバンがすかり埋め、墓標を立てる。昔は土まんじゅうに塔婆のようなものを立てるだけだつた。(小屋原)

イキには酒一升に、生豆腐、キンピラ、ムスピを施主が出す。これは残してきてはいけない。酒の飲めない人は、飲める人に飲んでもらう。

(下大島)
アナカタのゾウリ、アナカタのはいたゾウリをもらつてきてはくと、蛋があたるという。(二之宮)

埋葬 棺を穴に入れ、惣領者がエンキリナワを切る。そしてアナッポリが埋める。子供、親戚の者は一塊の土をかぶせる。小さい土饅頭の上にイヌツバジキを立てるが、これは穴掘りがこしらえる。掘つた道具は土をとらずにそのままにおき、一週間は使わない。昔は道具の柄を上げかえた。田畠で作業して土をとらないでおくと、「ジャンボン道具じやあるまい」という。(泉沢)

読経をしながら埋葬する。土葬の場合には、親戚の人が土を一握みずつかける。棺にかかっている網を一本切る。縁切りという。

今は、オマンダラ（蓮華のこと）を引いて遺骨を乗せる。

埋葬の後には、墓場から寄り道をしないで帰る。（筑井）

小屋原では、親戚が土をかけ、あとは穴掘りが土鏡頭を作るだけである。

縁の網 埋葬の時、棺を結わえてある網を切るが、それを縁の網を切るという。菜つ切り包丁で切る家、鉈、鎌で切る家もある。（筑井）

墓直し 葬式が終った後、同じ日に近親者が墓地へ墓直しに行く。墓

の上に大ツバジキや垣根をつくって、形を整える（泉沢）

犬ツバジキは、棺を担いだカツギ棒の青竹を割って、外側へ開いて墓の上へさして置く。カツギ棒は六尺ほどの青竹2本を使い、もう一本で垣根をつくる。

墓の垣根は、カツギ棒を割って土盛りした回りに四角に組む。名は不明。（泉沢）

翌日、肉親がやつた。当日は大っぽじきをしておいて、翌日ハジキを取り、墓を直す。（筑井）

墓直しはその日にやつてしまふ。親戚と隣保班をする。

近い身内の者が、葬儀の日、三時出棺の場合は四、五時頃行ってやる。

埋葬したあと、会葬者は全員一旦家へかえる。そのあと親族のものが再び墓へ行って、墓なおしをする。花かごの竹をつかつてつくったとら

はじきをとつて、盛土のまわりに、割竹で垣をつくる。（二之宮）

ハジキ 竹を四本に割つて墓に立てる。大が掘らないよう。（小屋原）ハジキ竹という。山犬除け。犬が餌に寄らないといふ。（筑井）

清め 白を入口のところに置く。白のところにある塙を指く。タライに足を入れる真似をする。（筑井）

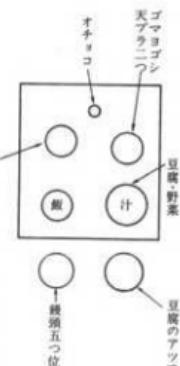
村の衆で、墓場までいかず、角まで送つて帰つてしまふ人には、盃に

一行すつ飲んでもらう。（下大島）

葬式から帰ってきたときには清めてから家中に入る。とぶ口（入り

口）に白をかぶせておき、その前にたらいをおき、なみの花（塙）をそえておく。なみの花で物をきよめ、たらいで足をあらうまねをしてから家中に入つた。（二之宮）

野邊送り後の食事 一人につづつ御膳が出る。清めも付ける。食べられない子供にも膳を出した。



昔は引き物はなかつた。略式になつてから、蓮の花のミジンコの菓子を付けた。

御膳は黒椀で、冠婚葬祭に使つた。二十膳ぐらいあつたが、不足の時には貸し借りした。（下大島）

土葬 一二、三年前から火葬が一般化してきた。四十九年六月から、土葬は許可されなくなつた。（泉沢）

御念仏 葬式の晩組合、親戚が寄つてやる。音頭取りは他の組からか

りてくる。十屋原では区長さんが音頭を取る。

中入れといって、真中に休みを入れた。お茶やお菓子が出る。一つを

十回ずつやるので時間がかかった。（下大島）

御念仏

一、南無阿弥陀仏 南無阿弥陀

二、十王十体 南無阿弥陀

南無阿弥陀佛 南無阿弥陀

三、融通念佛

南無阿弥陀佛 南無阿弥陀

四、道の端の六地藏

唱え申せば偉徳に
六識のがる

南無阿弥陀佛 南無阿弥陀

五、朔日四日十四日二十四日の御念佛に
八万余尋の血の池を申し埋めろよ

南無阿弥陀佛 南無阿弥陀

六、朔日四日十四日二十四日の御念佛に
八万余尋の血の池を申し埋めろよ

南無阿弥陀佛 南無阿弥陀

(但し、右は女靈の念佛のみ申すこと)

六、西は西方極樂淨土の生死が池の蓮の花が一遍申せば一本開いて

西の高野へ輝き渡れば即ち仏に疑いなし

融通念佛 南無阿弥陀

七、(十三仏)

南無、不動、觀音、文殊、普賢、地藏、彌勒、藥師、觀音、勢至、

阿彌陀、阿閻摩、大日、虛空藏。

南無十三仏 南無阿彌陀

八、おんあきやべーろーしやな まかほだら まにはんどま じん
ばらはらぱりたやうん。

九、南無阿彌陀佛 (笈井)

「念佛申し」といって葬式の時などに念佛を唱える集団が西大室には

三つある。南宿(五人)北宿(五人)原組(六・七人)の地区である。

念佛申しは、葬式が出来る時(穴まわりの時)「送り出し念佛」を唱える。

「追い出し念佛」ともいっている。またその夜「ひつかえし七日」といっ

て念佛を唱える。ひと七日には唱えない。ただ、女人が死んだ時には「女

人念佛」といって七日念佛を唱える。

また、「寒」のうちに葬式の出た時は念佛はやらない。寒のうちにオハギを作つてはいけないともいわれている。(西大室)

挿摺 昔は、葬式が終つたあと、施主は正装して、酒代をもつてお寺

へ挨拶に来た。最近は、うちで、和尚さんに、お世話をなりましたとい

うだけである。(二之宮)

和尚さんのおちつき もとは、和尚さんが葬式のあるうちにへ行くと、

おちつきというのを出した。すしを二コとかそばをすこし出した。これ

は和尚さんだけに出したものである。(二之宮)

葬式の翌日 御苦勞呼びといって穴掘りなどを呼んで、御馳走と清め

を出す。(下大島)

〔三〕 葬後の祭り

墓参 一七日の間は、近所の人が毎朝お参りにいく。団子を毎日作つて持つていく。

団子が早くなくなると後生がいいという。(笈井)

一七日までは、近所の人が毎日お参りにいく。(小屋原)

一七日まで近しい人だけが寄つて、御飯を食べて御念佛とする。(下大島)

初七日までのあいだは、毎日墓参りに行く。七本塔婆を一本ずつさしこんでくる。墓参りに行くときには、だんごをつくつてもつていつあがた。水や練音もあげた。

初七日がすむと、そのあとは、七日ごとに墓参りをした。七七日(四十九日)までのあいだは行つた。(二之宮)

三十五日 お棚上げ。本当は四十九日である。坊さんがきて絆を上げる。

餅の小さいのを四十九個づくり、お重に入れてお寺に持つていく。坊

さんが一つの餅にボン字を書いてよこす。それを墓に埋める。(下大島)

オタナアガリ 昔は葬式より四十九日目に位はいを仏だんに上げたが

現在は三十五日目に近所、親せきを集め供養して仏だんに上げる。又、

この時に位はい分けを行なう。オタナアゲとかイミアケともいう。(富田)

ふつうは四十九日目にたなあがりをした。都合によつては、三十五日にたなあがりをすることがある。この日まで、十三仏の掛軸をかざつておいた。この日、四十九の餅をついて、つとつこに入れてお寺へもつていった。また、近所や親戚にももちをくばつた。この日には近親者がお見舞にきたので位牌くぱりをしたり、ゆずり（かたみわけ）をした。（二之宮）

タチ日の餅といって、砂糖も塩を入れない餅を作る。餅は親戚と組合に二つずつ配る。四十九日になると、お櫻上げで、先祖の位牌となる。

今は三十五日にする家もある。（筑井）

老婆がヒッカエシナノカの念仏をあげる。一七日にはやらない。元は七日毎にやつた。四十九日のオタナアガリ（仮壇に入る）の念仏には、念仏ダマ（引物の鏡頭）を出す。（泉沢）

人の魂は死なないうちに身体からぬける。そして四十九日のうちは屋の棟を離れない。四十九日の餅をつく、その杵の音をきいて離れるという。四十九日の餅を四十九の餅といい、小さいのを四十九の葉のストラップに入れて寺に届けた。（西大室）

四十九日までは古い仏とは一諸にしないが、四十九日過ぎてから先祖の仏と一緒にする。そして位牌を兄弟、子供、新宅に分ける。古い時代に出た新宅にはやらない。この時にから位牌はやるものではないとして四十九の団子をつけてやる。

四十九の団子を作る白の音を聞いて先祖は立つ。それまでは屋の棟にいる。

故人の使っていた着物などの片身わけをする。（小屋原）

棚上り餅をつく。この杵の音で死者の魂はその家を去るという。この餅はアンをいれない。お寺様にはこの日、十三仏を返しに行く。その時この餅を十三個、ツツコに入れて持つて行く。（西大室）

四十九日にいみあけになる。それをたなあがりといい、仏様が仮壇にあがるという。場合によつては三十五日にする都合もある。死んだ人の

魂は、四十九日までうちの屋の棟にいるという。四十九のものきねの音を聞いて、屋の棟をはなれるといった。これをうすあけといった。それまでは、死人の出た家では、白をつかってはならないといった。なお、

四十九日に、葬式のときに射た弓の矢がおちるともいつた。

人が死ぬとお寺へ行くとか、墓地へ行くとかいう。死んでから四十九日の間は、死人の魂は屋の棟にいるという。四十九日の餅をつくと、屋の棟をはなれるという。四十九日のことを、うすあけといつて。（二之宮）

七本塔婆 小さい塔婆を墓地に七本立てておき、七日毎に墓参して一本ずつ抜いた。四十九日になくなる。仏があがれる。（小屋原）

四十九日にまとめて土鏡頭に立てる。もとは一本ずつ七日毎におさめた。（泉沢）

位牌分け オタナアゲの際にゆずりと一緒に位牌分けを行なう。「空位牌」は渡さないのでないといわれ、故人の物をかならずつけて渡す。葬式の当日は泊つてはいけないとされている。泊ると「ヒト七日」一週間とまらなければならない。（當田）

神棚 四十九日が過ぎるまで、神棚へは供え物はしない。（東大室）

死人の魂 四十九日屋の棟にいる。（筑井）

魂が屋の棟に一週間いる。（小屋原）

四 年 忌

年忌 三年、七年、十三年、二十三年、三十三年にする。

年忌にあたった家では塔婆を立てて、坊さんに拌んでもらう。

三十三回忌に杉の木の枝付き塔婆を立てる。「一つか二つの葉がついていればいい。三十三回忌で仏でなくなる。（小屋原）

一、三、七、十三（法事をして供養は終り。）十七（これ以後は塔婆をたてるだけ。）二十一、二十三、二十七、三十三（葉付きの塔婆といつて、杉の木を削って威名を書いて立てる。）

三十三回忌 横か杉の木を二尺位切つて塔婆にする。葉がついていい
ばいい。

私は三十三回忌で天にあがる。以後はまづらなくてもいい。(小屋原)
塔婆の立てじまいといつて、葉つきの塔婆を立てる。(二之宮)
三十三年忌にハツキトウバを供える。杉の木を削つて、寺で書いたも
のである。(泉沢)

(四) そ の 他

新盆 棚を作るが、新仏は別にする。席が無ければ、端にする。

迎え盆には、先にいき、白い提灯をつけてくる。白い提灯は新盆だけ
で、普通は弓張りを付けで迎える。(下大島)

組の人がお棚参りにいく。(箕井)

新盆の時は仏事ならいいけど神事は遠慮する。ブクをきいているから。

近親者などが「新盆でおさみしうございます」とかいつて見舞いに
行く。新盆見舞いう。(小屋原)

盆中の葬式 やり方はふだんのばあいとかわらないが、ホトケ様にシ
ラジをかぶせて送る。お先祖様を迎えるときに行くのだから、すこし後め
たいところがあるということだろう。(富田)

カブリギ 死んだ人の一番いい着物を坊さんによく。(下大島)

流れ薄頂 赤い布が早く白くなれば、血の池地獄から逃れるという。
(下大島)

産婦が死ぬと、川のふちに赤い布を張つておいて、通る人がひしやく
で水をかける。色が次第にあせると供養になるという。流れかんじよう
という。(泉沢)

広瀬川の縁で川の旗をやっているのを見たことがある。四本柱に赤い
布をつけてある。小屋原では、そういうことはしない。(小屋原)

お産で死んだ者がある家では、川に四本杭を打ち、これに赤い布を張っ
て、家族の者がひしやくで水をかける。(下増田)

昔は、お産でなくなつた人が多かつたという。お産でなくなつた人の
ために、流れ勘清というのをした。これは、赤い布を、竹などで四本く
いをつくつて、それに張つて、川の流れのところにたてておいた。これ
に、通行人が、柄杓で水をかけてやつた。赤い布の色が早くさめるほど
仏様のためにいいといった。(二之宮)

お産で死んだときは、神沢川のところに四隅を竹で張つた赤い布を立
てておき、ひしゃくで水をかけてもらい、赤い布が白くなると成仏でき
るという。(新井)

ミズゴ 流產でなくなつた場合にはミズゴという。(二之宮)

ガキボトケ 一人前にならぬうちになくなつたものには、ガキ
ボトケという。これは、成人しないものだけでなく、独身のままなく
なつたものも、何才であつても、がきぼとけといった。(二之宮)

耳ふさぎ 同年輩の人が死ぬと、馬糞を紙に抱んで、耳に付ける。(小
屋原)(下大島)

同じ年のものがなくなつたときには、耳をふさいでおけといわれた。
そういうことをむかし聞いた程度であった。(二之宮)

二つの子 二つの子は葬式に立ち合わせてはいけない。二つの子は伊
香保に連れていくとなつた。

二才の子が死んだ時、伊香保の二つ娘に埋けた。(下大島)

仮の墓 一人統きて死ぬと、三つあつてはならないといつて、人形、
ヒナ様をいけて仮の墓をつくる。(泉沢)

生れかわり 死体の一部にしてしをつけて埋めてやると、その人は生
れかわるという。その場合、生れた子には、前の人をしてしがついてい
る。それを除くには、その人の墓の土を持つて来て、それをふりかけて
やらなければいけない。この村でもそういう例があつた。だから死体に
はしるしをつけるもんじやない。(西大室)

大胡の宮開橋の近くに住んでいた人が死んだ。そして足のヘッタに字
を書いて埋めたら、その字を足に書いた人が生れたという。(泉沢)

死人の体にシルシを付けてはいけない。南無妙法蓮華經と書いてやつた
ら、牛の背中にその字が出た。人間が牛になつたりするからいけない。

(下大島)

死人を掘つた話 若い坊さんが死んで、写真を入れてやつた。金だん
べと掘つた。親戚で納棺を見ていた。欲の皮の突っ張つた人がやつた。

(下大島)

入定墓 来迎寺の本堂の道一つ隔てた相向いに坊さんがいかつてい
る。その坊さんは、生きている内に、埋めさせた。この世のことは終つ
たといつて穴に入り、竹の節を抜いて息をしていた。食物を入れると子
と鐘がなる。一週間念佛していたが、その後聞えなくなった。今そこ
には石宮がたつてある。その場所は以前梨昌王の梨昌島であった。梨畠の
中には石宮がたつてある。その場所は以前梨昌王の梨昌島であった。梨畠の
中には石宮がたつてある。自分がおじいさんから聞いた話だが、おじいさんも聞いた
話だといつた。(下大島)

荒口町観音寺跡の輪廻塔

荒口町観音寺跡に壯麗な、比較的形の整つた輪廻塔がある。全長
二・五〇m、笠石の幅六〇cm、火車の塔身七〇cm、台石の高さ四三cm
台石の幅五五cm、火事の忍高さ二五・五cm、横幅六・五cm、火袋だ
けが無い。

銘に延徳三年(一四九一)十月廿一日とある。現存の輪廻塔と
しては優秀のものと言えよう。

荒口町観音寺跡の輪廻塔

銘 延徳三年十月廿一日

荒口町会議所管理

飯土井町の輪廻塔

飯土井町字堀西七五六番地 墓地十八歩地上 関根森雄氏所有地
輪廻塔がある。火袋が無く、火事の塔身と笠だけである。全長四
五cm、笠幅六六cm、火車の塔身六三cm、台石の高さ一八cm、横幅五
三cm、銘 延徳二年十月十六日(一四九〇) □□赤石道林禪定門

何れも室町中期(將軍足利義植、義澄)の物が多いようである。
応仁の乱の後を受けて世は特に戦国時代に入り国民大衆は常に戦火
の恐怖に見舞われ生活は窮乏して、加賀の一一向一揆を始め京都の土
民さえも一揆を起し、宗教は日蓮出で、他宗を誹謗し宗教界に大
波紋を起し、諸大名は盛に兵火を起し攻城これ事とし修羅の老と化
した。こうした乱世の下に、輪廻思想や、その信仰が大衆に浸透し
て行つたことは当然であろう。輪廻塔には戦国時代のものが多く見
受けられる。

輪廻信仰とは人が死んで更に生れ、又死んで生れる代を
幾度か繰返すことで、仏教ではこれを三界(欲、色、無色)六道(地
獄、餓鬼、修羅、人間、天上)に迷の業を重ねて苦しむものである
と説くそしてこれから脱却して惡業輪廻を断ち切つて、速やかに極
樂の淨土に安住させる功德として供養の為に建てたのが、この輪廻
塔の信仰である。

六弥太登良磨(故人)

年中行事

はじめに

城南地区が前橋市の東南部に属しているだけに、伝統的な年中行事の改廃は、かなり激しいものであった。古老の記憶の底から拾い上げた伝承のうち、この地区に比較的顕著に残っていた風習について取り上げてみよう。

正月の年神を祭るお棚板に、クヌギの細長い板五枚を繩で編み合せたものを使用する風習が笄井にあった。これは千代田村で割り竹やヨシを編んで使用したやり方と共に、年神棚にふつうの一枚板を使つ以前の神座の姿を伝えるものである。

元日の夜と年取りの晩(節分)、あるいは大晦日の夜、米を少量オタキアゲにしてそつくり供えることを「マルビラタク」と呼んでいるが、特別の供物だったものであろう。とくに小正月の場合、それに森の箸十二膳をさして供えたのは、北橘村などの「ミタマノ飯」と同じもので、以前はかなり広い地域で行なわれていた形式であろう。

正月の五日までを五カソ日といつて、五日で初正月を終えて六日から稼ぎに出たという泉沢の例は、「ふつう『三ヶ日』」ということに対する五ヶ日であろう。ここでは六日が仕事始め。山始めになつてわら仕事や山の草刈りを始めていた。七草まで松の内といつて、正月気分でいたことが、次第に五ヶ日、三ヶ日と日数を少なくしていくよすを示して、興味深い言葉である。六日を六日年越といふことも関連していよう。

小正月の飾り物として、「十二」と「十六」というのがあり、ニワトコ

の木の芽がそれぞれ十二個、十六個あるものを取つて供えた。また、マユ玉を供えるのに、桑の株を二個取つて来て、一方に十二個、他方に十六個のマユ玉を付けて飾つたこともあり、葛塚本町でも見られたことと共通している。この十二は十二月で一年を意味し、年神を祭るもので、マユ玉のほかに、餅をサイの目に切つてナフやエノキの枝にさして飾る家が多かつたという。これらから、小正月が本来は年神を祭り、穀物の豊穰を祈る祭りだったものに、マユの豊かさを願う蚕神祭りが加わって、一層騒やかになったことが読み取れそうである。

初夏の苗マ作りの時、小正月のカユカキ棒を水口に立てることは、県下に共通しているが、そこにモミ種を三チヨンボ供えて拝み、鳥除けの呪いにしたというのは珍しい。また、カユカキ棒に挿まつた餅を食べる蛇除けになるというのも珍しい。なお、小正月十五日の小豆カエを苗マの水口にまいて、蛇が入らないようにしたともいう。苗マの水口で田の神祭りをした痕跡が、これらの行事の中に表われていると見てよいだろ。民間信仰では蛇は水神を表象しており、苗マは水神の加護を最も必要とする場所だから、ここに蛇が登場するのは意味深いことである。水神の信仰が崩れてから、蛇を除ける話に変化したと考えられよう。

正月十八日の石山馬頭観音は、以前に馬を引いた参詣客で賑わった所で、現在は農家から馬が姿を消して、思い出だけの風俗となつた。エビス講の語源について、大尽の大黒様が貧乏なエビス様をこ隠走に招待して「エビス来ウヤ」と呼んだのが、転じたものというこじつけ話が、ここにもあつたのは、いかにも笑い話らしいおもしろさによつて、

伝播したものであろう。こんな話がと、一笑に付してしまつようなどが、意外な伝播性をもつものである。

二月のコト八日に強飯をさん儀（依はし）に載せて三本辻へ出したといふが、神を送り出す行事の一種で、この日が神送りの日だったことを表わしている。

四月に行われる下大屋の産泰神社の大祭は、俗に「荒砥の産泰様」と呼ばれて有名だが、盛んな時は一週間以上もお祭りをしたという。近隣の子持ちの女衆が集まるほか、広く産泰溝ができる遠方からも代参が来て大変な騒わいであった。そのため、下大屋は「産泰」と呼ぶ方が通じることであった。

五月の赤城山の山開きと三夜沢の赤城神社の祭りのため、戦前は若衆たちがこそって赤城登山していた。ただし、十六才か十七才とかの娘は登山できないといわれるのは、赤堀村の道元の娘の入水伝説によるものであろうが、田植え前の時期に、水を司る赤城神社に侍る巫女との関連を考えねばなるまい。

八月初旬の盆前に、火トボシ行事が全く見られないかわりに、辻念仏があつたことは、早くから仏教的な行事に入れ替つたためであろうか。七夕は釜のふたがあく日で、赤城山から仏様が来る日という小屋原の伝承は、俊様が西方浄土でなく、赤城山頂に集まっていたことを物語つていて興味深い。

盆の敷物にマコモのござを作る風習が東毛地方からここまで分布していることもわかつた。

下大島では盆の翌日に百万遍の念仏を申して、はやり病を村境まで送り出す行事を行なつていた。盆の精靈通りとともに、疫病までも送り出そうとしたものであろう。

八朔の日にゴボウをもつて、嫁が里帰りをする風習がある。県内ではショウガをもつて行く風習が多くみられる。ゴボウをもつていく地域がどのくらいのひろがりをもつてゐるか、今日の課題である。また、この

日をタノモンゲエシといつてゐることも古い風習の名残りとして興味がある。

秋祭りのオクンチに若衆が神社にオコモリして、たき火をしながら祭の世話をしている所へ、家々から早期に赤飯をふかして重箱に入れて持参し、盤台に供えてくる祭り方は、古い新穀感謝祭の形を示すものといえよう。

神無月の旧十月に、神々が出雲国へ集まつた留守居をカマ神がするため、オカマノルスギヨウといつて、六の日にぼた餅を作つて供える風習は、東毛地方によく伝わっている。

旧十月十日の十日夜の餅を「縁組み餅」といつて、一色つくが早くつくほどよいといふ。神様が縁組を「アレトコレト」決めているうちに、しまいには忙しくなつて「アリヤコリヤ」となつていい縁組が結べないから、競走で早く餅をつけといふ伝承は、他の地域と言葉まで似ていて、伝播する力の強さを感じる。

なお、十日夜を一日早くする九日夜の行事が、源義経伝説と結びついていることは、戦場地区と共に通している。また、十日夜の餅をつくとオトウカ（稻荷、狐のこと）が騒いで困るので、九日夜に餅をつくという

伝承は、十日夜の行事と稻荷との関連を暗示している。

北毛地方に多い大師粥の行事が、ここでは全く聞けなかつたことも一つの特色であつて、そのかわりにオカマ様の行事が色濃く伝わつて、東毛地方と深い関連を持つていたことを示している。

以上、断片的に気づいたことを取りあげてこの地域の特色に触れてみた。各項目の記述については、東部の方から西の方へ順に並べて、地域の変化を比べてみる便を考慮した。（間口正己）

旧暦 七十六才の人が記憶している限りでは旧暦は使用していない。

行事にのみ旧暦が残っている。(筑井)

年神様 卯の日卯の刻に帰る。元旦が卯の日の時は、次の卯の日に帰る。

年男が一切用意をするので、大変だから早くあがつてくれた方がいい。

(筑井)

年神様は卯の日卯の刻にあがる。卯の日が早い方がいい。早くあがつた方がケガしななくていい。永くいるとケガのある事ができてしまいがちだ。(小屋原)

正月様は卯の日卯の刻にあがる。長くない方がいい。長くいるとケガがあるから。(下大島)

年神さまはおとなしい神さまで、アキノカタといい、さわっても怒らない。オコリンボでない神さまである。トシトク神はいい神さまだ。(飯土井)

年神はとしとくじんさまという。(二之宮)

年神様のお礼 捨てないで神棚にとつておく。お札の東が大きくなる程縁起がよい。

タルマは三年毎にドンドン焼きで燃す。(筑井)

コンジンさま コンジンさまはオタナに上がらない。人間の中でも他人につかむることをコンジンサマというが、意地の悪い、すぐ腹の立つわりい神さまで、知らずに木を切つたりすれば、塩で清めようとしてもあやまりのきかない神さまである。(飯土井)

年神棚 昔はお棚板を売りに来た。新しい松板(巾一尺)を買って、

正月棚を作った。天井からカンザシを下げて、鳥居のヘタを作つて、棚を吊るすようによつて作つてある。正月棚はアキの方を向ける。シメ縄(あら縄)で天井から掛けて吊る家もあり、鳥居の形のオシメ縄を作つて縄にしばり付ける。垂れを七五三に付ける家もある。お松を棚の四隅に付けたり、コジッコメを付けたりして飾る。(泉沢)

お棚板を天井から吊つて、お松や尺ジメを飾り、その年の歳徳神の方に向に向ける。お棚には年徳神・天照大神・豊受大神を祭る。そのお棚の下で、年男が朝暗いうちからお祝いをした。(泉沢)

オカオガクシを前に飾つた。祝い物としてコンブ、頭付ゴマメ、麻、カキ、ヤブコーシなどを、棚の前に吊るした。(泉沢)

年神様はへつにどこからくるといつてない。才徳神といつて表座敷に棚を作り「オ顔カクシ」を作つて、アキの方へ向けてつる。(東大室)

ザシキのアキノ方の方向につくる。たなはサシキの中央に専用の場所があり、オタナ板はクヌギの木を新しく割つたものを幕市で買つて来た。中は四、五寸のもので三枚、長さは三十七センチ以上。正月だなの棒の外側にしばりつける。

トシトク神はタツミの方に向く。(飯土井)

部屋のまん中に棚をつくるところがあり、ホズをさしこんで、センを入れればすぐに正月だなができるようになし、その年の「方」を見て棚の向きを変えられるようにする。棚は二段になっていた。(荒子)

毎年正月につくる棚板はきまつてある。一夜かざりはするものでないと、おかざりは暮の三十日にする。(二之宮)

たなのオシメは正月だなをつるす棒の双方につける。オマツは小さい

三階松と竹とをつける。(飯土井)

オシメにつけるおかざりは竹クギでつるす。

ミカン ダイダイの代りで、代々円満というので一個とすると。

ホシガキ よくわからないが、「カキアゲ」ということかも知れない。

コブ よろこぶ

麻 白髪を表わし長寿のこと

タヅクリ 文字通り田作りで百姓にとつて縁起のいいもの

栗 條り合せがいい
(飯土井)

てぬぐい

ノシタタミ

のよう

に三

角に折つたたんで突きさしておく。

オタナに近戸神社から配られる歲徳神のお札をまつり、アキの方(恵方、年によつて違う、暦に出ている)へ向けて神棚とは別に座敷に作る。

一枚板を作る家もあるが、クヌギの細長い板五枚を使つて作る。これはカンナをかけず切つたままの板で、繩で縛つてオタナにする。繩を切

らすに五枚の板をつなぎ合わせる縛り方をする。これを「ナワキラズ」と言つ。オタナは新しい板を使ってワラで結んで作るのがいいのだが、古い板を使つているのが多い。暦を見てアキの方へ向けて飾る。十四日のカザリカ居形に作つてオタナの前に下げる。(笠井)

籠餅、みかん、こぶ、柿等を家例により供える。お顔隠しをワラで鳥居形に作つてオタナの前に下げる。(小屋原)

エまで飾つておく。(泉沢)

松飾り カド松一本、井戸、屋敷稻荷、家畜小屋、便所、肥やし場、

墓、大神宮、荒神、等へ松飾りを受けた。白、手桶にはオーシメを巻いた。

神社にはオーシメを供えた。

肥やし場はもとはワラグネで囲つて、風呂の排水をかけて置いた。(田に出した)。(泉沢)

縛ジメ 玄関と表座敷の上に縛ジメ繩を張り回らせた。(下大屋)

座敷の鴨居位の高さに、オーシメを全部にグルリとまわす。それを「長

ジメ」と言い、ほぼ一定間隔をおいて七本、五本、三本のワラを下げる

ようになる。普通の年だと七、五、三が十二組、うるう年だと十三組下げる。(笠井)

おかお隠し 幕の三十日に、おしめをつくつて、正月棚をかかる座敷

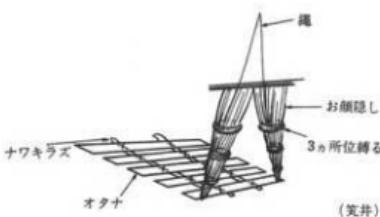
(おもて座敷)のまわりに、おかおがくしとて、おしめをはつた。(二之宮)

年男 男衆が二日まで早起きして、食事の支度をして、赤飯をふかす。

餅がつけないから、赤飯をふかすが、家によつてソバ家例・雑煮家例などがある。女は汚らわしいから、年男がやる。(泉沢)

吉田イッケでは、年男が里芋と大根を入れて雑煮を作つた。(泉沢)

年男はその家の長男がなる。一日の朝は早く起きて若水を汲み、お茶を入れて、神棚に上げる。また、三ヶ日の中、朝晩、神棚やお松に供えものをした。



(笠井)

5ヵ所をワラで縛り、
そのワラを下に下らし
真中で分けて鳥居形に
する。

(笠井)

若水桶は暮のうちに買ってシメを巻いておいた。(東大室)

三ヶ日ではなく、五カニニチは、年男は食事の用意をする。朝だけではなく、夜もそうで、他所へ出ても時間には帰つて来て正月の用意をしなければならなかつた。ある家の聲さんは、「うつかりして遅く帰つて来たところ、「急いで風呂へ入つて用意してくれ」といわれてあわてて風呂へ入つたところ、外へ出られないくらいのものだつたので慙りたといふ。年男は大変だつた。(荒子)

正月の料理は主人がする。ところが実際には女衆は全部用意しておかなければならぬので、かえつて大変である。(飯土井)

昔から、その家の大将(主人)が年男になつた。年男は三が日のあいだは炊事をしたり、神様にしんせたりした。「若水くめよ年男」といい、三が日のあいだは、年男が井戸から水を汲んできて煮たきをしたのである。だから、この間に女衆は樂ができるといった。(二之宮)

若水 初水桶を毎年決めて置き、木の手桶にシメ繩を張る。年男が井戸で若水を汲んで料理を始める。(泉沢)

若水は年男が三が日だけ、朝早く井戸から水を組んで来て、雑煮を作つて供えた。(泉沢)

年男が最初に起きて、井戸から水を汲み、神仏に灯明をあげ、湯を沸かしお茶を供える。雑煮も供える。

門松(庭に五本立てる)、瑞香、井戸神、土蔵、川神(桃木川の自分の家で普段使つている川棚)にも供える。

女しは手を出さない。(荒井)

朝風呂に入つてきよめてから若水を汲む。若水桶を新しくしてオシメをはり、水ガメ、臼、風呂場にもシメをはつておく。こうして井戸へ若水を汲みに行く。(飯土井)

朝湯 年男が朝暗いうちに風呂をたつた、各戸でたつたり、本家でたつてはいりに行つたりした。小沼家では、朝大声でどなつて風呂呼びをした「泉沢」

主人(年男)が一番さきに入つた。(東大室)

むかしは元旦から何日間かは、朝飯前に風呂をたてて、うち(本分家)で順をきめて、はいりに行つた。はじめ男衆がはいり、その後に女衆がはいりた。(二之宮)

朝湯は各自の家でたてるが、本家新宅等三軒位で交代にたてる。一日は本家、二日は新宅、三日は次の新宅とたてて、相互に湯を貰う。朝湯のあとで馳走をよばれる。セチの代りのようなものである。(箕井)

供え物 三元日は朝晩に正月棚へお灯明を上げて、食物を進せる。下げずに七日まで置く家もあるが、ふつうは四日の朝、オ棚探しをして下げる。(泉沢)

松飾りにも食物を供えて回つた。シャクシの上に食物を盛つて、お棚の下にさして置いた箸を使って、松の葉にたけて回つた。ゴキナなどの容器は使わなかつた。(泉沢)

正月中の用意は男衆が一切やり、女衆は手を出さない。期限は家によつて違う。元旦だけ、三カ日、七草まで、十五日まで、卯の日までの家がある。(荒井)

マルビ 元旦の夜と、年取りの晩にはマルビをタイテ上げた。米を五勺ぐらいたいて、一粒残らずそつくりお神の鉢(小鉢)に盛つて供えることをいう。元旦の時は萩の木で手製の箸を十一膳(二十四本)作つて、神の鉢に盛つたご飯にさして上げた。(下大屋)

一月十四日夜白米を少したいて全部盛り付け、「田植えをする」といつて、萩の箸十二本を立てて神様に供えた。(下大屋)

お神の鉢 お神の鉢は、ふきだすといつて、拭いては悪い。(二之宮)

初参り 除夜の鐘が鳴ると、泉沢神社と秋葉様へ初参りに行き、おサゴ(散米)を上げて来る。(泉沢)

元旦の朝早く、年があけると同時に、むらの人たちは、むらの神社へ朝参りに出かけた。どの家でも一番ちょうどに(一番早く)朝参りをしよとした。家族でおまいりに行つた。(二之宮)

初詣は除夜の鐘を聞いてすぐに近戸神社へ行った。(荒井)

年始回り寺と隣保班を回る。寺へはお金を包んで行くが、寺からは何も返さない。(泉沢)

年始回りは組内くらいはお互に皆んな回った。ここでは一組、三十戸から五十戸はある。かたい人は全部組を回った。順序は別にかまわぬ近所から回った。(東大室)

年始まわりには、羽織りはかまわらじばきで、朝早くから村中を元日

の午前中でまわった。百六十軒をまわるのは大変だったので寝ていてるうちに歩いたこともあるという。記憶しているのでは四組ある中の一组(自分の組うち)だけになっている。

組ごとにまわると神社に集まり、そのあとお寺に年始に行つた。(飯土井)

親せきへの年始まわりは、七草から十五日前にやるが、十八日が石山の観音さまの日なので、これと合わせて年始日としたものである。年始になって行くものは、シオガマとよばれる菓子と手ぬぐい(当時二銭五厘くらい)というのがふつうで、半紙五枚くらいというのもあった。子どもたちにはシオガマが気になるものだった。年始まわりは何事もおいと優待してくれた。(飯土井)

親戚の近いところとは、年始に行つたり来たりした。それを年始まわりとか、年始あるきといった。それぞれのむらでは、むかしから年始日といつて、年始の苦むかえる日をきめていた。(二之宮) 二之宮では一月七日(七草の日)が年始うけの日であった。(二之宮)

それぞれの家の主人はこの日、神社とお寺へ年始に行く。むらの人たちは、神社へよって「おめどおうござります」とあいさつをしあつた。

(二之宮)

家例 正月の家例はイッケごとに決まっている。先祖が苦労したので、それを子孫に守らせるのだという。(泉沢)

小沢イッケは三元日に庖丁を使うなどいうので、大晦日の晩に汁の実

を切って置く。

鴻の池の家では、十五日の小豆粥まで甘いあんこの餅が食えない。(泉沢)

吉田家では元日には等を使うなどといい、大晦日の晩に家中をよく掃いて置く。掃く時は外へ掃き出さず、内側へ三回掃き込んでから掃く。

(泉沢)

十五日前は餅がつけない家がある。(泉沢)

オメン(うどん)はゴカンニチは食うなどいわれ、元日でも、朝ソバをぶつて朝食に食う。年男は、ソバをつくるとかするぐらいであるが、中には自分でぶつた人もいるという話が残っている。(飯土井)

下増田のある家の家例では、三ヶ日をヒヤメシですます。暮のうちに小さい東で三駄のモシキをまとめて積み、火をドカドカ燃して食事することになっている。主人は、元日には川で水を浴びて身をきよめてから便所へ行ってカブ(蕪)をかじりながら泣き言をいうことになっている。

(飯土井)

飯島イッケは、ふつうはモチ家例といつてゐるが、必ずしもモチを煮て

雑煮をつくるから本当はトモ家例といえる。

三ヶ日は、年男が朝早く起きて、若水をくみ、前夜用意しておいたイモを煮て雑煮をつくり、準備ができると家族を起こす。(荒井)

三元日のうち一回はトロロ飯を食う。中気にならないためとも、身上が伸びるようにもいわれる。

三元日のうちにトロロ飯を食べると、中気にならないという。一日の晩や、四日の晩にトロロ飯をする家もある。(泉沢)

正月三が日のあいだ、それぞれの家の家例とし、二つそがきまつてゐる。(二之宮) 二之宮には、そばがれい、ぞうにがれい、赤飯がれい、いもがれいの家などがある。もちを食べられない家では、三が日にもちを食べる」と、おきがでできるといわれた。なお、三が日のあいだは、ヤナギの箸でごらそつと神様にあげた。(二之宮)

小林イツケ、細野イツケは三元日ソバ

板垣イツケは三元日コウリソバ

深沢イツケは三元日赤飯

須永イツケは元日赤飯

柴崎イツケは三元日餅

新井イツケは元日赤飯、二日コウリソバ、三日赤飯

北爪イツケは三元日ソバ、四日雑煮（下増田）

モチガレイ 三カ日餅を食べる。

ゾーニガレイ 餅の食えないゾーニガレイで、三カ日餅は食べられない。

ヒヤメシガレイ 昔貧乏して元日にメシを炊く米がないので、神仏に

もヒヤメシを進せて、食べた。今も三カ日はヒヤメシを食べる。毎晩米

を炊いて、ヒヤメシのまま食べ、あつためることはしない。「オラチの神様は食った残りを進ぜればいい。」

赤飯ガレイもある。

ウドンガレイは聞いたことがない（筑井）

イモガレイ 神仏に供えるものはイモモーク。

元旦 朝 ソバ 昼 ソバ 夜 メシ

二日 朝 雑煮 昼 メシ 夜 メシ

三日 朝 雑煮 昼以外は好みによる。

雜煮にイモモークを入れる。羽鳥家がそうである。（筑井）

ソバガレイ 三カ日にもチを食べるときもができる。

元旦 朝 ソバ 昼 ソバ 夜 メシ

二日、三日も同様で、四日の朝が雑煮、以後は何でもよい。中島家が

そうである。（筑井）

三元日の食事 松村氏はソバ、神沢氏はイモ、中沢氏はゾーニ。

三元日の間、特に朝食だけ。（東大室）

二 日

職人の仕事はじめ 大工、桶や、星根屋などが、親方の家や仲間の家に集まつてした。（丸井）（泉沢）

この日すこし仕事をはじめておけば、一年中仕事ができるといった。（二之宮）

貰い初め 初荷と書いたハタをつけて馬の背に荷をつけた小荷駄の行列が通りたりする日で、どこの店でも茶わんくらいの景品をくれるので町へ買い物に出た。オンナノクチアケといって一番乗りは女衆がよろこばれた。景品も早い者勝ちなので、良いものをもらえる店には行列ができたりした。（飯土井）

三 日

簡第 武藏國御嶽神社太占祭一月五日に例年行ない、御岳講の人々に配布される。（泉沢）

昭和四十九年（ママ）

早稲 十分 小麦

おこて 十分 そば

あは 十分 九分

きび 十分 大豆

ひえ 十分 十分

をかほ 十分 九分

じやがいも 十分 にんじん

大麦 十分 九分

さつま 十分 九分

大こん 七分 九分

ねぎ 七分 九分

なす 十分 九分

うり

阿さ
かひこ
くわ
たばこ

十分
十分
十分
十分

茶
茶

十分
十分
十分
十分

正月三カ日は田植えの始まりだからというので、早起きした。朝湯を三軒でいそにたてた。(二之宮)
正月三カ日は柳の箸を使った。布施川家はウツギの箸を使った。(小屋原)

三カ日の炊事は男衆だけでやる。
三カ日に外へ掃き出すもんじやねえ。(下大島)

三カ日の禁忌 犯生はしない。

箸ではき出しことはしない。どうしてもはき出さなくてはならない時は、三回はき込んでからはき出す。

井野家では三カ日は炊事に手を出さない。男衆がいつさいやる。三カ日は柳の箸を使う。(布施川家ではウツギの箸)(小屋原)

三が日のあいだは、三ばうき家の中へはきこむまじないをしてから、掃除をするものだといった。そうして福の神を家の中に招き入れたといふ。(二之宮)

四 日

オ棚探し 四日の朝、お寺様の「年始」が来ないうちに、正月棚の供え物を下げる。(泉沢)

オ棚探しは一月四日(大正月)、一月十七日(小正月)と二回やつた。(下大星)
オ棚探しは4日にする家が多いが、卯の日にする家もある。(筑井)

寺の年始 四日に寺から年始に来る。(泉沢)



蓮花院の寺年始の御年玉(下増田)(撮影 中村和三郎)

四日の朝雑煮を作る。お棚探しは十四日にもする。

(泉沢)

この日、お寺から年始にくるので、神棚に上げたおそなえを三日に下げてしまふ。最善寺から「最善寺ご年頭」といって朝早く、付人（ふじん）が付いて回つて来た。また、この日、お棚探しもやる。(東大室)

一日が旦那さんの年始

年始で、この日、それぞれの家の旦那は、寺へ年始に行つた。

二日はかみさんの年始といつて、寺へ大判もち三枚(もとはきびもち)一枚をもつていく。

四日に坊さんの年始。(二之宮)

この日は、坊さんの年始とむこの年始日。

嫁姫は大判もちをもつて年始に嫁の里へ行く。この日は泊らずに帰つてくる。嫁は三年間は、仲人のところへ年始に行くものだといふ。(二之宮)

神婿 四日は婿の年始で、初婿は嫁の実家へ年始に行く。婿呼ばはりをされているうちは、幾年か行く。大判餅を三つ重ねにして紙を掛け、水引で結んで持つて行く。鍋借りといつて、実家で鍋を借りて雑煮を作つて親たちに食べさせる訳だが、話だけでやつた覚えはない。(泉沢)
この日は泊ると妻がはざれるというので、絶対に泊らないで帰つて来

る。（泉沢）

初市 青物を初荷として、前橋の典輪町など四、五か所の市へ出した。

お祝いとして、前掛や手ぬぐいなどをくれた。（泉沢）

なくなり 四日はなくなりといって、新しい暦は里へ年始に行つた。

大判もちを三枚（粉のもちをまん中にしてきた）かさねてもって行つた。

この日は泊らずに帰つてくるものとされていた。（二之宮）

五 日

五カソニ。五日までを五カソニチといつて、五日で初正月を終える」とにして、六日から稼ぎに出た。（泉沢）

六 日

仕事はじめ この日仕事はじめといつて、サクタテなわやカタカケなわをなう。また、山刈りをはじめめる。また足長ゾーリや目玉ゾーリなども作りはじめめる。（東大室）

山始め 山へお供え餅一組みとおシメを持って行き、カミザの所の木におシメを三所にしぶりに結び付けた。境木のウツギなどにしぶった。お供え餅を供え、火を燃して切り餅を焼いて食べた。仕事始めとして、二時間ぐらい下刈りをしたり、落ち葉をかいたり、松の枝落としをしたりした。落ち葉は堆肥にした。（泉沢）

山仕事をして、キリーブをする者が集まつて十二講の山祝いを六日にした。（下大島）

山ハジメに今井辺りの山へ行って、餅、ゴマメ、オサゴを木に進せてから初仕事をしてくる。

下草や松葉、ボヤなどを馬なら六束、リヤカ一束一杯積んでくる。

主人でも番頭でも行ける人が行く。（箕井）

山刈りといって、山に行つて下刈りをしたり、木を一本切つたりした。山に行くときはオシメを一本、オカシラツツキを一本持つて行つて供えて

から仕事をして来た。

最近は山へ行くだけになつた。（飯土井）

この日は主人（代理としてわかいもの）が、山神様のおしめとおさこをもつて山へ行った。おしめを山の木にかざつて、おさこをあげてきた。

山はじめの行事である。（二之宮）

この日の山の神をまつた。山仕事をしていた人たちは、山へ酒をもつて行つて祝つた。（二之宮）

七 日

七草がゆ 正月棚の供え物を七草がゆの中に入れて食べた。七草のオジヤにナズナなどを入れた。（泉沢）

ナズナ・ニンジン・ゴボウ・大根・芋・ネギ・セリなど、何でもいいが、七色の物を入れてオジヤを作つた。ナズナは市場で売れた。

オツケ（汁）の中に米を入れて煮た。（泉沢）

七草にはどういうものでも七種入れればいいといわれるが、ナナクサとよばれるナズナを一本入れればそれでもいい。ふつうは、ゴボウ、ニンジン、イモ、ダイコン、コブ、モチまでも入れたりして、オカイのわけがゾウスイ（オジヤ）として食いよいようにつくる。七草は前日とつて洗つておく。七草ぞうすいをつくる前に切るが、オタナの前で、マナ

イタの上にスリギ（スリコギ）をのせ、歌をうたいながら刻む。
ななくさなずな
とうどのとりと
にほんのとりと
わたらぬうちに
ななくさたひて
すととん すととん。（飯土井）

前日に七草（ナズナ）をつけておいて水につけておく。七日の朝ナズナを「七草ナズナ、唐土の鳥と日本の鳥と、渡らぬうちに、トトン

ト」といいながらきざむ。それを米と一緒にむかしはニンジン、ゴボウもまぜておじやをつくった。四日の朝（お棚さがしのとき）にさげておいたものを入れてした。現在は七草がゆをつくってあげているが、むかしはおじやをつくってあげた。なまの米をたきこんだおじやだったのでうまかったという。

林山へだるまを買ひに行つた。なお、ナズナをつけておいた水に、ツメをつけてきれば、そのあとは、

日にかまわずツメをきつてもよいといった。（二之宮）

セリタタキ七草ガユに入れる物をまな板の上にのせて、包丁でたたいてみじん切りにした。その時の唱え言。

「ナナクサナズナトウトノ鳥が渡バナイチニ」（泉沢）

七草にはまないを、すりこぎで叩く。「とうどの鳥が渡らぬ先に」と唱え、とうどの鳥に悪い病いをしようでもらう。（二之宮）

「七草なずな唐土の鳥が渡らぬうちにストントン」と七草をマイタの上で包丁の柄でつぶす。（箕井）

爪切り 七草の日に手足の爪を切る。この日までは爪を切るなどいう。（泉沢）

七草に爪を切るという。（下大島）

八 日

年始日 一月八日を他所から来る人の年始日に決めた。バラバラに来られるところへも行けないので、一日間に決めてしまつた。（箕井）

針供養 この日、むかしはお針子があつまつて針供養をした。かけた針を豆腐にさして、神様の裏の堀へもつて行つた。（二之宮）

倉開キ 十一、ニンチハ倉ビラキ」といつて、倉の戸を開いて祝つた。

（泉沢）

十一日倉開き。仕事始め、夜ナベ始めをするが、實際は二十日正月から、わら仕事始めをする。今は繩もなわないで、農閑期は出かせぎに行

く。（泉沢）

藏を開いて、オミキ、餅、頭付きを供える。（箕井）

倉のある家では、この日、倉をあけ、びらにして祝つた。そうにあ

げた。倉のない家では、おこんなやで祝つた。

また、この日はたけにお松をもつて行ってたて、おしめをあげてき

た。これは分家がやつた。（二之宮）

ハナノ木とこの家でも庭の隅に一株くらいは植えてある二ワトコの木は、小正月のハナノ木にする。十一日にはケズリバナノ木ニワトコを

とつて来て、アマ皮をけつて軒下にほしておく。（飯土井）

サク立て オシメ、カシラツキ、オサゴをもつて田んぼへ行き、三尺

くらいの三サクきり、まんなかのサクに松の枝を立て、オシメをつけ

て供えのものをして拌んで来る。田（烟）はアキノ方にする。（飯土井）

サク始末ともサクタテハジメともい、烟に行つて三サクぐらいたサクを切つてくる。（泉沢）

烟に松を立ておシメを付け、供え餅の小さいものなどを供えて、三サク切つた。春の一番サクだから、北肩へ切れ、まちがうな」とよくいわれた。北風を防ぐため、北の方へ土を上げるよつに起つた。まねだけでも、この日についた。（下大屋）

十一日は鉢立て、長さ五十五センチ位のサクを田か煙に三本位切つて、ゴヘイを立てる。

この日、倉開きといつて、倉のある家は倉を開けて、中を整理した。

クワダテに烟でサクを三本切つて、切つたあとにオシメ、オサゴを進める。（箕井）

十三日が虚空藏様の日で、泉沢神社のお祭りなので、年始に来る。泉

沢では虚空藏様を祭るので、ウナギを食べられない。ウナギを食ふと目がつぶれるという。(泉沢)

十四日

お飾り替え 松飾りを下げるあとに、松のシントウ(先)を取つてさして置く。ニワトコを削つてかいたハナを飾つたり、アラレ餅をさした小枝を飾つたりした。(泉沢)

十四日に正月飾りを全部おろして、道祖神で燃した。(泉沢)

モノヅクリでマユ玉を木の枝にさして、ハナにした。餅のアラレもさした。飾りにするモチ菓子を売りに来た。(泉沢)

用意してあるニワトコをハナカキでけつてハナをつくる。二段バナは神棚や仏さまに上げる。ジュウニ、ジュウロクは水引きをかけて神棚に上げる。カユカキボウは四ツ割りにしたところへモチさす。(飯土井)

ニワトコの木の長い枝に、芽が十二あるもの、十五(?)あるものを取つて、半紙を巻き水引きでしばつて、小正月のお飾りとして、オモテ座敷のはりに上げておく。(泉沢)

ニワトコの木を伐つて、ハナカキを使ってハナをかいて堆肥場に立た。(泉沢)

十三日に米をひやしておき、十四にもちをついたり、まゆ玉をつくつたりした。おしめをはずし、お松をはずし、門松の枝を折つて、そのかわりに、まゆだま(あられ)をかざつた。あらねは、ナラ、ツバキ、クワの木の枝をとつてきてさした。よそのうちの高木(桑)をぬすんできて、それにまゆ玉をつけてかざると、かいこがそれるといった。また、十二と十六というのを一つづつつくり、座敷にかざつた。これはまゆ玉でなく、まるくつくなつたものである。

十四日に、むらの子どもたちが、おしめをもらいに、各家をまわつた。このとき一緒に「カンケイ」とて、お金をもらつてあるいた。(二之宮)
正月のお松飾りを外して、ハナと取り替える。ニワトコの皮を二日前

にむいて置き、ハナカキを使って削つて、三段階にハナをかいて作る。十二と十六という二種類のハナを作つて、竹を六つ割にしてハナをさして垂らしたもの。肥やし場に立てた。(下大島)

ニワトコの長い枝を取り、十二フシ・十六フシあるものを揃えて、紅白の水引きを掛けて、座敷の上の太神宮様へ供えた。(下大屋)

十四日はお飾り替え、松飾りを取り除き、お松を立てた穴の中にシントー(お松に使つた松の小部分)をさしておく。これをトアサマとも呼ぶ。

また、米でマユ玉を作りお菓子がよくあたるように柳の枝にさして部屋にかかる。(東大屋)

家によつては、山桑の木を鉢にとつてきてこの木にマユ玉飾りをし、一日たつて十六日にマイカキを済ませて、もの所にどしておいた。この山桑の木は屋敷うちに植えられて毎年使つた。(西大室)

ニワトコでハナ(二段に削る)、カユカキ棒(苗間の数だけ作り、十五日ガユをかきまわしてから、神棚に供えておく。田植の時に水口に差しておく)、ジュウニ、ジュウロク(ニワトコの木で、芽が十二および十六あるのを取つて来て、白紙で包んで水引きで結ぶ。コブ・ゴマメを一諸につける。十六、十六というのもあつた。これは蚕神で、桑の根に差しておくる。蚕のよくあつた家の桑の根を持つてくるとよくあるといふ。以前はニワトコでなく、芽が十二、十六ついている枝のある桑の根を持って来て飾つたこともある)を作つてカザリカエた。蘭玉を作る家もあるが、餅を賽の目に切つてナラやエノキの枝に差す家が多い。(丸井)

門松のシントウだけを残して、ナラの木の杭を立て、それにハナをイボを作つて縛つた。(丸井)

ニワトコの木でハナを作つた。ハナカキで上手に削つた。三段位にする。(小屋原)

小正月 一年中の農作業をやつてしまつ。
十四日が蚕。蘭玉を飾る。

十五日が田植え。十五日がユをかきまわすのが代種き。このカユを食べる時に吹くと、田植えに風が吹く。

十六日がマユカキである。(小屋原)

マルビラタク 小正月(一月十四日)、大晦日(十二月三十一日)、節分には、ご飯茶碗一ぱいだけの米の飯を鍋でたいて、そつくり白木の鉢に盛って、ニフトコの箸十二本をその上に立てて供える。(西大室)

若餅 白の下にわらを一面に敷き、一本杵でストーンストーンとつく。ついた餅は板の上で伸して、新しいムシロの上にのせて置く。

金たらいやかめの中に水を入れて、餅をひやかして置く家もある。

「カラ白つくと、地獄のエンマ様まで届く」といって、戒められた。

(下大屋)

ナラの枝に餅をさいの目に切って、数多くしたものをすつきりとして飾り、買ったお飾り菓子(色どりした菓子)を下げてきれいにした。マユ玉もいくつか付けた。これを座敷の天井に下げた。(下大屋)

マユ玉 ナラやミズクサの枝に若餅やアラレをさしたり、マユ玉をさしたりして、表座敷に飾った。色のついたお飾り菓子も売りに来たので、

買つて吊るした。飾ったマユ玉が下に落ちると、菓子がはずれるといつて、嫌がつた。

また、お供え餅の形にした餅を十二個作り、桑株にさして、吊るした。マユ玉はウルチ米を洗つて石臼でひいて粉にし、こねて桑株にさした。

(泉沢)

桑の根も枝もついているものを持ってきてマユ玉をさした。餅を賽の目に切つたもので、菓子などもさしたものもある。

十二・十六というお供えものをつけた。
ナラの木にさしたこともある。
桑の木はアキの方から一株とつてきただ。他の家のものでもかまわない。
一株に十一、他方に十六つけた。(小屋原)

十四日が養蚕のオカザリカイといい、よくモチでマイの形をつくつたり、切りモチにしたりしてナラの枝にさして祝つた。ジュウロクガマイダマで、ジュウニは切りモチをさしてつくつた。ジュウロクには、ケエコのよく当る家のものがいいというのでそんな家の桑葉から桑の株を掘つて来て、十六本の枝をつけてマイダマをさして祝つた。

マイダマには、タカラブネとかメエのオカザリカシなどをつるしたりした。これは行商が売りに来たのを買ってつるしたものである。(飯土井)

ドンドン焼キ 子供が松輪りを各戸から貰い集めて、高札場や苗マに松の小屋を作つた。山からナラの木を伐つてきて小屋を作つた所もある。子供のころ、その中に泊つて、カギ竹を下げるして煮たきをして食べた。男の子ばかりだった。道祖神は別に祭らなかつた。子供がお金をもらつたこともある。砂糖やさらしんを買って、小屋の中で汁粉を作つて食べたりした。(泉沢)

一月十四日がおかげりかえ。各組ごとに、子どもたちが、おしめとか

お松を、家ごとにもらつてあるいた。このとき「かんけい」といつて、各戸からお金ももらつた。

あつめたおしめやお松をつかつて、空地とか、苗間に小屋をつくつた。上級生が世話役であった。この小屋の中に泊りこんで、ぞうにとか、しるこをつくつて食べた。

小屋は十六日の朝もやした。(二之宮)

十五日に子どもたちはあつめたおしめなどで小屋をつくつた。子どもたちは小屋に泊りこんで、豆腐汁などつくつて食べた。小屋はむらの中で、いくつかのグループに分れてつくつた。

小屋は十六日の朝に焼いた。むらの人たちは、どんどんやきのところへもつてていつて、やいて食べた。こうすると風邪をひかないといふ。(二之宮)

ドンドン焼きを昔はドンドン焼き^ば原でやつたが、今は桃木川のへりでやる。

門松を子供達が集めてきて、三角形の家みたいにして、中で餅を焼いて食べた。その後火を付けて燃す。

中で喧嘩したり、中にいるのに後ろから火を付けたりしたので、区からさしとめされてしまった。(箕井)

道陸神はドンドン焼きのこと。一月十四日に松を集め、十六日の夕方に火をつける。

子供達が毎戸を回り、一銭ずつもらい、夜は豆腐鍋をした。

ドンドン焼きの火で、餅を焼いて食べると、出来物ができないという。

(小屋原)

ドンドン焼きは十四日、門松・オシメなどを集めて、田んぼ中に三角の家のよつなのを作つて、中で子供らが餅を食べたりした。各組で一つずつ作つた。十六日の午後に焼した。

この火で餅を焼いて食べると風邪をひかない。(小屋原)

オカザリカイでおろしたオシメは、子どもたちがまわつて正月の奉賀をもらひながら集める。子どもたちは六年生が一番大将になり一年生を下つ端として、下の者にかこを背負わせて村中をまわつたが、モチ、金をもらつてくるとき、この家の人は何人家族だからくらうという割当て式のところもあつた。もらったモチはゾウニをして食い、金は大将が分配し、余った金でもらつた人々へお返しをした。五合の酒に一升の水を入れたようなうすい酒をくれたりしたわけである。道を通る人からも「カンケイをくれ」といつて奉賀をしてもらつたが、カンケイというのがどういうことから出たことばかは誰も知らない。

集めたオシメで小屋をつくり、十四日のドンドンヤキに燃した。燃すときには「中へ入つていろ」といつてみんなを入つておき、火をつけて

から「火をつけたぞ」といつて一齊にとび出したりしてけがをしたりした。その後で大将の家でゾウニを食う。子どもどうしてつくつたゾウニの味は、忘れられない味だった。小屋をつくる場所は、村の中のネエマ(苗間)とか、きまつた場所があり、いまでもドンドンヤキといふとこ

ろがある。

最近は、オシメを集めて燃すところもあるという程度である。(飯土井)
道祖神 十四日にナラの木を切つて、小屋作りをした。上中下の各区、一つずつ作つた。小学校三年生以上の子どもが作った。山主も「道祖神子が切るものは何を切つてもよい」といつて木を切ることを許して、いた。村をまわつて色々なものを集めてきた。お金なら少ない家で一銭、多い家で六十銭くらいられた。十六日燃やした。「東大室」

十 五 日

アズキガユ カユカキ棒でかき回して、カユを作つた。(泉沢)

十五日の朝、小豆ガユをつくり、神だなの下へもつて行つてモチをさしたカユカキボウを使ってカユをかきまわすとき、「国家安全 天下泰平」というようなことばを唱える。(飯土井)

カユを食べる時に、施主が吹いて食べる。田植えに風が吹くといつて嫌う。(泉沢)

小豆ガユをたいて、萩の箸を作つて食べた。萩の箸は二十一三十センチぐらいに揃えて作つた。この小豆ガユは熱くとも吹かずに食べる。吹くと田植えに風が吹くといわれた。(下大屋)

この日の朝、小豆がゆをつくり。それをニワトコでつくつたかゆかき棒でかきまわした。あきがゆはあついとてふいて食べるものではないという。ふいて食べると、田植えのときに風が吹くといった。

神棚にしんぜておいたおひつとかおはちをあらつた水を、うちのまわりにまくと、まものが入らないとかつた。なお、これは十五日にまくところもあるし、十八日にまくところもある。

十五日には、かゆかき棒で、子どもが、柿の木とか、梅の木などのなりの木を「なるべえか、なるまいか、なつてもおちれば、ぶつたぎるぞ」といながら、たたいてあるいた。また、十五日には、嫁が里帰りをした。このときは、一晩でも二晩で

も泊つてきてよかつた。(二之宮)

カユカキ棒 ニワトコの先を四つ割にして餅を挟み、十五日の小豆がユをかき回す。カユカキ棒は苗マ(苗代)が三所あれば三本作つた。カユカキ棒は取つて置いて、春に苗マのモミブチ(モミブリ)に出る時に持つて行き、苗マの水口に立てたり、水口のクロの上に立てたりして、下へモミを三つまみ(三チヨンボ)供えて、手ばたきして拌んだ。薄いモミを鳥が食わないよう、「鳥除け」に置くもので、そのモミは苗マの水をさる芽干しまでにはきれいになくなる。(下大屋)

カユカキ棒はニワトコを伐つて、本の方を四つ割にしてサイノ目に切つた餅を挟み、十五日の粥をかきます。お飾り替えした小正月棚に供えて置く。苗代の数だけ、五本も水引でしばつて棚に上げて置き、苗代が始まると、水口にさしてくる。このカユカキ棒の中の餅を取つて食うと、ノマツリに行つてはだしてもマムシにかまれないといふ。(泉沢)

カユカキ棒でアスキガユをかん回して、苗代の水口に立てる。このカイカキ棒は頭を割つてマイ玉をさし、水引をかけて神棚に取つて置く。

十五日のカユはシロを表わすといふ。(泉沢)

ニワトコでカユカキ棒を作つた。十文字に割つて餅をはさんで、十五日ガユをかきまわした。後、水引きで結んで神棚においておく。田植の時に苗間に立てておく。(小屋原)

四つ割りにしてつくるが、一本でもよいといふけれど苗間の数だけつくるものといって三本とか五本を縁どるもののようにつくり、半紙で包んで水引きでしばつて神だなに上げ、五日ガユに使う。そのあとはとつておいて苗間の水口にさすと虫除けになるといふ。(飯土井)

十五日の朝、小豆がゆをかきまわしたかゆカキ棒を神棚にあげて

おいて、苗代をした日に、苗代の水口のところに一本たてた。またつけ木に種類を考え、かゆカキ棒にはさんで種類のちがう短冊ごとにたてた。(二之宮)

十五日粥は吹いて食つと、田植えに風が吹くといふ。庭常の木を削つ

て、蘭玉を挿し、それで粥を搔き回して占をする。粥の付き具合をみて

多く付ついた品種を薄く。ニワトコの木は、苗代の水口に挿す。(小屋原)

苗マの水口に立てたカユカキ棒に挿んだ餅を食べるとなれば蛇除けになる。昔ははだして、苗マの水を見に行つたので、マムシにかまれないように、よくつまんで食べた。(下大屋)

アズキガユをドビンの中に入れて、ヘビが入らないようによつて水口にまいだ。

また、ケーカキボーを、病気がでないと、水口に立てた。(東大室)

アズキガユは吹いて食べない。吹くと田植に風が吹く。

アズキガユをしたナベを洗つたりした残り汁を家のまわりに切れ目なしにまく。糞が堆肥小屋のまわりにもまく。切れ目があると、そこから

疫病が入るといふ。

成り木責めはしない。(筑井)

十五日ガユを作つたオハチを洗つた水を家のまわりにまくと、ネズミ、ヘビ、モグラなどの虫が入らない。

同じ水を成り木にかけると成り木がよくなる。(小屋原)

成り木責め 正月十五日行なう。成り木の木に、ナタで傷をつけ、木の傷口にぬりつけてまる。(下増田)

「成るか成らぬか」。成つても落ちると、「ツタ切るぞ」と大人が言う。

子供が木の向う側で「成り申す、成り申す」と答える。こうして、粥を

木の傷口にぬりつけてまる。(下増田)

成木責めは十六日、柿の木に「なるかならぬか、ならねとなたでぶつた切るぞ」といって、なたでさすをつけ、カユカキボーで、アズキガユをついた。(東大室)

メエガマのふかした湯は「ふかしたもののは使うものではない」といわれていたので成り木責めといふようないことはしない。柿や栗の木の根元にくれるとは聞いたことがある程度のことである。(飯土井)

アワボ・ヒエボ 父と母が座布団で男根・女陰の形を作つて「アワ

ボ・ヒエボ・ガツチャガチャ」と唱えながら、おっかけっこをしたといふ話を聞いたことがある。(筑井)

この日嫁に嫁の里へ年始に行く。この日は泊って来てもよかつた。

(二之宮)

十八日

渡り粥

十五日の粥を少し残して置き、朝暖めて「ワタリゲエ」にして食べる。その釜の洗い水を家の回りにまいた。わけは不明。(泉沢)

十五日粥の釜を洗った水を家の回りにまくと、魔物が入らない。(下大室)

正月十八日朝、釜を洗った水を家の回りにまくと、虫除けになる。(春ニ野)

ニ野(出)時ニ虫ニサセナヨウニ」とまく。(泉沢)

まゆかき・石山觀音様 この日、朝の「ちそうをしんせてから、おかざり(まゆ玉)を全部とる。「今日はまゆかきだぜ、わすれんなないな」などと、主人は家族に注意をしたりした。おかざり(まゆ玉)をとることを、まゆかきといつている。

また、この日は石山(佐波郡赤堀村)の觀音様の縁日である。馬を石山までつれて行つて、梵鐘の下でおさえていて、鐘をならした。(二之宮) 馬頭觀世音 一月十八日には馬の無病息災を祈つて、家々に東大室の馬頭觀世音へおまいりに出かけた。馬に乗つていって、堂の跨口の下までくるとカネをむりやり鳴らしたものだ。近くに駄馬を売る店があり、それを買って、あげたり、お札を受けてきて馬屋の入口にはりつけておいた。(下大屋)

石山の觀音様 一月十八日に馬に乗つて行つて割れ鐘の下をくぐらせた。馬はおどりいてあがれるので十人ぐらいの大人がやつともりをして、この下をくぐらせた。けがをする人はなかつた。お札を受けて来て馬屋の柱に貼つておいた。馬やの左右の柱を男柱といい、前にとりははず棒を、ません棒といった。熊谷の上岡の觀音様にもお参りする人が多かつた。

た。馬好きな人、けい馬をする人、馬喰など、特に運送屋のとみやんはよく行つた。(今井)

石山の觀音さまのお祭りで、馬におかざりをつけて参拝を行つた。近在の馬もやつて来た。(飯土井)

石山の觀音様に馬を連れて行つてワニ口の下に入れて、大きなワニ口をカンカンならしで、三、四十人であばれる馬をおつぶした。馬を大きな音で「りきせるとその後多少のことでは驚かなくなる。(小屋原) 昔は毎戸馬を飼っていたので赤堀の石山の觀音様に馬を連れていて、釣鐘の下をくぐらせた。馬の度胸だめしで、いやがるのをおさえずりこみ、釣鐘の下へ行くと、鐘を叩いた。(二之宮)

マイカキ 「二十日のカゼをあてると病人が出る」というので十八日にマイカキ(マイダマを外す)をする。ミ(糞)の上にかくというので糞を使い、ゴザの上におく。(飯土井)

マユカキといつて十四日にかさつたマユダマなどを、とりかたずける。(東大室)

十八日のカゼを食わせないというのでマイダマは十七日にはずす。マイカキという。(飯土井)

木の枝から外したマイダマは、からからにしておいて後で油で揚げ、砂糖をくるむようにかけて食べると、よくもえていてうまかった。(飯土井)

十八日ガユ(オタナサゲ) 十五日ガユの残りをとつておき、十八日につつため食べた後、食べ残りや洗い水を家のまわりにまく。魔物を除けたり、長虫がわからないようにといふのでよくわけである。(飯土井)

二十一日

二十日正月 正月のお棚を十八日から二十日の間にはずす。コブ(昆布)をおろしてコブ巻にして、エビス様に進ぜる。(泉沢)

二十日正月にはワラ仕事始めで、肩掛け繩を編んだり、ハエオをなつ

た。これは三人で組み、繩をはしに吊るしてよじって丈夫な繩を作った。

エオ繩は馬のシログラに引っかけて、馬糞を引かせる時に用いた。結び玉をかぎに掛けるので、際から切れやすかったので、初め長くして置き、切れたと次第に縮めた。(泉沢)

仕事始めにサク立テ繩を一ボウか二ボウない、肩掛け繩一本を作り、下大黒柱にしばり付けて、カユカキ棒をさして祝った。

朝早く起きて、わらを白のヘッタ(底)の上でたたいて柔かくして、十時ごろにはわら細工を作りきる。馬のシログラに掛けるシロ繩なども

作った。(下大室)

二十四日正月にムシロの一枚も織る。ふつうのムシロは織るだけで、一日三枚ぐらいだが、耳をかくとも手間がかかる。泉沢にはムシロ織りを商売にした人もいる。(下大室)

ネコはネコバタシに掛けて厚く編むので一枚かくのに三日ぐらいかかる。厚くて土息が上らないから、モミが三倍もしくひる。(下大室)

二十日正月には、なわはじめといつて、田植道具や馬の道具をつくった。田かきをするとき、馬につけるハヤオやこやしをつむかたけのツナなどをつくった。ハヤオなえは、ふたりで「おいきたやいきた」とやる。できたハヤオは、こえの屋根の下につるつておいて、古いのがだめになつたら、新しいのをすぐ使えるようにした。(荒口)

この日は米のめしをして食べた。かたかけなわ(こやしのつみざるに付けるもの)や、はやおなどをつくった。

正月のえびす講は商人のほううがかたくまつた。商人は朝えびす、農家は夜やつた。糞とか熊手を買ってきてまつた。(二之宮)

正月さまのおたなをとる日。この日にすべて片づける。(飯井)

二十一日正月にオタナをはずした。

また、この日に馬にマンガをひかせる時に使うハヤオという繩をなつた。三人である。オトコ柱(ウマヤの近くにある柱で、大黒柱の次に太い柱)にしばっておいた。(荒井)

村總会 この日は村總会をして村役をきめる。(飯井)

初エビス エビス・大黒の木像が入った木の宮が大槻の家にあって、それを座敷の机の上に飾り、掛け軸をかける。お膳に白米飯とケンチヨン汁、サンマ、サツマイモのてんぶら、コブ巻などをせて進ぜる。果物や生野菜なども、いっぱい供える。

ますに米を入れて供えたり、身上ありつけただけのお金を供えたり、財布の口を開いて供えたりして、財産がふえるように願つ。昔は熊手を買つて来て、財産をかきこむように供えた。(泉沢)

正月二十日のおいべす講のときは、魚、おかしらつき、人参、ごぼうを供の上支は、机などの上に供えて祭た。

秋のおいべす講には、新しい俵の上にお宮を飾つて祭つた。(荒口)

エビス講には恵比寿、大黒を神棚から座敷に下ろして、二の膳付きの頭付き(サンマが多い)を供える。

一斗枡の中に家中の財布を入れ、その上に棚を作つて安置する。棚を作らずに机にするが多い。

恵比寿が貧乏で大黒は大尽。大黒が御馳走をしてやるというので恵比寿を招待して「エビス、コウヤ」といったので「エビスコウ」と言う。

膳は未婚者には食べさせない。(荒井)

ウドンブチの時に使うメンバ板にエビス・大黒を神棚からおろしてまつる。お頭つきのついた二膳を供え、一升枡に金を入れて「稼いで下さい」と供える。

下げたものは子供・成人にならない人には食べさせない。エビス・大黒は両方後家だから、食べる緑遠くなる。(小屋原)

桐生のえびす講にはよく行つたものだ。最近は伊勢崎に講が立つてい

るからそこへ行き、ミジンコのオミゴクをもらつたもの。

夜、カケヅを出したり、エビス・大黒を出してまつり、カシラツキ、酒を上げる。カネエビスといってサツ(紙幣)や銀貨を上げる。この日のエビスはコクエビスといって、俵の上にのせてまつる。供えたものは

ヒトにならない者（未婚の者）にはくれるなという。（飯土井）

ゑびす様は守りをしているものを喜ばすだけだといって、ゑびす大黒をてんぶらあげた話がある。（富田）

二十一四日

天神講 「十四日の晩、宿を決めて子供が泊まり、半紙に書き初めをして「奉納天神天満宮」と書いた。それを翌朝、起き抜けに神社の裏の天神様に掛けてきた。戦前までしていった。（泉沢）

子どもたちの有志が寄つてやる。米を三合くらいずつ集め、五目飯をつくつて食べるが、三杯以下ということではなく、よく食べた。紙に「奉納天神宮」と書き、くるんで上げたが、ハタガミ様といつて機のシメエ（オリギリ）をハタにしばりつけて供えた。子どもたちはふとんを持ちこんで泊つてやった。

いまは三月二十四日にしている。（飯土井）

一二四日の晩に子供が宿に集まつて泊りこんだ。布団、米、アブラゲなどを持ち寄つた。字を書いて天神様に賽り物を供えた。翌朝、「納め奉り天満宮」と書いて天神様に納めた。

十二月二十四日にもやつた。（小屋原）

宿をきめて子どもたちが泊りこみでやつた。子ども同士ではなしあつて、宿でこちそをつづつてあそんだ。「らそうは五目飯」また、硯をもらよせて、「奉納天神宮」などと半紙に書いて、天神様へもつていつた。（二之宮）

二十八日

しまい正月 別に何もしないで、遊んだだけだった。（泉沢）

この日のことをシマイ正月というが特別の行事はなく、仕事だけは休む。（飯土井）

この日は、シマイ正月といって、米のめしを食べて、遊ぶ日だった。

（東大室）

米のめしをつくつて祝つた。（二之宮）

シメー正月は仕事を休んだ位で別に変つたことはしない。餅をつく家もある。（小屋原）

二月

次郎の一日 遊ぶだけだった。（泉沢）

次郎のついたちは餅をついて神棚に供える。（荒井）

次郎の朝日は遊び日である。

赤飯の中に栗を入れたアワゴワメシを作つた。（小屋原）

次郎の朝日黄金で祝つ。というのでアワモチをついた。住み込みでつとめている人はひまが出てお客様に行けた。（飯土井）

「次郎のついたちこがねで祝う」といつた。（二之宮）

デガワリ 二月一日のこと、この日に役員の交代（ヒキツギ）の帳箱渡しがあつた。

使用者の入れ代りもこの日にすることにきまつていた。

この日は「二郎の朝日、黄金で祝う」といつてアワゴワメシをふかした。（荒井）

二月初旬に番頭が実家に帰つて、一週間か十日ほど休んで来る。ケイヤクは別にしなかつた。

奉公人は年期証文を入れて、野良じゅばんからたびまで、いつさい仕着せで年間三十円くらいだつた。子守りなどもこの時に年期をきり替えた。（泉沢）

奉公人の出替りで番頭を実家に帰す。一晩か二晩泊つてくる。（小屋原）

奉公している人たちの出がわりの日だつた。（飯土井）

節分（三日）

年取り 豆を炒るとき「豆ガラ、ナスガラ……借金なす……」とかい
いながら炊つた。

豆まきは、年男がした。アキの方に向ってなげた。この時「馬は年を
取るものでない」といつて、馬小屋にはまなかつた。また、井戸の中
へ豆を家族の年の数だけ投げ入れた。またそれではあまり数が多くなる
ので端数だけ投げ込む。

豆をとつておいて、初雷の時に食べた。(東大室)

豆まき 節分には豆ガラで豆を炒つて、豆まきをする。年令の数だけ
豆を食べ、福茶を飲む。

とつておいて、初雷の時に食べる。厄年の人は一月中に節分をしてし
まう。三十日に厄落しの餅を配る。(筑井)

豆 節分の豆は茶袋に入れて、いろいろのカギ竹に下げておき、初雷が
鳴った時に庭へ投げる。(泉沢)

節分の豆は、豆ガラを燃して、豆ガラでホウロクの中をかきまわしながら
がら炒つて、一升桶に入れて神だなに進せておく。

年男が風呂に入つて出てから豆まきをするが、夕飯前にとる家と夕飯
後による家との二通りあるが、先ず太神宮に向つて、「福は内福は内鬼は
外(福は内を三回唱える例もある)」となつてから、床の間、オカマ様、
先祖様など家の神にやつてから外の神となる。外では稻荷様から便所の
神とまり、神社まで行つて来るところ。

家へ帰ると湯をわかし、豆のお茶を神に供えてから福茶を飲む。
家族の年の数をまとめ、その数だけの豆を井戸の神に供えた。

豆まきをした後の豆は、初雷のときに「桑原、桑原」といながら食
う。(飯土井)

節分に豆まきの豆を入れた耕の中に手を入れて、豆をかきまわすと手
のケガをしない。又、田植えの時にもケガをしない。(小屋原)

豆うらない ヌクバ(熱灰)を平らにならなしたところへ大豆を十
二粒埋めて、十能でおさえて、その燃えぐあいのかげでその年の豊凶を
う。(飯土井)

うらなつた。(飯土井)

ヤカガシヒイラギの二またの枝に、イワシの頭をさして、豆をいり
ながら黒く焼きこがす。この時、マメがらやナスがらを燃す。これは「借
金ナスガラ」という縁起である。

カカガシを焼く時、まず四穀(稻・麦・粟・稗)の虫を焼く呪い言葉
を一言唱えながら、ビヨツビヨツと、ツバキをかける。唱え言。

「イネノ害虫ノ虫ノロヲ焼きマス」

「ナス・タケノ虫ノロヲ焼きマス」

「泣キ虫ノロヲ焼ク」

ヤカガシは屋根裏にさして置く。玄間にさす家もあり、台所のいろり
の上の屋根下にさして置く家もある。(泉沢)

栗の木のサンマタにイワシの頭をさして「大豆、小豆、イネノムシ、
ナス、キユウリ、ユウカオ……四十二イロの虫を焼く」と唱えながらツ

バキを吐きかけながら裏表を焼く。黒くなるほどよいといい、「節分や、
イワシに着せる、虫の罪」といわれたりするが焼いたものはお勝手の屋
根下にさす。しまいにはオカボを搔くときのコヤシの中にくるみこんだ。

(飯土井) ヤイガカシのイワシを焼く時「四十八色ノコーサクノ虫ノロヲ焼
ク……」とかいて、何回となく焼いた。そして、便所へ持っていく。
また、トボロの上にもかざつた。

穂に虫がわくと、ヤイガカシを水口に持つて行って、とかし込んだ。
(東大室) 年とりの日に、なすの木と豆の木をたいて、豆をいる。まめに働いて、

借金をなす（返す）というわけ。いる時に、「ヨロズノ虫ノロヲ焼ク」「三

十六、耕作ノ虫ヲ焼ク」と、となる。（二之宮）

ヤカザシはいわしを一匹、さんまたの格に差して、トボロに差してお

く。

それを焼く時に「ナス、タカホノ虫ノロ焼キ四十一色ノ耕作ノ虫の口

焼キ」などとつばをかけながら焼く。「チヤンノ泣キ虫ノロ焼キ」など

とも言つた。（箕井）

ヤカガシのイワシの頭を焼きながら「四十二色ノ耕作の虫ヲ焼ク」と

か唱える。「やかましいババアの口をやく」とやつて怒られた。

このイワシを神棚や、屋根裏に差してお。（小屋原）

四 日

ナベカリ 新しい嫁はこの日に実家へ年始に行く。この日は夫婦そ

ろつて行かねばならず、米やウドン、酒を持って行き、近所（くみあい）

の者を招いてお祝いをした。この日に泊ると蚕がはされるといつて泊れ

なかつた。（飯土井）

初午 正月よりは小さいマイダマを「十三個こしらえて、一升樽に入れ

てケエコガミ（キヌガサナマ）に上げる。マイダマは、オカザリケエのナ

ラの木を燃して初午のモシキにした。

こわめしをつくり、重箱で山盛りにして神さまに供える。稻荷さまに

も上げる。初午にはスマッカリの料理もつくるが、これに使う大根は、

秋に大根とりをした時の「す」を大根ゴセエ（大根おろし）にして魚をう

んど入れてつくる。（飯土井）

マイ玉 マイ玉を作つて、一升ますに笹葉を敷いた中へ山かけに

盛つて、神棚へ上げて蚕神に供えた。オシラ様という名は聞くが蚕神で

はないし、意味は不明。（下大屋）

稻荷祭り 初午には四社稻荷といって、四区ごとに稻荷様を祭る。背

丈ぐらいあるわら宮が塚の上にあって、境内に灯籠がついた。

家々では餅をつき、マユ玉を作つて稻荷様へ持つて行って供えた。稻

笠様も祭つた。

「初午に仕事をすると火にたたる」といい、かせぐと火事になるぞと

いうので、遊ばせた。

初午の日が三陽亡や丙午に当ると延期した。屋敷稻荷は特別に祭らな

い。（泉沢）

初午 この日は仕事をするものではない、仕事をすると火にたつと

いった。まゆだまをつくつて、「升ます（中に半紙をしいた）」に山もり

にして、かいこ神様（床の間の机の上）にしんぜた。かいこの種をもつ

てきておいて、机の上にかざつておいた。その日は、一日仕事をしないでゆつ

（ちそうはうち）ことにした。もちなどのまるめもんをした。かいこが

あたるようなどうことであった。その日は、一日仕事をしないでゆつ

（くりあそんだ）。（二之宮）

初午に餅をつき、稻荷様に五色の旗を作つて上げた。また「正一位稻

荷大明神」と習字を書いて上げた。

初午が早い年は「火が早い」といって火に氣をつけた。（東大室）

マユタマを作り、靈影山の掛軸を下げて、一升樽に高盛りに入れて供

えた。

春駒が流しに来たこともある。（小屋原）

丁田福 每年初午にマユ玉を作つて供える。泉沢神社の西の鳥居が

十日前には初午をしない、火早いからと。い。（泉沢）

犬が飼えない 稲荷には稻荷が四社あるから、犬を飼つてはいけない。

鶴笠様 産泰神社境内の拝見所（神樂を見るため床の高い建物があり、

講中座ともいう）の一部に祭りこんである。以前、お仮り屋を建てて祭

り火事をかぶつたこともある。個人が適宜に信仰して拝んだ。（下大屋）

オシラ待チ 知らない。（泉沢）

八 日

コト八日 二月八日と十二月八日に、鎌を竿の先につけ、みかいの中
に、ひいらぎを入れて立てる。後藤家では、この日、厄病神か何かお迎
えして、夜は強飯、朝は御ぜんを炊き込んだわらにいけて、三本辻に
送り出す。最近までやつた。

鬼が来る。赤飯でなくてもいいといって、栗強飯を作る。（二之宮）

むかしから「水ももらさぬコト八日」といわれている。

この日、竹ざおの先に鎌をとりつけ、めかいをしばりつけて、その中
にヒイラギの小枝を入れて、庭先に立てる。この中にせにがたまるといつ
た。この日は仕事を休んだ。（二之宮）

この日にヨナベをすると医者の世話になると言つて、仕事をしない。

鬼が来るからと鎌をトボロに差した。又、庭に竿の先にメカゴを立て、
その中にも鎌を入れた。メカゴを立てておくと金がふるとも言つた。翌
朝錢を大人がまいおいて錢がふったから早く起きてとつてこいと子供に
言つた。

赤飯を炊いた。ネギの皮をもいた。臭いから鬼が入らない。（小屋原）

二月がオコトハジメ、十二月がオコトシメエ。鎌をトボロに差し、メ
カゴを庭に立てその中にも鎌を入れておく。

翌朝メカゴの下に金が落ちている。魔除けである。（下大島）

ヒイラギ（柊）をメカゴの中に入れ竹ざおの先に立てる。

家の出入口にもヒイラギの小枝をたてる。魔除けという。だからど
の家でもヒイラギを植えこみの中に植える。（坂土井）

針供養（二月八日） サイホウツ子がやつて、その日オハリを休む。

（坂土井） 鈎を豆腐にさして供養した。（泉沢）

おはりをすれば、二月八日に寺で針供養をした。自分で使った針をて

んでに一人で一本ずつもって、おみあかしをあげて拝んだ。その晩は、
かつおぶしをして食うとか、すしをしてあげて食うとかして、寺に一晩
泊つた。（富田）

十 五 日

ねはん 祀迦のねはんで二月十五日は遊び日。（泉沢）

天道念仏 祀迦の涅槃の日のまつりでやる。安養院に七十才以上位
の村の元老や希望者が集まつてやる。七十六才の人が記憶してからも昔
から毎年やっており、今年もやつた。

涅槃像の掛軸を本堂に下げて、早朝六時位に集まつてやる。準備は十
四日の午後にしておく。以前は十四日から泊つてやつた。

太陽の出る前から没むまで終日念仏を唱える。鉦二つと大太鼓一つを
使い、三人ずつ交代しながら叩く。

太陽が没むると元老三人が念仏を唱えて終了になる。この後一杯御馳走
になつて帰る。

なお、この日に村の入口六カ所に八丁ジメを張る。（荒井）

天道念仏は大正時代まで今はやつていない。天台宗の薬師山泉藏寺
でやつた。

本堂で曼荼羅を下げ縁香を立てて、日の出前から日没まで念仏を唱え
た。年寄りや子供が二十人位はいた。

祇迦の涅槃の日なのでやつた。（小屋原）

天道念仏は、むかしは組ごとにやつていたようであるが、現在は三組
程度しかない。

時期は、春秋の彼岸の中日のころ。天道様がでてからひっこむまで、
一日中やつていた。西組の場合は、薬師様によつておこなうが、宮本と
宮後は、宿はまわり番で、交代につとめている。宮本の場合には、全戸
一人づつ出た。

天道様にむかつて、かねをたたきながら、念仏を申した。「ナンマハイ

「ダイハンボレ」とくりかえした。線香に火をつけて、その一本が終わるまで一人の受持であった。一本の線香がもえきると交代した。四人で一組になつていて、かねをたくもの、太鼓をたくもの、念仏を唱えるものと分担していた。

版本があつて、お札を刷つてくばつてある。珠数のある組では、珠数をまわしながら、各戸をまわつた。珠数をまわせば、組の中に伝染病が入つてこないといつた。また、まわしている珠数の中に入れば、病氣にならないといつた。珠数の珠をけずつてのめば、病氣がおるともいつた。(二之宮)



(西大室)
(金子子雄撮影)

版本があつて、お札を刷つてくばつてある。珠数のある組では、珠数をまわしながら、各戸をまわつた。珠数をまわせば、組の中に伝染病が入つてこないといつた。また、まわしている珠数の中に入れば、病氣にならないといつた。珠数の珠をけずつてのめば、病氣がおるともいつた。(二之宮)

被岸の中

日に行う。

当番の家が

宿になる。

夜の明けな

いうち餅

をつきおそ

なえを作

る。このお

そなえは、

後で小さく

切つてみんなして分ける。座敷内には竹を四本立てて、地まつりの時によくな齊場を作る。寄せ太鼓を打つてみんなを集める。終ると、ポンゼンを立てて二子様まで送る。最近では二子様まで行かず湯清寺の境内の一隅にポンゼンを納めて終りとなる。(西大宮)

ヒシに二組ぐらいいつくる。(板土井)

ヒナ祭り もとは家々でヒナ壇を作つて、ヒナ人形を飾つたが、最近は飾らなくなつた。(二月二十八日に飾り付け、三月八日の八日節供にしま

す。(泉沢)

お節供のひなさまは「ナノカガエリはしたくないものだ」というので、

二月二十八日ころかざり、六日目、八日目にしまつ。仏の七日の数を苦にするのかも知れないという。(板土井)

ひなさまは店のひな市で買つたり伊勢崎まで買つた。宿のひな

市は二月二十日にたつた。主として伊勢崎へ買つた。ひなをか

ざるのは、二月二十八日。しまつの三月八日以降、あまりおそくまで

かさつておくものではないといつた。

二日の晩にもちをついた。

三日にはすしをつくつた。

八日ごろ、おひなさまをしまうときもしをつくつて祝つた。

あたらしい嫁娘は、ひしもちをもつて里へお客様を行つた。これが里方

への年賀であった。(二之宮)

ヒナ人形はもとは坐りヒナが多く、大形だった。内裏、布袋、神武天皇、神功皇后、金太郎などがあり、高砂のじい・ばあなどの立ちヒナも

あつた。焼き物のヒナ人形はなかつた。(泉沢)

供え物はヒシ餅やノリ巻しを供える。ヒシ餅は、モチ草餅と白い餅

を交互に重ねた。

以前はヒシ餅供くらいしか、ノリ巻しをつけなかつた。(泉沢)

嫁が里へお客様に行くのに、ヒシ餅を二枚重ねにして持参した。親元と、

仲人の所へ持つて行つた。(泉沢)

嫁の内裏さま 嫁いで初節句の娘には、実家から「ヨメゴの内裏さま

ん」というので、内裏さまが届けられる。これに対して特に「おかげし」

はないが、嫁は、おひなさまに上げたヒシ(もち)と同じくらいの大き

もちつき(一日)紅白、草もちをつくり、ひなさまに供えるものだけ

「セイギリ三年」という程度である。(飯土井)

初節供 嫁に行つて初めての節供には、子供が生まれても生まれなくとも実家から内裏様をやる。

女の子が生まれれば新威、兄弟、前に育った家がお難様を届ける。お難様をしまう時に古いお難様を広瀬川に流す。使いものにならなくなつたお難様をぶちやることである。(小屋原)

子どもが生まれて初めての節句には、もとは子ども全部に母親の実家、近親者、懸念な人から届けられた。そのころはオカエシ無しだった。最近は長男、長女の場合はだけだが、いよいよ派手になつて来ている。オカエシもするようになり、アンモチを揚いで届けるようになつた。(飯土井) ヒナ送り 古いヒナ人形は川へ流した。煙へ送り出すことはなかつた。(泉沢)

春駒 お筋句のころ、馬の首に鉛をつけ、チャンカチャンカやりながらやつて来だ。もちか米または金など、気のきいたものをもらつて戸毎にまわつた。(飯土井)

梅若(十五日) モノ日だが意味は不明。草餅をついて、オンカ晴レテ(支障なく)遊べる日だつた。小使の錢ももらえた。(泉沢)

春彼岸 くず米で作つたんだんごと、水を持って墓参りに行く。念佛は別にしない。(泉沢)

ボタ餅を作つて食べた。ふだん、身体がカレ帝いるので、それを楽しみに働いた。

(秋) 彼岸から(春) 彼岸まで、夜ナベ仕事をして、一日二十六ボウも繩をなつたが、春彼岸からは夜ナベをしない。昔は小学校三年生の時から繩ないをした。(泉沢)

「彼岸にはたもち」といつて、ハシリクチ(彼岸の入り)と中日くらにはばたもちをつくつた。新しい仏の幕參をした。若い衆は「中日ばたもち食いたくねえ、ならば半日遊びたい」といつたものである。(飯土井)

「くされ彼岸が七日ある」といつて、彼岸は一週間ある。彼岸は仏の供養をする行事である。この間のこちそそうははたもち、彼岸のいり口、

中日、はしり口の日につくる。(ふつうは二日間つくる程度) 中日の日には、親類などのものがほかまいりに来る。とくに、はじめての彼岸には身内のものが墓参りに来る。

彼岸のうちには、病氣見舞とか練談・病見舞はさけるものという。(二之宮)

念佛 彼岸の中日だけで、一日中、陽が上るから陽が沈むまで、カネを叩いて「ナンマイダ、ナンマイダ」とやる。カネは大きいものと、小さいものとがあつた。(荒子)

梅若(十五日) この日はかわりもんをして、仕事は休んだ。(二之宮) 春祭り 彼岸の二十四日が春祭りで、「彼岸と祭典典である」といわれた。余興は毎年にその都度きめて明治時代には芝居をやつた。(飯土井) 天道念仏 春の社日に行つた。通りに宿をさめ、そこで当番が世話をしで餅をつき、お供えを一重ねつくり、これを盆棚をつくつてこれに載せる。ここに村人が次々に来て鐘と太鼓を叩いて行く。日の出から日の入りまで鐘と太鼓の音を絶やさない。終ると、当番の者が、お供えを六〇戸分に切つて組内に配る。(西大室山際組)

二之宮の上にて彼岸のうちにしている。(二之宮)

社日講 社日は仕事を休む日で、自分の家の畠の土っぽじりをしてはいけない。この日は世話人が中心になつて、村總出で道普請などをする。

その後、村の会堂に集まつて、酒肴でお祝いをした。(上増田) 社日には土を動かしてはならない。土を動かすとよいことがない。

夜、組の大人が寄つて、アンコロ餅をついて飲み食いした。

社日満無尽、社日貯金をして積み立て、くじに勝つた人が取つて、自由に使つた。(泉沢)

社日参り、社日に石の鳥居を七つぐると、中気にならない。(下大屋) 百姓の神様をまつる日。この日、土をうこかしてはわるいという。(二之宮)

四月

泉沢神社春祭（一日）シシ回しは以前は九月一日だったが、暁秋蟹の都合で、大正末期から日を替えて春するようになった。

一週間ぐらい稽古をした。兵隊検査の年の人人がシン頭をかぶり、村人や子どもが後に続いて村中を回った。登りジンで、村の下から上方へ、百一・三十軒の家々を回った。家では、表座敷に家人人が坐つて待つ。シンはその家の屋根と梯の下と中心を見てから、耳を引つ付けて飛んで家の西に入口大神宮から始めて家中をバクバクとかみ、主人から家族をかじるまねをする。小さい子どもは恐がつてみんな泣いた。悪魔払いの所作である。その間に、付いてきた他の者が庭で伊勢音頭やクドキをした。

家ではおサゴ（米）を机に一杯入れて出した。入団したての若者が米つ担ぎの役をして、米を集め、一升机に山かけ出す家は三分の一ぐらいだから、そこで伊勢音頭をした。（山かけでないとしない）米は2俵から2俵半も集まつた。最後に寺に寄つて、その米で五目飯を作り握り飯にして、村の人々に振舞つた。約一俵分くらいは食べてしまつたが、最近は一俵も残るようになつた。おサゴの代りにお金でもよかつた。

シシ回りは朝六時ごろ始めて、夕方までかかつた。シシ回しには歌もあり、五人ほどで「イザヤ獅子ヲ参ラセル……」などと歌つた。家の前では「四方開め」をした。太鼓は一人で担いで、一人がたたいた。「ドロンコドンドン」と鳴らして行く。鼓も使つた。（泉沢）

地芝居 夜、泉沢神社の境内に舞台を掛けて、芝居をした。人形芝居をした人が義太夫を教えたのが始まりで、簡単な踊りや野郎万才をした。

（人形芝居は見たことがないが、人形の頭が十二体あり、その八体に「天狗久」と焼き判があり、阿波屋の角さんが天狗久と親友だったので、明治九年から二十何年ごろ持つて来たものという。）（泉沢）

お祇園祭（四月八日）寺ではツバキの花でお堂を飾り、その中のお

紹興様の像に甘茶をかける。甘茶を分けてくれる。（泉沢）

四月八日はオシャカ様の生れた日である。お寺へ行って甘茶を誕生日にかけて御馳走になる。甘茶はアジサイの葉に似た甘茶の木の葉を乾したもので煮つめる。

藤の枝を軒先に差した。又、藤の葉の形の餅も作った。（小屋原）

この日は遊ぶことは遊んだが、村の中の多くが仏（教）でないので寺に行くことはなかつた。（飯土井）

お祇園様の誕生日、この日は、年寄りとか子どもたちが、お寺人行つて、甘茶をごらうになつた。（二之宮）

大室寺春祭（十日）

春祭り（十五日）赤城神社の例大祭、宮元の社世話の家から神社までおねりがする。そのあとおまつりがはじまる。この日、代々神樂を奉納する。（二之宮）

三峰講 飯土井北組がやつており、記録はないが古くからのもので、四月のうち十五日前後にお参りに行く。火難・盜難除けのものである。

城峰講 飯土井下組で、四月十七日にきまつている。火難・盜難除け

の信仰である。（飯土井）

櫻名講 原、北、下ともに講があり、四月中に、霜のない時に代参に行く。旅費は個人負担で、他はみんなで出す。霜除けの信仰で、伊香保泊りが多い。（飯土井）

蘆泰神社春祭（十八日）祭日、昔は一日おきに一か月も神樂を続けて、春祭りをしたといい、明治時代にも一週間もお祭りをした。それ以後、四月十五日、十九日、二十二日などと変り、十八日に落ちていた。

ホウソウ見せ 子供の種痘を見せる日を八月日に決めて、子供をおぶつた嫁がおかけた足で、産婆神様へお参りした。親類の人も友だちを連れて來たので非常に賑わった。(下大屋)

産婆講 講の人は神主の家の前に泊ったが、とても暖やかで横になる席もなく、とても寝るわけにいかなかつた。家がらのよい子で学校を卒業してすぐの子供が、一人ずつ給仕子に頼まれて出た。料理番も四、五人、お札売りも臨時に頼まれて出た。

神社では夜神樂、朝神樂を交代で演じて、夜通し見せて、あけ方になると「朝だよー」と満人々を立たせた。

大正十年ころ、一週間のさい錢が五十何円も上がつたので、産婆の者はその金を借りても、返さなくもよかつたといわれる。(下大屋)
新嫁 春祭には荒砥村じゅうの新しい娘が、花嫁の支度をして、姑が連れてお参りに来た。荒砥村から嫁に出た者も里帰りに来れたので、参詣の女たちで賑わつた。初婚は「ハナ入レロヤ」といわれ、お祝い金を包んで神社へハナ入レをした。(下大屋)
神楽 家に残る跡取り息子の希望者が、学校を卒業すると言つて演じた。(下大屋)

五 月

八十八夜(二日) 八十八夜のわかれ霜といい、大室の五社稻荷に霜除けのためお参りした。餅をついて祝つた。

また、佐渡郡芝の稻倉神社に養蚕具の市がたつた。(泉沢)
八十八夜に五社稻荷へお参りにいく時、網笠様にもお参りするが、網笠様だけを特に祭ることはない。(下大屋)

樓名神社のほか、大室の五社稻荷、伊勢崎市柴町の稻倉様、佐渡郡東

村のヤンダンジ稻荷などへおまいりに行つた。

この日、芋餅をついて、かいこ神様やほかの神様、仏様にあげた。(二之宮)

八十八夜に草餅をついた。霜よけ餅という。この頃蓋が出はじめる。(小屋原)

九十九夜 この日はわかれ霜といつて、もちなどのかわりもんをして祝つた。(二之宮)

五日の節供(五日) コイノボリ 生まれた子供の祝いにもらったコイノボリを、早くから立てた。(泉沢)

コイノボリは嫁の実家や親戚からもらう。親類からは、嫁を置いてもらうように、吹き流しが贈られる。お返しには柏餅をやつた。(泉沢)
シヨウブモチ草 シヨウブとモチ草(ヨモギ)を軒下へ三本すつさして、魔除けとした。また、四日の晩にシヨウブ湯をたてて入る。女が先に入ればとはいわない。シヨウブ酒を造る人もいる。

シヨウブは赤堀の娘が十七歳の時に蛇になつたので、その魔除けにする。(泉沢)

モチ草は蛇が嫌がるので蛇除け。モグサをもむと、血止めになる。(泉沢)

シヨウブは火炎除け。モチ草は蛇の毒消しになる。(下大屋)
五月五日は三夜火赤城神社へお札をもらいに代表が行き、お札は各戸に配られた。(新井)

昔は男の子の初節句は座敷織が主で、竹にシヨウブを立てた。最近は吹き流しがなつた。織りの時は、きれいで、始末がよかつた。(飯土井)

初節供のときは、嫁の里からのぼりをもつててきた。むかしは外のぼりが多く、座敷のぼりはすくなかった。節供の人物ももつたが、これはすくなかった。

この日、シヨウブとヨモギをのき下三カ所にさした。これをふきこも

りといった。ショウアーブ酒を飲んだ。そうすると、女性はヘビの子をくだすという。(二之宮)

しようぶ園呂 風呂をわかし、その中(しようぶ)をとつて来て入った程度だった。戦争でやらなくなつた。(飯土井)

しようぶ酒 清酒の中へ、しようぶを切つたのを入れて飲む。(飯土井)五日の宵の晩だけ、女が東むきになつて、ショウアーブ酒を飲んでもよいといふ。この日は女の天下だから、東向きになつてもよいのだといった。

(二之宮)

ヤネットキ 五日の節句には、モチグサ三本、ショウアーブ三本ずつ、三と

人食いじいさんや、人食いばあさんが行こうとしたら、どの家にもモチグサとショウアーブが屋根にふいてあるので、わからなくなつて難を逃れたという。

男の子だから兵隊に行くので、新しい屋根をふいて出て行くともいわれた。(飯土井)

ショウアーブ・ヨモギを軒下に三とこ差しておく。屋根を葺くという。(下大島)

フキゴモリといきクズ屋のふき替が仕上つた時、大釜にワタリゲエを作つて甘くして、近所の子どもに飲み放だい分けてくれた。節供の時に嫁の里がえり 五日の節供は、嫁さんのお客様の最後で、この後は益まではいわないので。(泉沢)

夫婦仲がいいという意味である。(飯土井)

嫁は実家や仲人の家へ、タラの開きを一尾しばつて持つて行く。いわれば不明。(泉沢)

赤城神社の山開き (五日) 三夜沢の赤城神社がにぎやかだった。青年たちが湯の沢や滝沢まで来て、いっぱいの人出だつた。これで遊び日も終つて農業が忙しくなるので、よく出かけた。干し柿とかチ栗を土産

に買って、帰りに娘を柏川まで送つて行つたりした。(泉沢)

赤城の山開きで、区の代表が赤城へ登る。三夜沢の赤城さまへ、氏子代表が行き、お札をうけて来たものである。最近やらない。(飯土井)

三夜沢の赤城神社へおまいりに行つた。(二之宮)

八日は赤城山大洞湖畔の赤城神社が祭りでにぎわつた。家を朝三時に

出で九時には向こうへ着いた。以前、青少年団の結成式があつた。そのころは旅館が二軒しかなかつた。(泉沢)

昔は五月五日、今は五月八日に青年が登り、つつじを取つて来る。十六才の者は登らない。(二之宮)

赤城山の山開き、この日は赤城大洞の赤城神社へおまいりに行つた。

六才の者は登らない。(二之宮)

大洞の山開きは元は五月五日に行つた(今は八日)。山開きには必ず

行つた。三夜沢の赤城神社の例祭で代々神樂を見に行つた。(小屋原)

赤城大洞に、五月八日毎年歩いて登山した。(小屋原)

半夏生 半夏田植えをするなどしてこの日の田植えをさける。半夏

の日に田植えをすると三年続けて植えろといふ。(飯土井)

草の名で、荒子の五反田といふところの近所には、半夏になると半分

白くなる草がありこれをハンゲショウといつた。

ハンゲツタマというハグサで、半分しか毛が出ていない。ふえるとと

りきれないでのでかこの中に入れてとつて歩いた。(飯土井)

七 月

八丁ジメ 大字境へ竹に幣束を付けて立てる。厄病除けで、もとは神社の氏子総代が立てたが、今は区長が立てる。

よそから来た人に対する、「八丁ジメ越して来て何をいう」と押さええる。

旧六月一日に村の入口にあたる道々に竹にお札をつけて立てた。全部

で二十一本必要だった。このお札は坊主が作り、区長が立てて回った。

(富田)

旧の六月一日に、正坊院の住職が頼むよう、というので立てていく。

村の境で何か入ってきそうな所などに、隣保班に一つずつ合計二十一本立てる。厄病神がさわらぬようにということだから、個人の家ならか

こい、よその部落だとさえの神といっているものにあたる。(富田)

八丁じめは夏七月頃やつた。村境で竹を道の両側に立てこれにオシメを張り幣束を下げた。(下大島)

厄病除け(旧六月一日) アジサイの花を軒下に下ておく。病氣よ

けという。(下大島)

ハンゲ様 ハンゲの日には田植えをするな、もし、したら三年づけ

てやれといわれている。この日は、ハンゲ様という人がいそがしきて死んだ日。(東大室)

お蓋の口あき(一日)

昔はヤキモチを焼いたが、今はやらない。大



八丁じめ(富田)(朝岡紀三男撮影)



八丁じめ(荒子)(朝岡紀三男撮影)



八丁じめ(荒子)(朝岡紀三男撮影)

正のころまでは九月一日がお盆だったことで、八月一日がお蓋の口あきだった。(飯土井)

七日火 知らない。(泉沢)

この日はぼけのかまがあくといい、やきもちを焼いて仏さまに供えた。

(二之宮)

土用 百色の草を取つて来て、風呂に入れて入つた。(泉沢)

土用田植えは米がとれないからするもんじやがないといわれている。

この日は餅をついた。(東大室)

三台ある星台の土用干しを、毎年土用の丑の日にやつた。たくさん丑がはいれば、この丑に相談してやつた。(富田)

丁田稻荷 土用の丑の日には灯籠を付けて祭る。

米一俵取れるくらいの田があるので、その田をつくつて取れた米を上げる。お神酒を上げて、百姓のこと、養蚕のことなどを話し合う。頼むと、蚕が当たるという。



祭りの灯籠を貼り替えて用いる(泉沢)
(撮影 関口正己)

マユを五個ぐらいしばって供える。(泉沢)
ジリヤキ地蔵
七月二十三日 新地の地蔵様に
新地の地蔵様に
ジリヤキを進せて祝う。

(泉沢)

子育て地蔵
七月二十四日、鍛冶皆戸の地蔵様をお祭りする。この地

藏様へ三回お参りすれば、子供のない人も必ずはらむ。(泉沢)

石尊様
七月二十五日に代参で行った。行く前に水ゴリを広瀬川のサ

ンゲという所でとった。塩をまいて洗めてから青年が全部入ってやった。

「サンゲサンゲ、六根清浄、大山石尊大権現」と唱えた。

明治に一時やめて伝染病がはやったことがあり、それから休まずに行つた。二晩泊りで二人で行き、村中の家のお札を受けてきた。(下大島)

農休み
農休み(二十七、八日) 養蚕の具合によって、農休みの日取りを決

めるので、遅くなる。(泉沢)
麦刈り、田植えが終つて一息いた時に、八坂様のお祭りを兼ね「農

休みをする。また、田植え過ぎに雨が降つてよかつた時に「降り農休み」をする。(下大屋)

農休みは、初手三日、次二日ぐらに分けて休んだ。(下大屋)

もとは七月十五・十六日が農休みになつたが、これも大正用水ができる

て、かんがい用水が間に合つようになつてからのことである。田植えが終つて農休みになるのだが、荒砥全部の区長がきめて、村中にフレを出

してやることにきつており、「フレをまわさないと嫁さんは昼寝にもならないから」やる。(菫子)

農休みは仕事を休み、ふかしまんじゅうを作つて食べる。(泉沢)
餅圓の屋台
ずっと昔、屋台が東西に一台ずつあつたが、今は分解して神社にしまつてあるだけになった。屋台の名が残つている。(泉沢)
八坂神社
厄病除けの神で、二十八日に灯籠を付けて祭る。昔は下大屋の若い衆がお御輿を組いて、五、六回も通りを往復した。(下大屋)
三宝荒神
(二十一日) 灯籠を荒神様のまわりの道端に立てた。寺のうしろ位まで立てた。
火の神様だという。(小屋原)
公民館で浪花節や義太夫をした。

三宝荒神の祭りは七月三十一日が宵祭りでお祭り当番が灯籠を道に立てた。八月一日が祭りで三宝荒神へお詣りに行って、家で赤飯を炊いて祝った。(小屋原)

八月

八坂まつり(一日) 昔は八月二十四日にしたもので、厄病除けにする。天王さんを村中担いでまわつた。(坂土井)

天王さんをまつりこんでから道にしめなわをはる。(坂土井)
道祖神
他所村から厄病神が入りこまないようにするため、八月一日、

辻念仏
八月一日から七日まで毎夜。世話人が西及び東から一人ずつ

計一人出て世話をする。子どもたちが中心になつて太鼓をうち、珠数を

操る。これを山際組の四つの辻で行なう。そのうち初日と中日(四日)と終りの日の三日間は燈籠を厄病神から村内まで、稲田の町を轡つて二〇〇一三〇〇個つけるのでたいへんきれいである。また初めと終りの日には、念仏は厄病神でも行なう。なおこの念仏は大正十四年ごろ一旦やめたところ、翌年この村にチフスが七人も出たものだから、その翌年から復活して以後続いている。

なお厄神様には次の三個の石碑が建つてゐる。



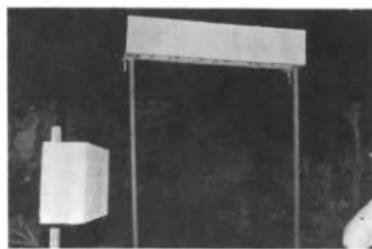
辻念仏の夜の疫神様（西大室）（金子緯一郎 撮影）



辻念仏の燈籠（西大室）（金子緯一郎 撮影）



辻念仏の燈籠の灯（西大室）（金子緯一郎 撮影）



辻念仏の燈籠（西大室）（金子緯一郎 撮影）



（金子緯一郎 撮影）



辻念仏の夜の人たち（西大室）（金子緯一郎 撮影）

西大室の山組では現在までつづいて辻念仏が行なわれている。八月一日の夜から七日間行なわれる。途中、雨などででききない日があると次の日に送られ、とにかく七日間は行う。世話人は、上・下の地区からひとりずつ出る。嫁を貰った若い人が世話人になるという。現在、行事は子どもが中心になつて行なわれている。

（富田）

西大室の山組では現在までつづいて辻念仏が行なわれている。八月一日の夜から七日間行なわれる。途中、雨などででききない日があると次の日に送られ、とにかく七日間は行う。世話人は、上・下の地区からひとりずつ出る。嫁を貰った若い人が世話人になるという。現在、行事は子どもが中心になつて行なわれている。

（富田）

- | | |
|-------|----------|
| ① 諸厄神 | 元治元年 |
| ② 瘡瘍神 | 元治三〇午年〇〇 |
| ③ 諸疫神 | |

- | | |
|-------|----------|
| ① 諸厄神 | 元治元年 |
| ② 瘡瘍神 | 元治三〇午年〇〇 |
| ③ 諸疫神 | |



田んぼの時に立てられた七夕様（朝岡紀三男 撮影）

ある四つの辻をひとつずつ廻って歩く。辻に着くと、太鼓を叩き、かねをならしながら、寄つて来た人たちによって大きなジユズは輪にひろげられ、手ぐりで少しずつ廻される。ジユズを繰りながら「ナンマイダンボ」と繰り返し唱えるのだそうだが、調査の夜（八月一日）には唱えどがなかつた。また、かねも殆んどならなかつた。ジユズの房のついでいる部分が自分の所に廻つてくると、その房で身体をそつとこする。厄払いのためだという。こうして四つの辻を廻り終えた一行は、厄神様の祝つてある小高い広場に引き上げる。部落から、この厄神様に通する田園中の道の両側には燈籠が無数に立てられ点灯される。人たちは燈籠の間を通り抜けて厄神様にお参りをし、厄病除けの御幣を受ける。ある年に、この行事をやらなかつたら厄病がはやつたのでまた続けることになり現在に及んでいるといふ。

七夕（西大室）

七夕（十七日）（十日遅れ）六日の夕方、色がみを切つて編み笠を作つたり、短冊を作つて「天の川」「七夕」などと書いて、簾竹に吊るす。辛つ葉の露の水を墨に使って短冊に文字を書いた。

七夕のとわたる舟の桟の葉に、いく秋かきつ露の玉づさ

流してしまう。田のふちに立てる家もある。（泉沢）
七夕（七日）この日は幼稚園へ行つて子供がやることで、八月十七日が七夕になる。ふかしまんじゅう（うでまんじゅう）をつくり、できたやさいのキユウリ・ナス・メロン・スイカなどを上げる。この日にはメズラ烟に入るものではない。テントウサンが式をするのだから入るだけをする。とか、一年に一回会うところへ行けばけがをするといわれた。（飯土井）
七夕には七回水をあびるといい。竹は田に持つて行つて立てる。雷が落ちないよう。メズラ烟に入つてはいけない。七夕様がメズラ烟にいるから。七夕には雨が降りたがる。降つた方がいい。素牛と織姫が逢うとうまくないからといわれている。
七夕様に雨が降ると、厄病神が天の川を渡つてこられない。だから七夕には雨が降つた方がいい。（西大室）
星まつりで、この日、雨が三粒でも降つた方がよい。厄病神が生まれないからといわれている。
七夕かぎりは川へ流すが苗間の水口に立てた。こうすると稲に虫がつかないといわれている。（東大室）
盆によつて日がきまつたが、月おくれでやるときは八月七日でよかつた。ところが養蚕の都合から盆を七月に変え、再び月おくれにして、しかも十日おくれということになつたりしたために、七夕を何日にするのか混乱してしまつた。トロロッコもどの日にするか混乱して、ようやく八月七日にすることに落ちついた。幼稚園児がいるとき七日にする。（荒子）
七夕は「天の川届の風に霧はれて、空澄み渡るかさきの橋」というように、織姫が一年に一回会える日なので、届くらいの風で霧がはれる。昼間降つて、夜晴れる方がいい。七夕には降る方がいい。雨乞いの意味がある。

衝立を出して、子どもの着物を掛けた。子どもが丈夫になるよう。

川で朝飯前に頭を洗う。(二之宮)

七夕には里いもの葉の露を集めて墨をすり、短冊に書く。

うどん、ふかしまんじゅうを作る。

早朝、川で髪を洗う。

七回水をあびる。川に出たり入ったりして、「だめだ、オメーは七回なんねえ」と言われて、唇が紫になるまでやっていた。

翌朝、竹は田の端に持つて行って立てる。稻に虫がつかない。

七夕にメズラ(長いフロー、三尺メズラ)という煙に入つてはいけない。

七夕様がメズラ煙であつており、恋の邪魔をしてはいけないから。

七夕の朝に墓掃除する。墓地掃除は七夕に決つていて。

七月七日が盆のふたあく日で、赤城山から仏様が来る日という。(小屋原)

供え物には笹竹を飾った縁側に青物(ナス、キウイ、トマト、メロ

ンなど)、菓子、まんじゅうなどを重節に盛つて供える。

七夕の日に墓の掃除することになっている。(泉沢)

七夕に髪の毛を洗つと、汚れがよく落ちる。ちぢれた毛もよく伸びるし、短い毛も長く伸びるという。



盆棚

2段に組立て、四隅に竹を立てる。上段に先祖、下段に子供の位牌を祭る(西大室)(関口正己撮影)



盆棚の飾り(富田)

(朝岡紀三男撮影)

盆棚(十三日—十六日) 十三日の朝

盆迎えの前に、組立て式の盆棚を組み立てる。四隅に四本の笹竹を立て、チカヤの縄を

張り回らせる。縄は上二—重に回せので、約一ささら必要。

縄に杉つ葉や色紙を下げる。

棚は上下二段で、上の棚に新しい盆こざを敷いて、仏壇の位牌を出して並べる。盆こざは神葬祭の家ではマコモを

七夕から以後は盆まで、洗濯をしない方がよい。(西大室)
七夕様がメズラ煙で行き合つてメズラ煙に入つてはいけない。(泉沢、西大室)
七夕にメズラ煙に入つてはいけない。素牛、織姫が逢つているから。

(荒井)

ここでは七月十七日にする。新竹をきつてきて、天の川などの短冊をつくつてさげた。七夕のおかざりは、水田の水口にもつて行って立ておいた。ここでは川へ流さない。

七夕の日には、七回水あびをするもんだといった。

七夕の晩には、薬師様に灯籠がついた。各家から竹をもちよせて杭にして、それに灯籠をつけた。(二之宮)

墓掃除 七夕の朝やるのが例である。(二之宮)

数珠廻し 七夕の日に、西組のものが、「名すつ毎戸出で、「なんまいなんまいだんば」といながら、庭で廻す。数珠の輪の中に、家の人が入ると、厄病よけになる。(二之宮)

下の段には、上の段へ上れない仏様、無縫仏や子供の仏などを祭る。(泉沢)

盆棚はオモテザシキの南隅に作る。組立式の二段の棚で、四隅に新しい盆竹を立て、チガヤの繩を張り

めぐらせて、杉の葉を三、四本垂らす。生うどんの巾座いものを掛けたまゝ供える。

馬を供える。(西大室)

ナス、キユウリで馬の形を作り、トウモロコシの毛で尻っぽを付ける。

十四日にはウドンの中広いものを「仏様のしょい繩」として、盆棚の繩

へかけた。(泉沢)

盆棚の上には行灯、線香、果物、お茶等を供える。芋の葉の上にナス、キユウリで馬を作つて、井にお水を供えて置き、杉の葉を束ねたものをして、馬に水をかけてやる。寺へ盆アチに行つた時に貰つてきた

ひき茶(粉茶)をお水に入れて、食事ごとに供える。(西大室)

盆棚にはマコモのゴサを編んで敷くが、最近は新しい花ゴサを買つて使用するので略するようになつた。(西大西)

おはぎを膳にのせ、萩の箸を添えて盆様に供えた。(西大室)

盆花は特にかまわないので何でもいい。仏(教)の家では造花の盆花をかざる。(飯土井)

チガヤの繩、盆棚を作つた時、使用したチガヤの繩の余りは、廊下の柱に掛けておく。(泉沢)



盆棚の上段

先祖の位牌を並べ、茶、水、ナス、キユウリの馬を供える。(西大室) (関口正己 撮影)

供え物 造花の盆花を供えたり、生き花を花びにさして供える。寺からもたらしたお茶を供え、線香を上げる。

ナス、トウモロコシ、カボチャ、スイカ、メロンなどの野菜が果物を供える。里イモは葉ごと上げた。

ナス、キユウリで馬の形を作り、トウモロコシの毛で尻っぽを付ける。

盆花は特にかまわないので何でもいい。仏(教)の家では造花の盆花をかざる。(飯土井)

チガヤの繩、盆棚を作つた時、使用したチガヤの繩の余りは、廊下の柱に掛けておく。(泉沢)

盆棚の上の段には先祖様の位牌を出して並べたり、仏様の掛軸をかけたりする。下の段には子供で死んだ者の位牌を並べる。(西大室)
家によつて適宜つくる。神事祭は粗相まつりと云ふもので、竹を四本立てて棚をつくり、ご幣束を切つてつくる。まわりには柳を使つて下げる。新盆は神主さんを頼んで拝んでもらう。(飯土井)
盆棚は十三日に作る。竹四本を柱にして、板棚にゴザを敷いて位牌を出す。
千ヶヤで繩をなつて四本柱を結び、それに色紙、杉葉を下げる。
萩の箸、盆花を四本柱に結びつける。
ナス、キユウリで馬を作る。先祖様はそれに乗つて帰る。ナスとフロー
を賽の目に切つて、重箱に入れて供える。馬の飾になる。
盆壇の古い蓮の造花も供える。盆が終ると馬と一諸に墓地に持つてい
く。(小屋原)



盆のチガヤ繩

盆棚を作つた残りの繩を外廊下に掛けておく。(泉沢)

(関口正己 撮影)



新盆棚の下段子どもの位牌を祭る（西大室）
(開口正己 撮影)



盆棚の下段子どもの位牌を祭る（西大室）
(開口正己 撮影)

で、アカリをつけて墓に迎えに行く。（下大屋）

飾ったのは、お墓に送るとき一緒に送る。迎えるとき麦わらは燃さない

馬を作つて

業にナスで

とトイモの

お盆の

と同じであ

る。お盆の

お膳など供

物は先祖様

と同じであ

る。お盆の

マコモを編んで敷く（西大室）
(開口正己 撮影)

お盆のときには、仏壇から位牌を出して、盆棚にかざるので、仏壇はからになるが、盆のあいだは、留守仏にと、仏壇にもこちそうをあげる。（二之宮）

無縫仏 どこにも行かな

いで死んだ

人の仏、位

牌は盆棚の

下に飾る。

下に飾る。

新盆棚のマコモを編んで敷く（西大室）
(開口正己 撮影)

仏壇 新しい蓮の花を供え、ルスチに飯等も供える。

（小屋原）

盆棚に飾って、留守になつた仏壇には、別に供え物をしない。（西大室）

ノマツリ していない。

盆棚の下の段に子供（一人前にならずに死んだ者）を並べて、カボチャなどの供え物をする。（西大室）

無縫仏は庭先に薪を立てて、アンコロモチをあげる。（小屋原）

新盆 別の棚（机）を作り新盆様の位牌を置いて、供え物をする。

十三日寺へ新盆迎えに行く。茶碗一組、カズシヨウリ（竹の皮ぞうり）、米を三角袋（七杯袋）に入れて、お金を包んで持つて行く。

十四日は寺で施餓鬼をするので、預め寺世話人が経費を集金し、新盆の家人が集まる。

十五日には僧侶が新盆の家を回つて棚経をあげてくれる。（泉沢）

以前は新盆の時に白提灯（新盆提灯）を座敷の外へ庭に面し吊るしたが、最近は下げない。高灯籠も立てない。（西大室）

新盆見舞 新盆見舞には、親戚のもの、近所のもの、友人などが来る。むかしほうどんをもつて行った

が、最近はお金をもつて行くようになった。このときのあいさつは「（お）ちらさまでは、新盆でおさみゅうござります」という。

（二之宮）

新盆の挨拶 「結構なお盆でおめでとう」ざいます。

（二之宮）

「お宅でもこの度は新盆でお淋しゅう」ざいます。

（泉沢）

新盆は盆棚と別に棚を作

り、普通のゴザの上にマコ
そのゴザを置き、位牌を乗
せる。位牌が乗るだけの簡
單なゴザを作る。

盆棚と同じものを供え、
白い提灯をあげる。

（小屋原）



新盆の棚経盆の十五日に僧侶が回る。（西大室）
(開口正己撮影)

組、縁故者など、葬式に立
会つた人は全部行つた。す
と以前は近親者は米ふつ
うは粉をひと重箱持つて行
き、「新盆でおさみしゅう
がんす」と挨拶した。ウド
ンを三把くらい持つて行く
よくなつたのはひかく的

新しいことで、そのころはすべて「お返しなし」だった。一飯出した。
現在は線香立てに行くのは五百円、一般もらうような関係なら千円以
上で、肴折箱と酒をくれ、飯を出す。おかえしとして砂糖くらいはつけ
るようになつてている。（飯土井）

寺と縁側から座敷に上りおりする。（西大室）

生き盆 嫁をもらった年には、盆の前に実家へ行き、近所の人を呼んで、施主になつてご馳走してくる。嫁には新しいゆかたをこざして行く。（泉沢）

お盆の時、嫁と婿が嫁の実家に行くことを生き盆という。（小屋原）

盆迎え 寺へ提灯を持って盆迎えに行き、迎え火の火種をもらつくる。（最近は寺からマッチをもらつてくる。）カイドへ麦わらを立てて、提灯の火で燃しつけて迎え火をたく。（泉沢）

ノマワリはしない。（泉沢）

神葬祭の家は盆迎えはしない。仏（教）の家はちょうどちんに火をもらつて来る。

新盆の時は、墓場へちょうどちんを上げて拌んで来る。（飯土井）

盆迎えには、重箱の上に、金は二鉄とされた粉をとどけると、寺がすまんじゅうを風呂敷につつんで返した。寺が二之宮の無量寿寺に移つてからも、同じことをした。（二之宮では、マッチを入れてよこした。数年前から、村としては仏事は神葬祭になつて、寺にあつた位牌などは、すべて赤城神社に移した。だから、現在は、盆迎えもほとんどが神社へ行くことになった。イツケによつて、まだ二之宮へ行く家もあるが、その比率は約三対一である。神社のはあいは、拌んでいしんのひとつとお灯

明をつけかけて、消して家へもつてきてあげる。神社ではマッチを一つずつくれる。無量寿寺に迎えに行つたときは、道中にあるから、小さなローリーでは終えてしまつた。（荒口）

盆棚は十三日につくる。盆花と盆ごはは毎年新調した。棚をつくるのにつかうなわにチガヤ（前日にとっておいた）でつくつた。盆むかえはこの日に、子どもとかとしょりが、お寺へ行く、提灯をもつて行って、お寺の本堂で火をうつしてきた。火が消えるとまたつけなおしてきた。この辺では、門火はたかない。火は直接盆棚にうつした。盆むかえのことを、盆ぶちといつた。

新盆の場合には、二つの棚をつくつた。（二之宮）
盆の入り（十五日）に門口で麦わらで門火をたいて、先祖様をお迎えする。

お寺へ弓張提灯を持ってお迎えに行つた。（小屋原）
盆の十三日に寺へ盆アチ（盆迎え）に行くと、寺ではひき茶（粉茶）

をくれる。ふつうは一袋、新盆の場合は二袋くれる。お茶は紙に包んで盆棚に供えて置き、食事のたびにお水を入れて盆様に供える。(西大室)

盆送り 塔婆・線香・水・果物・花・竹などを持つて墓場へ行く。石塔に水をかけ、新聞紙を燃して線香をつけ、三、四本ずつ墓に配る。送り火はたかない。(泉州)

ナスの馬を作つて、三本辻や墓場へ出す。送り火はたかない。(ト大屋) 送り盆には盆棚に使つたシメや竹、お供えのナスの馬などを持つて行き、墓地の入口におき、墓場へお参りをする。食べものを供えることはしないので持たず、オサゴと水を供える。

仏(教)の人たちは線香、オサゴ、水を持ってお参りに行く。(飯土井) 送り盆には飾り物、供物を墓地の各石塔に進ぜる。(小屋原)

十六日の朝、盆様にお茶を上げて盆棚の前でお茶を飲んでから、送り出す。カドにコムギラを立てて、かがり火をたく。この時に「ネアツハレモンチキン」(ト)と唱えて鬼をなぐと、はれ物ができるといふ。一旦、家へ戻つてから、次にお墓へお参りに行く。お墓では火はたかない。(西大室)

お盆様の馬の餌として、ナス、インゲンなどを刻んで供える。(西大室) 盆送りは盆棚の下の段に飾つて置いた古い盆花を持って送り出す。

(西大室)

おくり盆は十五日の夕方のところと、十六日の朝のところである。送つて行くところは、それぞれの家の墓地。むかしは門火をいたた。

ナスでウマをつくつた。足はクワセ、しつぽはトウモロコシのチング。

ウマのえさとして、ナスをきさんものをイモツバの上にのせて墓へもつて行つた。また、十五日の昼に、うどんをぶつて、盆棚の前のツナにひつかけた。これはクマのしょいなわ(背負い縄)だといった。ナスのウマは墓場の石塔(ご先祖様か、新しい仏様の石塔のところ)のところへあげてきた。

また、盆おくりのときには、昨年あげた盆花(造花)のとつておいた

ものも、一緒に墓場へもつて行つた。今年あげた新しい盆花は仏壇の中に入れてとつておく。(二之宮)

盆踊り 十六日するが、見ている人はないくらいに、みんな踊つた。「盆の十三日に踊らぬ者は、子でもはらんだか、半産でもしたか。」(泉州)

盆おどりを八坂さまなどでやる。青年が師匠を頼んでけいこをして、盆のシマイ日にした。天王さまのお祭りやお盆にしたもので、大正ころから八木節になつたが、それ以前は自由だった。(飯土井)

盆踊りは小屋原ではほとんどしない。一里半位の範囲内まで踊りに行つた。上泉のヨタイ様へはよく行つた。(小屋原) 盆がら十七日、この日はべつに仕事は休まないが、盆のあいだの遊びづかれで、盆がらをすべえという程度。(二之宮)

盆中の禁忌 稲生はなるべく内ばにする。しかし、暇だから川へ魚を取りに行つた。(小屋原)

盆のぼたもち 盆踊りの唄に「盆にやはたもち、昼間はうどん、夜は米のめし、とうなす汁よ」というのがある。これは、この辺の盆のあいだのこちそうをうつたるものである。また、ふだんは仲が悪いという娘と姑が、盆のときだけは仲なおりをするという。それは、盆にはばたちを沢山つくるが、このころはいたみやすいので、姑が娘に対して、ほめたちをくえ、くえ、といふ。そのため、姑と娘の仲がいいら(平)になるといった。(二之宮)

百万遍 盆の翌日、来辺寺でやつた。青年が中心になり子供が沢山来ていく。家の人は出て来て厄豆をいただく。棊儀に幣束を立て、七色の菓子をのせる。これを最後に駒形の境まで送り出す。はやり病いを村中から送り出すという。村境に三角形の芝山があり、ここにオシメを立てて送り出した後をぶり向かすに帰つてくる。(下大島)

川施餓鬼 中川原で、色紙を切って、坊さんが拂んで川に流すのをみたことがある。水神様を祭っていたが、現在はない。

灯籠流しをすることはない。（富田）

地蔵さま 八月の農休みに、アサヒ地蔵でネンツモウシの老女が念佛を唱える。ジダグリとして行なうもので、当番が五人で世話をする。（西大室）

諏訪神社 二十五日 灯籠を付けて祭った。（下大屋）

九月

八朔（旧八月一日） 八朔の節供 隘時の農休みで、嫁が赤飯とショウガを持って、嫁の実家へお寄り行く。節供返しに筈、ミケー（目籠）、ザル、ザマ、エカキ（大サマー）などの収穫をもらつて来る。そのいわれは不明。（泉沢）（下大屋）

ホカゲ、初物ができる時に、神様に上げたり、実家へ持つて行つてくれたりする。（下大屋）

嫁は里へ赤飯とこぼうをもつて里帰りをした。これをたのもんげえといつた。こぼうのいいのをもつて行くと、いい百姓だといわれた。これは、嫁の親元へのご年貢としてもつて行つた。おかえしとして、めかえとか、えかきをもつた。（二之宮）

八月一日は八朔の節供という。この日は嫁が赤飯とゴボウをとつて、里帰りをした。そのおかえしは、嫁の実家の器量に応じてやるが、筈をよこしたり、えかきとかかいこざる、桑みざるをよこしたりした。またこの日は、仲人の家にもなにかもつて行つた。（二之宮）

旧八月一日の八朔はショウガの節供ともいう。嫁が実家に帰る日で、ショウガのかぶつに水引きをかけて、砂糖をのせてもつていく。実家ではその返しに、糞を買つてもたせる。（富田）

八朔は赤飯を炊いて祝う。嫁は来てから三年間位は実家に帰る。ショ

ウガとゴボウを土産を持って行き、実家からは節供返しにメケー・ザマなどの竹細工を持たせる。（小屋原）

ショウガの節句八朔の節句という。オンカ晴れての休日。新しい嫁さんが、夫婦で里に帰る。砂糖の折にショウガを一本添えて持つていく。

嫁の実家では、収穫に使う、桑を入れるエカキをお返しにする。

ザマはエカキに籠目のいたものであるが、これはお返しに使わない。ザマを見ろだから縁起が悪い。糞もお返しに使つた。（小屋原）

八朔の節句のことをショウガの節句といい、嫁はショウガを持ってお客様に行く。「ヨメゴガショウガネエ」ということだともいわれるが、実家からは、ショウギや、ミ、メケエなどを土産を持たせて帰る。「早くミゴモルよう！」といふことだとう。（荒子）

オクタンチ、ハツグンチ、カクンチ、シメエグンチ、むかしは、オクタンチごとに休んだ。（二之宮）

千手観音の縁日で灯籠をつけた。（二之宮）

十五夜（旧八月十五日） ススキ五本と花を花びんにさして、縁側に出し、丸め物（だんごなど）を作つて供える。

カキ、ナシ、サツマイモ、里イモなどを茶ば台にのせて供える。

以前は子供が竹の先に釘をつけて、供え物を下げに来た。（泉沢）ススキは五本あげる。つかしまんじゅうなどまるいものをつくつてあげた。ほかにサツマイモなどもあげた。供えたものを子どもがさけに来た。

十五夜に雲があると、小麦ははずれるという。

この日はまた、八幡様のおまつりの日で、ヤツコラセノセがあつた。

（二之宮）

すすきをかざり、オテダメをつくり、つかしまんじゅうをつくつてお月見をする。昔はもちをつくつたりした。（飯土井）

竹の棒に釘や針をつけて、供え物（糞頭や果物など）をついた。（糞井）

十五夜と十三夜 旧八月十五日と旧九月十三日にする。ツキミモチを

供える。子供がヤスで供え物をとつて食べて歩いた。とられた方がいい。

十五夜の月見をすれば十三夜もしなければならない。カタミツキはあるなという。他所へ行つても必ずやつた。

十五夜は、十三夜晴れれば小麦があたるという。(小屋原)

十五夜と十三夜には、よそに泊るものではないといわれた。泊ると片見月を見るといふので、よくないと、たいがい泊らないでおそくも帰つてきた。湯屋などでは、十五夜の晩は客がすくないといわれた。(富田)

彼岸 以前は里芋をうんと作っていたので、里芋を煮て仏様に供えた。

「芋は陰の儀」といって食糧として大事にされたので、芋がないと仏様が心配するから、必ず供えた。(西大室)

天道念仏 春彼岸の中日に吹地の墓地で行なう。昔は他の村々でも行なつていたが現在は富田のみになつた。昔は一昼夜念仏を唱えたが現在は一日だけになつた。朝日の昇る前に坊主がお経を上げそのあと村人が交代で太鼓、鐘をならしながら「ナンマイダ、ナンマイダ」とつづける。夕方になると又坊主が来てお経を上げるとそれで終りとなる。

この由来は明らかでないが、伝染病を防ぐためだとされていた。(富田)

十一月

十三夜(旧九月十三日) 十五夜と同じように練闇に供え物をする。

ススキ三本、まんじゅうを十三個供える。

「片見月はするな」といって、十五夜にお客に来た人は、十三夜にも来る。

「十五夜に畳あれども、十三夜には畳なし」もしも畳ると、天下が乱れるといつ。

「十三夜に雨が降ると、シブが湧いて小麦が取れない」(泉沢)

ススキを三本、まるめもん(おてまるなど)、野菜類を供える。(二之宮)

十三夜に畳りなし。晴れると小麦があたる。(下大島)

十一月

神無月 旧十月に神様は出雲に行つて、留守はお釜様がする。オカマのルスンギョウと言う。六日、十六日の二回、オカマ様にホタルモチを供えた。子供が十六人いるから小さいのを十六個供えた。供えると火難に逢わない。

又、神様の旅立ちの日にはどこの方角で何をやつても差し障りはない。

(小屋原)

(小屋原)

旧暦の十月は神無月で、神様は出雲の大社へ行く。神様が出雲へお客様を行つた留守に、なにかごちそうをつくつた。ごちそうは、米粉でじりやきでもつくつて、ながしのところ(しめがはつてある。これをおかさまといつた。このしめをゆるくはると、その家のおかみさんはおふふで、しつかりはると、おかみさんはしまつだといった)にごちそうをあげた。これをおかまのすんぎょうといつた。(二之宮)

お神送り(旧十月一日) 朝早く鎮守様へお参りに行つた。男でも行つた。(泉沢)

神送りの日にお手まるを三つ作つて神棚に上げると災難に合わない。

(東大室)

あぶらもち えびす・大黒が一番早く出雲から帰つて来るので十月一日にえびす講をやり、十一月一日には神さまたちが帰つて来るのでその夜あぶらもちをつくる。あぶらもちといつてもふつうのもちをつくる。

(飯土井)

神様が出雲から帰つてきた晩に油餅をつくつて食べた。餅をついて、油でいためた糞をつゆの中に入れ、餅をきりこんでにて食べた。むかしの行事で、現在はしていない。(二之宮)

旧十一月一日は、お神迎えで越社の明神様にお参りに行つた。その日

は油もちを作った。白の中に油を注ぎ、その中で餅をついて「油もち」を作った。(今井)

オカマノルスンギョウ 餅・ボタ餅・赤飯などを作って食べる。出雲の神の所へ、カエルが餅をしょって行くといい、ボタ餅をカマブタの上に上げて供える。ふつう、家で餅・赤飯などを作って、神様に上げないで食べる。(泉沢)

神無月(旧十月)には神々が出雲へ行くが、オカマ様は子供が三十六人もいて連れて行けないので、留守居をしているから、オハギを作つて供える。オハギは釜の蓋に盛つて供えた。(西大室)

これを「オカマ様ノルスンギョウ」という。(西大室)

旧十月には神様が出雲大社(集まるので、留守居にボタ餅を作つて藤膳をした。(下大屋)

十日度より後だが日は不定。オカマ様お勝手や炊事場の端の棚に登つてあり、子供がたくさんいるんで、皆が留守の間にたんと食べると、二つそをつけて進ぜた。(下大屋)

「オカマ様が留守だからボタ餅でも作つて食べろ」「焼き餅をさんざ鏡いて食べろ」といつて、オカマ様に進ぜた。(下大屋)

旧十月の神無月には、神様が縁組みの相談で出雲の国に行くのであるが、釜神様だけは残らないと食べに困るので残っている。それで十月は、お釜様のルスンギョウといい、六日、十六日、二十六日は丸めたものを作つて供える。普通はたもちをする。

神様が居ないから何にしても、ばちがあたらない。さわりがないといわれていた。(今井)

オカマサマ(かまどの神)は、神々が出雲の国へ行つてしまつた時に留守を守つてくれるるので、「うんめえもの」をつくつてくれる。ヤキモチのようなもので、黒砂糖をつけて食う程度の料理である。(飯土井)

オカマサマは旧十月に三回祝つた。オカマのルスンギョウという。釜のふたにボタモチを十二個あげて供えた。(下大島)

留守居のボタモチ 神無月にはオカマ科に留守居ボタモチを三回あげる。カマブタの上にあける。月の数だけあげる家もある。(下大島)

オカマ様の下げ穂 麦や穀が実のつて刈り始める時に、それそれ十二本ずつ取つて来て、オカマ様の柱にかけて供えて置く。下げ穂は外さずにずっと置く。(西大室)

のどに魚の骨などがささつた時に、これでこすると下がるという。(西大室)

お神迎え(旧十一月一日)かなり遠くの神社までお参りに行く。総社の明神様まで行く人もあり、オンカデ(公然と)遊びがてらに一日がかりで出かけた。(泉沢)

総社の明神様へ迎えに行つた。昔は前日の夜は、前橋で芝居を見て、オコモリをし、翌日、神迎えをして帰つてきた。(日はいつだつたか忘れた。麦まきをすませてからだつた。)(東大室)

神社へ朝早、家の主人がお参りに行つた。神様が出来から帰つくる日である。これをお神むかえといつ。ここでは、お神むかえはしない。(二之宮)

旧十一月一日に総社の明神様へ迎えに行つた。

留守神はオカマサマで、三宝荒神が残るという家もある。「オカマノルスンギョウ」という。(荒井)

十一月一日に、もよりもよりでグルーブをつくつて総社(神社)へ神迎えに行く。みんなが行くというものでもない。(般土井)

十四日夜(旧十月十日)、わらを繩でかこんでトオカソ棒を作り、子供が地面をたたいて回る。モグラ退治の呪いで、地面をたたくとモグラがもぐらない。

唱え言「トオカソ棒 トオカソ棒 夕飯食ツチヤ トオカソ棒」トオカソ棒はカキの木に掛けて置くと、カキがよく成るという。(泉沢)

子どもがトウカソ棒をつくつて、庭をたたいた。もぐらが掘らないように固める。ひつばいたあとわらじを作つて麦がよくとれると

いった。(飯土井)

トーカンボーで、もぐらが通らないように土をたたいた。「トーカンボー トーカンボ、ヨーメシクツチヤブツタタケ」といって、たたいた。(東大室)

十日夜のものは久しぶりのもちで、ひとくちにムコウップチまで食つちやつて、「アンコが入つていなかつた」といった人がいるが、アンコの入つているところをひと口で食えればアンコが見えないはずだと、いまもいい伝えられている。(新井)

旧十月十日に餅を作る。ワラでトウカンボーを作つて、子供が組内を叩きまわる。モグラ退治といふ。イモカラを入れるといふ音がする。

「トウカンヤトウカンヤ、アサソバキリにヒルダンゴ、ヨーモチクッチャ、ハラデーコ」とか「トウカンボー、トウカンボー」と歌いながら、地面を叩いた。(小屋原)

十日夜には、色の違う餅を玄米とで一色作つた。

トウカンボウというワラ鉄砲を叩いたが、自分の家位をやるだけだった。

「十日夜、十日夜、十日ノ餅幾ツ食ツタ、十食ツタ。遠クノ山ヘヒリコシタ。」

モグラがもぐらない様にする。(下大島)

供え物 餅をついてカラミ餅にして食べる。新米の餅の食い初めとなる。

餅は大きく丸めて盆にのせて神棚へ供える。

十日夜は大根の年取りといわれ、大根が大きくなる。蓋の当たる家の大根を取つて来てお餅に上げて、餅と一緒に神棚へ供える。よその大根を取つて、川を越すとだめだといふ。大根を取られた家でも文句はいわない。

また、月見大根といって、大根を市場へ出した。(泉沢)

旧十月はお神が留守になるので、十日夜を祝うという。

十日棒でドジ固メをして回り、手が届く所に進せてある餅を貰つて行くこともあつた。(下大泉)

麦まきが終つて、畑の穴フサギのために、十日棒で地面をたたいて回ると、モグラが逃げるという。(下大屋)

縁組み餅 十日夜の餅は縁組み餅、夫婦餅といつて、うるち米の粉餅と、もち米の餅と二色ついて祝う。神様が上方へ集まつた留守につく。

(下大屋)

縁組み餅だから朝早くつく方がよいので、午前三時から六時ごろまでにつく。神様が「アレトコレト」といつて縁組みをしているうちに餅をつけ、しまいになると忙しくて、「アリアコリア」となるから、いい縁にならないといふ。お供え餅のようになり、もち米の白い餅の上に、黒っぽい粉餅を重ねて、神棚に進せた。(下大屋)

十日夜には餅をついた。夫婦餅といつて、「うすづくものだ」といつた。うすぬきでおそなえもちをつくつた。これでからみをもちをして食べな。餅(おそなえ)と大根一本を縁組に机の上にのせて供えた。そのおそなえもちをむらの若い衆がとりに来た。若い衆は山刈りにその餅をもつて行って焼いて食べたといふ。十日夜の餅をとつて行くと、自分でもらいたいと思つてゐる娘と一緒にになれるといわれている。また、十日夜に供える大根は、かいこの上作の家のものとつてきてあげると、蓋があたるといつた。なお、十日夜は大根のとしりといつた。

むかしは、十日夜には高崎の清水の觀音様へ、若い衆がおまいりに行つて、泊つてきた。(二之宮)

大根の年取り 十日夜には又大根を取つて来て、泥のまま軒下や縁側へ方でかけて進ぜた。十日夜から、もう大根を取り始めてもよい。(下大屋)

オトウカ山にオトウカ(狐)が沢山いた。十日夜の夜餅をつくと、オトウカがさわいで困るので、九日の夜に餅をつくことにしていた。さわいでよく「オトウカがつく」といきらつていた。十日夜のわらで作つ

たドカンボで地面をたたきながら「トウカニヤ、トウカニヤ、オムグラ
サマノオマツリダ。」と大声で歩いた。(今井)

九日夜 東大室の多田地区は一日はやく、九日夜。桂川の東一帯の地区が九日夜である。昔、源義経が東北へ落ちるとき、ここを通りはやく餅食べたいというので、一日はやく十日夜の餅をついたためだという。(東大室)

イノコモチ トウカニヤに一臼作って食べた。(箕井)

秋祭り(十七日) オクンチ秋祭りの日をオクンチといつて、三日あり、初クンチ、中ノクンチ、シメエグンチという。重箱に赤飯を詰めて、神社へ朝早くお参りに行く。夜中の十二時が過ぎると「オクンチに行つてくべや」といって早く出かけた。神社に用意してある盤台に、重箱の赤飯をあけて、お供物として少しあげて来る。そのうち大勢の参拝者が来るので、盤台が赤飯で一杯になるから、お返しもいっぱい返してやる。(奥沢)

鎮守の祭の前夜、十月十六日の晩はオコモリで、若衆が神社に集まつて境内で火を燃して、えらい騒ぎをした。参道にはご神灯を三十七も四十もつけた。その夜は神社に泊つて夜ふかしをした。家々からは、十七日朝早いほどよいといって、夜中の十二時を過ぎると、赤飯をふかして重箱に入れたものを持って、競走でお参りした。拝殿にある盤台が赤飯でいっぱいになつた。(新米を供えるわけだが、まだ新米はできなかつた。)(泉沢)

旧十月の九日をオクンチといい、初クンチ(九日)中のクンチ(十九日)しまいグンチ(二十九日)といい、部落どうして日をちがえて招ばれて行つたり来たりしてお祭りをした。いまは十月十七日やつてある。(飯土井)

オクンチの日には、子どもたちが活やくしたもので、村中まわつて供えられたものを集めて、桑の木の根つ子をころがして集めたりして燃して食つたりした。十二時すぎになると畠のサツマイモを掘つておいたのを

焼いて食つたりしたもので、生焼けのイワシを食つたりすると声がかれてしまつて翌日声が出なくなつた。縁の下にはいこんでかくれていて、供えられた重箱がすぐに空になつて返されたことがあるが、子どものしわざである。(飯土井)

神社の境内で一晩中火を燃して、青年たちが祭の世話ををして、旗を立てたりした。(泉沢)

オクンチに村内では本家・新宅でも行き来はせずに、近所の親戚が来る。各部落によつてハツグンチ、ナカゲンチ、シメエグンチと決めており、小原屋はシメエグンチで旧九月二十九日、新で十月十七日にする。

十六日の晩に青年が稲荷神社に集まつて、大門までの道の両脇に三十分メートルおき位に灯籠を市てた。種油だつたので回り歩いて、消えた灯籠に火をつけた。

山の開懃の時などに出る根の切り株や桑せを各家で用意しておき、青年が荷車で集めて神社へ持つて来て一晩中燃した。各家では切り株が出るオクンチの為にとておいて、青年に出了た。

十七日の早朝、村人がコワメシを神社へ持つて来た。早い人は一時頃持つて来る。青年がこのコワメシを食べる。沢山あがるの腹一杯になる。コワメシが来るのを待つ間に寒いから火を燃したのである。根を集めると間にサツマイモをかづらつて来て焼いて食べたりした。

コワメシを食べると、火の仕末をして各自家に帰る。

各家庭では赤飯を炊いて、星敷稻荷、大神宮などに供え、稲荷神社にも供える。末社にも供える。

山車のある所は出した。山王が盛んだった。(小原屋)

オクンチは十月十七日のナカゲンチにする。村内はよびっこをしない。

山王様にポンテンを立てた。ワラに幣束を立て、それが屋根の上に出るよう竹の棒につけて高く立てた。

片貝から屋台を借りて十六日に村中をひいてから、山王へひいていった。山王では七カ村からの屋台が集まり、盛大な祭りになつた。この祭りのことを決めるオマツリ会議を十五夜にした。

下大島、山王、西善、東善、中内、谷田、両家の七カ村です。もとは天川大下も入つていた。各村から屋台を出した。

山王様の境内で競馬をした。下大島以外の村から一頭ずつ出して了一番先に到着した馬の村が縁起がいい。

下大島はご神馬を出して、ヤブサメをした。山口家の本家から出した。西善からはサラ獣子を出した。子供がやり、カンカチがついた。サラはオクンチにやるだけで他の時にはしない。昭和の初期にして以後は出ない。

東善からはダイカグラを出す。また、ミコシのまわりのシメ刀で切る。シメキリも東善から出す。多胡家の人がカミシモを着てやつた。(下大島)

エビス講(旧十月二十日) エビス、大黒の像が箱に入ったものと、掛軸に書いてあるものとがあり、座敷に出て祭る。エビス様は「稼ぎもしないで拌んでも金がたまるか」と笑っている。大黒様が手に持つ桶は、ものぐさ者の尻をたたくためだといふ。(下大星)

椀にご飯を山盛りにして油揚をかぶせる家もある。サンマとてんがら、ケンチン汁、お神酒等を膳にのせて、一膳作ってエビス様の前に供える。

「俵ヲアゲル」といつて、油揚しを千ピヨウで巻いて綾に戻して俵の形に作り、六個積み上げて供えた。

財布を一斗ますに入れ、金がたまるよう新しい俵を敷いた上に供えた。(下大屋)

農家では一月のときよりさかんにする。宝物、ありがねを全部あげる。財布の口をあけてしんぜろという。そうするとお金を取りためてもらえるといふ。

「ちそつは天ぶらをつくつてあげる。(二之宮)

えびす講は十一月二十日。俵を編んで、その上にえびす様をまつた。供えものは、さんま、いわし、てんぶら、ケンチン汁のほかに次のものを持った。

柿(財布をかきとるよう) 熊手(かきあげるよう) かぶ(大かぶ主になれるよう)、大きいものを) タネゼン(百万倍にして返えしてくれるよう)に拌む。(東大室)

お日待ち(十一月三日) 朝日が出ないうちに餅をついて、縁側へ供えて、天道様にあげた。(泉沢)

庚申マチ(十一月のカノエサルの日に行なう) トタンの簡に入つた庚申様を祀る。その年にとれたモチ米で、ボタ餅を作り、互に強いて合つて食べる。ほかに精進料理なども作り、食べながら夜の十二時まで雑談をする。地震のあった時には、「二回やらねばならない」。(上増田)

赤城神社のおのぼり(十一月初辰の日) 赤城神社の神様は、年寄りの神さまと、若い神さまがいて、あつたかくなると、年寄りの神さまが山のすずしいところへ行って老い神さまは山からおりて来られるという。逆に寒くなると、年寄りの神さまが山からおりて来られて、若い神さまが山へのぼられるという。その交代の日がおのぼりの日で、四月と十一月の二回あるという。(二之宮)

秋休み(サキ) 麦の蒔き付けが終ると、米の粉の焼餅にしょっぱいあんこを入れて作り、モグラがもぐらないよう縁側や玄関へ供えた。(下大屋)

モグラップサゲに麦まきが終つたあと、ボタ餅を作つた。(東大室)

麦まきが終ると、穴っぽさぎといって、ほた餅を作り、嫁さんの家へ、秋あげ、麦まきがおえ、米にしてから、嫁をお客にやる。姑さんがいるうちはやる。(二之宮)

ニアガリ餅(秋上げ)と同じ意味で、秋仕事のモミスリが終つて、庭を使わなくなつてから、庭上りの餅やボタ餅を作る。キナコと小豆の二色

のボタ餅を手土産にして、若夫婦が嫁の里方へお客様に行く。(下大屋)
ツジユウタンコ 脱穀の時に、足もとにこぼれたモミを集めて粉にひいて、ダンゴにした。日は不明。(泉沢)

ニアカリが終ると、油餅と兼ねてツジユウタンゴを作った。

モミを二いて干し返しする時、こぼれた米を別にして手でふるい分け食べられるようにした。もしろをはたいてからやることで、土まじりのモミを、真縫を卷いた棒でたてて取り出した。その米を粉にしてこね、丸い形と握った形と作り、二個をカヤの墓に突つして、勝手、屋敷桶荷、便所、井戸、物置などや、窓、入口にもさした。子供が取つてもよい。

ツジユウタンゴは米二升ぐらいは作った。カヤにさして、みそを塗り、いろいろの火の回りに立てて焼いて食べた。(下大屋)
ツジユータンゴは干しものをして、こぼれた米を拾いつめ、米粉にして、ダンゴを作った。(東大室)

するすびきも終り、むしろつばたきをして下に集まつた米をはきまとめて粉にして、これでつくたんだんごをツジユウタンゴという。(飯土井) チジユウネジ(十一月三十日晚) ツジユウタンゴを、庭にこぼれた米を石臼でひいてダンゴにした。俵べしに進ぜた。(下大島)
屋台 富田に屋台が三台あって、夜だけ引き出した。初婚は屋台引きに出ることになっていて、ハナ入レ(お金)を包んで行った。屋台は神社の前でお参りさせた。(泉沢)

十一月

師走 「師走女は角が出る」といわれる。それというのも昔は縄をつくり、これを糸にして、くくって染め、織り上げて布にして、着物につくつて着せたので大いそがしだった。(飯土井)

川ビタリ餅(一日) 昔は川ビタリ餅や油餅などを作つたが、もう忘れてしまった。
太子粥も聞かない。(泉沢)

ツジユウタコの翌日(十二月一日) もちをついて、おそねえ(お供え)のよつたものをつくつて川神さまに進ぜた。(飯土井)

川ビタリ餅は川へ子供が転がり込んでも、アンジャネエ(心配ない)よう、餅を洗濯に行く川棚の川神様へ進ぜた。(下大屋)

油餅を十二月ころついたが、いつかはつきりしない。(下大屋)
十二月のはじめ、もちをついて、あづきのあんでくるんで半紙に包んで、川へもつて行って、川神様にお供えした。家の近くの川へもつて行つてあげた。(二之宮)

アブラモチは旧十二月一日につく。普通の餅にあんを入れる。開口イツケのみ朝に作り、他の家は夕方に作る。(下大島)
シワス八日(八日) メケ(籠)の中にヒイラギを入れ、竹竿の上に付けて庭へ立てた。トボロの両わきにもヒイラギをさした。シワス八日は天から悪魔が下るので、悪魔除けにする。(ダイマンとは言わない)。

「どんなに忙しくも夜ナベをするな、きょうは休め」といつて、仕事を休んだ。
「水も鳴ラサヌコト八日」という。(下大屋)

コト八日 メカイザルにヒイラギを入れて、竹竿の先に付けて立てた。(泉沢)

すじまい メケエにヒイラギを入れて、庭先に立てた。この日夜なべ仕事をやすんだ。(二之宮)

福荷まつり 十二月十五日に福荷まつりをする。お仮屋をつくりかえて、おこわとおかしらつきで祝う。イナリサンに供えてすぐ下げてくれないとまつり直しをした。ふつうは犬猫が下げてくれた。青年の夜学があつたところは、その帰りの仕事として裏からクネをこわしてイナリサシから下げる歩いた。上げかえしのときは火を入れてかえしてやつた。

十二月十五日だけ祭る。もとはわら宮だったが、今は石宮になつたので、世話がない。(泉沢)

屋敷神ともいって、オバ屋を毎年作り替える。全部新しく替えずに、古い竹を幾本か残して屋根に使う。下にわらを敷いて赤飯やイワシを進ぜる。(下大屋)

稻荷祭(十五日)

この日、石宮の稻荷様の場合にはしめなわをはり、わら宮の場合にはこの日つくりかえる。竹の柱をつかい新藁でたてかえ。供えものは、赤飯、尾頭付き(イワシ・ない場合はサンマで代用)、みどりふ(四すみをきりおとしてあける)おさこ・塙。供えものした場合にはうしろをかりかえらないで帰ってきた。供えものが早くなくなつたほうがいいといつた。供えたものは近所の子どもがさげに来た。供えものが残るとやりなおしするものだつた。

稻荷様を日向にだすなという。これは財産が終ることである。

つぶれ屋敷の稻荷様は、そのあとを繼いだ人がうけついでおまつりをする場合がある。

屋敷様は、屋敷の乾のすみにまつるのがふつう。分家の場合には、神主におがんでもらつて分身祭をする。(二之宮)



屋敷神

12月15日にオカリ屋を作り替て祭る(関口正己撮影)

稻荷まつりは十一月五日にしてしまつ。稻荷様の
ワラ宮を下げる。とられる方がいい。(下大屋)

稻荷まつりは十四日にする。下長磯も十四日である。
稻荷様と八幡様のワラ宮を作り替えて、赤飯、イワシなどのお頭付き、豆腐等を供えた。この供えた物は下げられた方がいい。翌朝まで下げられていないと一度やり直しをする。

子供が村中をとりつて下へ歩いた。主人が稻荷様に供えて拌んでいる後に待つてになりした。「拌むまで待つてろや」と言われた。中には尾頭付きで、胴は家で食べてしまつて尾と頭だけを籠の串でつなげて進せていた家もあつた。こういう家のは下げて来てもつまらない。その家は物置が火事になつてから胴体が付いた。

昔は九月十五日にやつた。(下大島)

稻荷祭りにはオカマ様の柱から裏にシメ縄を一本張る。毎年一本ずつ張るので、その家が幾年たつたかわかるほど、たくさん掛つている。こ



オカマ様のシメ縄と下げ穂(正月のシメ縄をかけて置く。稲沢)(関口正己撮影)

のシメ繩は屋根替の時に、屋根のグシをまるくのに使う。(西大室)

十二月十五日のオイナリマツリの晩、若い衆たちは、供えてあるイワ

シを下げる歩いて辻ごとにわらを焼いて食べて歩いた。(荒子)

冬至(二十二日)「冬至トウナス」といって、トウナスを煮て食べる。コンニヤクは一年中の砂払いになるので、煮て食べる。

コサ(本蒸)になる木は、方位をかまわず伐つてよい日。(泉沢)

冬至には一年中の砂バレエ(払い)といつて胃袋の掃除をするのでコ

ンニヤクを食う。

冬至トウナスといつてかばちやを煮て食うこときまっていた。

ユズを食う。特にエビスをつくる。ユズをおろしておろして、こ

まなどを入れて粉をこね、にぎってふかしてつくった。(飯土井)

この日コンニヤクとトウナスを食べた。コンニヤクを食べると眼中

が一年間たまたま砂をはらいだすといつた。トウナスを食べると、中気に

ならないといった。トウナスのことは、冬至トウナスといって、前から

とつておいた。(二之宮)

天神講 十二月二十日。子供が、卒業学年の者の家を宿にして行なう。半紙に「奉納大満宮」と書いて、カモイにはつた。五目飯を作つて食べる。誰談をして夜を明かす。翌朝「奉納天満宮」と書いた紙を焼やして、天

神様のお宮に納めるところもある。この日の料理は、宿の人の指導を受けながら、いっさい子供がやる。(上増田)

歳暮 嫁の実家と仲人のところへ歳暮を届ける。仲人三年ということはもある。初めては小さめのショウビキだった。子どもが行けるようになつて子どもに背負わせて行けば小さいをもつてお歳暮に行くと五銭くらい、多ければ十銭もらえる家もあつたので十軒も行けば五十銭になる。親の実家へ行くのは平気だが、おじおばの家というのは恥ずかしくて行きすらかつたものだった。それでもザシキに三十本くらい貼つてある家もある。(飯土井)

新宅から本家へとか、よそへ出たものが親元へお歳暮をもつてきたり。さけがふつうで、これを、座敷の天井にさげておいた。お歳暮をもつて

くるのは、十二月二十日前後、「二十五日以降になると、おそいほうであつた。お歳暮はなるべく、早くもつて行くものとされた。(二之宮)

節供歳暮 三年はするものだという。五節供といふのは

一月一日(現在は四日)、三月三日、五月五日、七月七日、九月九日。

(二之宮)

すすはき 日はきまつていないが、おそらくも二十八日までの間に粗相なことですすはきをした。春のすすはきはカイコが出るからきれいにす

るが、幕はかんたんにする。(飯土井)

お松迎え 日は不定、赤城山へもし木を取りに行つた時、お松を取つて

て来たり、三十日に餅をついたあと、川原の松を取つて来たりした。(泉

沢)

門松は「お松迎えに行つてくるか。」といつて近くの山から切つてきた。

この地区では山を持つていないう人が半分位はいるがお松のことなら山主がゆるしてくれた。赤松の三階の枝をとつてきたり。しん松は立てるもの

ではないといわれていた。

一夜かざりはするなどいわれていて、おかざりは十二月二十八日か二十九日に済ませた。(東大室)

門松取りは二五日位に赤城山へ取りに行く。女松(赤松)の芯のあるもので三階か五階のを取つてくる。三階が多い。(小屋原)

オホシメナイ(二十三日) 秋の彼岸から翌年春の彼岸まで夜ナベコをして、繩を七ボーカ十五ボもなつたり、シニウロウタやケデエを編んだりした。オホシメナイがその年の夜ナベのアガリ(最後)になる。(泉

沢)

オーヒメナイは二十八日。「一夜飾りはするな」というので、シメ繩を

作って、三十日には飾り付ける。（泉沢）

十一月二十八日は一日がかりで、オーリーを作つてお飾りをした。表座敷にはナガジメを張り回らせた。ナガジメには、ワラを三、四本ずつと下けた。（泉沢）

オカオガクシはワラを七・五・三に下げる。コジッコメという小さいシメ繩をたさん作つて供えた。（泉沢）

オカマ様に掛けたシメ繩は、そのままためて置いて、屋根替の時、グシをまるくに用いた。（泉沢）

正月飾り 三十日にする家が多い。二十八日にする家もある。一夜飾

りはしない。（筑井）

餅つきと同じ日にする。お松はおかざりの一日ぐらいい前とつてきておく。暮賣いもんは伊勢崎まで行つた。こんぶとか、さけ・おしゃきなど正月用の品物を買つた。（二之宮）

器用な人は、ワラで宝船を作つて年神棚の前に供えた。（泉沢）

一夜飾り 長谷戸の布施川家は一夜飾りの家例で、三十一日に正月飾りをする。

父親が戦争に行っていたので餅だけついて待つていたら、三十一日に帰ってきたので正月にすべえと飾つたので一夜飾りにする。（小屋原）

オシメ 三十日につくる。門松は大きいのを一本、あとは枝の小さいのをつくる。進せるのはオマツにしたので十五もあれば大変だった。村に共有山があつたのでそこからとつてもいいことになつて、ムシキ（燃料）になるほどいる人がいたので枝だけに制限した。（飯土井）餅つき 今は九十九パーセントの家が機械でつき、臼は殆ど使わない。臼の下にワラを沢山しいた。餅が臼から落ちても汚れない為の用意だという。（筑井）

三十日に正月の餅をつく。（泉沢）

一夜かざりはするものでないといつて、この日に餅をついて、おかざりをした。二十八日ごろからつくらもある。（二之宮）

二十九日、三十一日にはやらず、三十日が多く、場合によつては二十八日もある。八日もある。

白の下にワラを十文字にちらして入れる。これは白のすわりのいいよういうことを汚れないためにするという。家によつては白にシメをはる。

オソナエは最初のウスでとる。年神、皇太神、神だや、仏、勝手、床の間、大黒さまなど十二組とつたこともある。（飯土井）

餅をつく日 正月十四日若餅、二月初午のマユ玉・餅、三月節供、五月節供、六月薬の三度休みのフナ餅、オ蚕アゲ餅、十五夜、十三夜、十日夜、十二月三十日正月の餅（下大屋）

年の市 大胡の市は三、八の日なので、二十八日は行つて、はき物などを買つて来た。

お神の鉢は小鉢ともい、白木のものは毎年買ひ替えた。漆塗のものは、毎年は買ひ替えない。七つ鉢という、七個組んで組み合わせになる丸鉢もある。（泉沢）

幕市 伊勢崎のシマイ市（幕市）は二十六日、この日にふろしきを背負つて行つて、正月の用意のものを買つて来たもの。足袋、下駄、着物、桶、柄杓、オシラキなどを背負つて帰つた。（飯土井）

供える器 幕市でオシラキを買つ。丸いものである。気ついた者は五枚くらいの組物になつて、小鉢を買つて供えものに使つ。（飯土井）大晦日（三十一日） ミンカラソバ 年越しソバともい、夜ソバを食べる。「ナスガラを燃すとネズミがふえる」というので、ナスガラは田んぼで燃してしまい、家へは持つて来ない。

家の回りの掃除をする。（泉沢）

風呂をたてて入り、ミソカラソバといつてソバを食う。大晦日にはあまり早く寝てはいけないといつたが、ふつうでも早くは寝られなかつた。ナマス、キンビラ、などをつくつていておそくなつた。（飯土井）この日早く寝るとしらがが出来るという。夜おそくまで、いろいろ火を

もやして起きていた。お茶でも飲んで夜ふかしをした。(二之宮)
晦日そば 大晦日にはソバを食べて、この日、早く寝るとしたらがは
えるとか、年を早くとるといった。(二之宮)

まる火 大晦日と正月十四日の晩は、「まる火をたく」といって、米を
二合ぐらいたいて、たいただけ神様にあげる。全部男しゅうがやる。(二
之宮)

(1)

五重塔の遺跡

二宮赤城神社境内の社殿東北、宝蔵庫の間に二間四方位の礎石の
跡があるが今は埋まつて見えない。これは大正年間神社の大祭の余
興として飾物の小屋をかけようとして掘った時に発見したもので、
平らな切石二十一個が一メートル八十五センチ平方に敷きつめてあ
る。中央の石はほぼ正方形に、その中央には直径四十五センチ深さ
十八センチのおわん状にくりぬいた舍利孔がある。塔の心柱は直徑
約七十五センチでその上にのついたと考えられる。神社所蔵の明
和五年子ノ三月二十五日公儀に差出した図面の控によると五重塔跡
とあり、鎌倉時代の遺跡と考えられる。

(2) 多 宝 塔

社殿の北西隅に高さ一メートル四十七センチ程の多宝塔がある。こ
の塔の特徴は基礎石から宝珠にいたるまで全部漆が塗られているこ
とである。多宝塔は赤城南面に数多く見られるが、漆塗の多宝塔は
県内他に類例を見ない。時代も鎌倉時代と学者の説ほは一致してい
る。昔は今のところより南の方にあったようである。

多宝塔といふのは法華經の見宝塔品によるもので仏陀がこの經を
説いた時、地下から七宝の塔が湧きあがつて中空にかかり、その塔
の中の多宝仏が半座をゆすつて仏陀を塔内にまねいたとある。その
多宝仏を安置したのがこの塔で、多くの宝を授かるという信仰であ
る。多宝塔には重層式と、單層式とがある。(一宮神社の多宝塔は單
層式である。重層式多宝塔で最も雄大なのは、朝鮮仏国寺にある八
世紀新羅時代の多宝塔である。私は数回ここに行き親しく鑑賞感嘆
した経験がある。(故六弥太登良麿述)

二宮赤城神社境内の遺跡と文化財